



# 福岡市美術館 研究紀要

## 第6号

岸田劉生と木村莊八の描いた「妻」について

吉田暁子 1

【報告文】平成28年度福岡市美術館大規模改修工事に  
先立つ美術資料等の輸送

渡抜由季 11  
宮田太樹

【資料紹介】満州の甲斐巳八郎  
雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事③

中山喜一郎 19

『雲中庵茶会記』翻刻稿②

後藤恒 71  
岩永悦子  
宮田太樹

2018 年



口絵1 岸田劉生《手》1916年、似鳥美術館



口絵2 木村莊八《妻の肖像》1915年

※『現代の美術社主催美術展覧会』カタログより転載  
(本文註18参照)。





口絵3—1 机を用いた収蔵棚の代用



口絵3—2 巨大キャンバスの巻き取り後



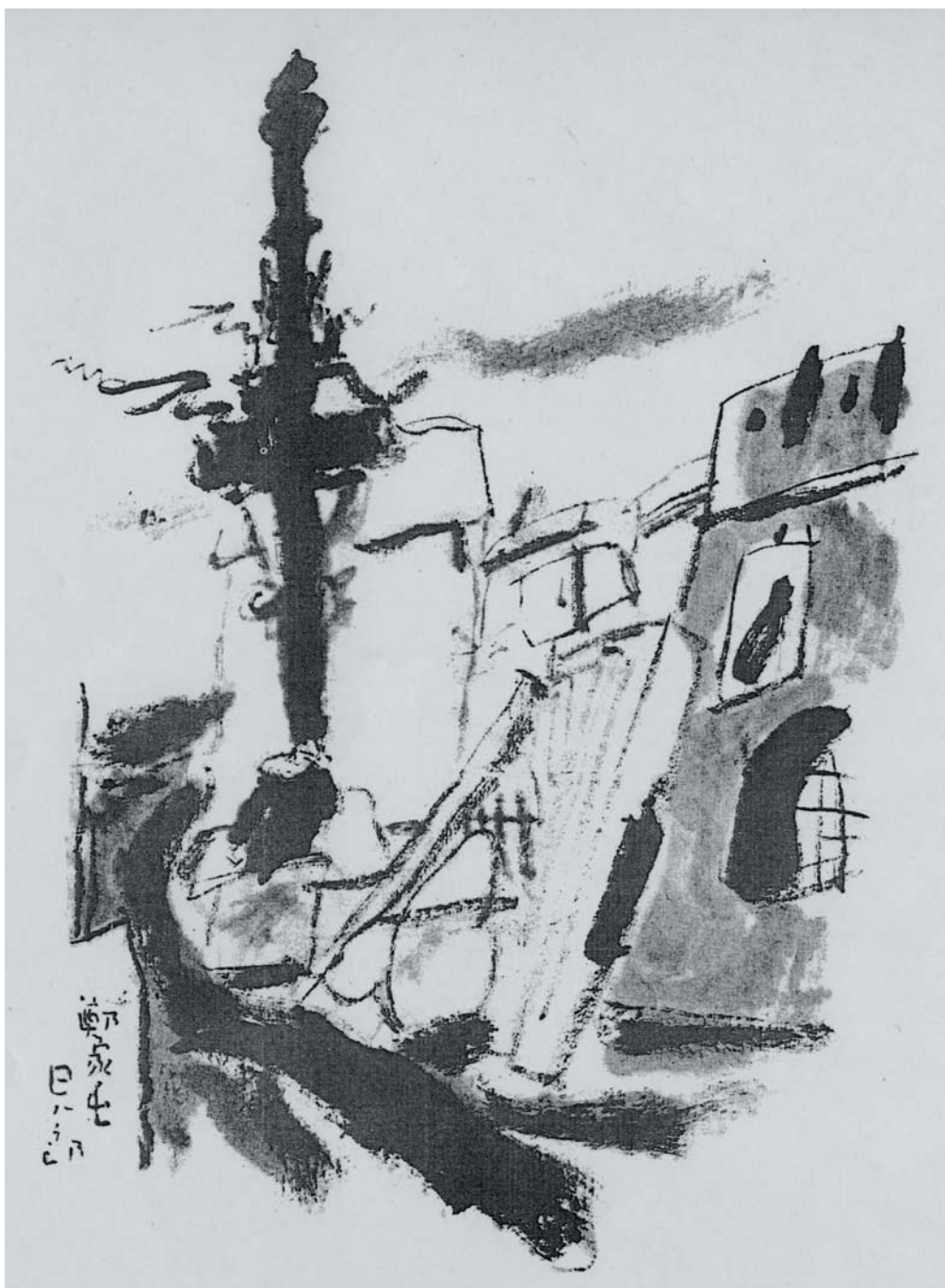
口絵3—3 巻き取ったキャンバスの輸送



口絵3—4 トラックヤード内での木枠制作



口絵3—5 門型クレーンによる彫刻の輸送



口絵4 甲斐巳八郎「鄭家屯」(『協和』第116号)



# 岸田劉生と木村莊八の描いた「妻」について

吉田暁子

本稿では、岸田劉生と木村莊八が大正期に描いた「妻」をめぐる画像について考察する。岸田と木村はどちらも1913（大正2）年に結婚し、個展や1915（大正4）年に立ち上げた草土社の展覧会などに自らの妻を描いた作品を出品した。これらの作品は、フュウザン会出品作に代表される大づかみな筆致と鮮やかな色彩による作風を離れ、石井柏亭に「出直し」<sup>(1)</sup>と称された緻密な作風に移行した時期に位置する。彼等はこの後、それぞれの画風を確立していくこととなるが、画面には既に、異なる造形上の関心や資質が表れている。また一方で、自らの配偶者をそれと分かる形で描いたという両者の共通点に目を向けるなら、日本の絵画史におけるこれらの作品の特異な位置が浮かび上がる。画家が自らの配偶者を描いた肖像画は西洋では古くから知られるが<sup>(2)</sup>、近世以前の日本ではほぼ見られない<sup>(3)</sup>。さらに、対物写生が一般的な画家の手段となる近代以降、配偶者をモデルとして描くこと自体は増えたと考えられるが、画家との関係を明示して描かれる場合ばかりではない<sup>(4)</sup>。その中で、岸田と木村によって短い間に集中的に描かれた「画家の妻」（あるいは「妻の肖像」）は、どのような意味を持つのだろうか。

考察を始める前に、本稿で扱う「描かれた配偶者」が例外なく女性である点に触れておきたい。本稿準備段階において、女性の画家が男性の配偶者を描いた作例を近代日本絵画の中に見出すことができなかったのがその理由である。見逃している作例についてはご教示を仰ぎたいが、著名な画家の多くが男性であるという母数の違いを勘案しても、女性が男性を描くケースは圧倒的に少ないといえる。児島薫「岡田三郎助と女性画家、および妻八千代との関わりについて」（『岡田三郎助 エレガンス・オブ・ニッポン』佐賀県立美術館、2014年、161-169頁）によれば、明治期において女性の画家が人物画を描くことは、子供を描くという例外を除けば男性画家の領域を侵犯する行為と見なされたというが、女性作家による文学作品における男性の描写を思い浮かべてみても、女性画家による成人男性の画像は少ないように思われ、女性画家の活動に対する社会通念的な抑圧の存在を示唆する<sup>(5)</sup>。後で見るように岸田と木村による「妻」の画像は、モデルの従順さを強調する点で、性差によって女性の活動を制限する社会のありようと基本的には一致する。そのような特徴を看過することは、「妻」の絵画化というテーマの野心的でもあり、それゆえ認識の限界をも露呈する試みとしての位置を捉え損なうことになるだろう。本稿ではその試みについてごく部分的にしか捉えることはできなかったが、岸田と木村の人物画や、人物画以外の画題の展開を考える上でも、「妻」の絵画は重要な位置を占めたと稿者は考えている。以上を踏まえた上で考察に移りたい。

まずは岸田劉生による《画家の妻》（図1）を見てみよう。着衣の女性の胸から上を描いた肖像画であり、大きな目、高い鼻梁と頬骨といった顔貌の特徴が捉えられている。髪を後ろでまとめ、紺色の無地の着物をまとう質素な装いで、目を伏せ胸に手を当てたポーズは敬虔さを感じさせる。胸に当てた手は左手であり、薬指には指輪の描写がある<sup>(6)</sup>。画面左上に完成日である1914年8月18日が記され、1914年10月6～15日に開かれた「岸田劉

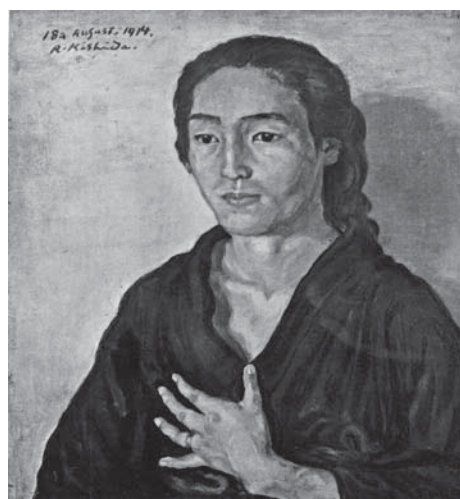


図1 岸田劉生《画家の妻》1914年  
※武者小路実篤『劉生画集』平凡社、1962年より転載。

生作品個人展覧会」(京橋竹川町・美術店田中屋)に出品されたのを初出とし、同年の第14回異画会美術展覧会にも出品された。モデルとなった妻・秦(しげる、旧姓小林。漢学者小林良四郎とシンの三女で鏑木清方に日本画を学んでいた)とは、1912(大正元)年に彼女が第1回ヒュウザン会展で岸田の作品を見、手紙を送ったことから交際が始まり1913年7月に結婚している。

岸田による「画家の妻」と題される油彩画は、本作品以外に3点が知られ、1914年から1915年に集中して描かれている<sup>(7)</sup>(図2~4。画面に記されたそれぞれの完成日は1914年10月3日、1914年11月16日、1915年1月10日)。いずれもモデルの胸から上と片手を描いており、10月3日に完成した作品に右手が描かれる以外、画中の片手は左手である。10月3日完成作(図2)は8月18日完成作(図1)とともに《画家の妻 II》として田中屋での個展に出品され、同展を見た石井柏亭は「『画家の妻』の二枚は共に真摯な佳作である。私は其稍故とらしく胸部に当てられた手を好まないが、顔は両つながら善く出来て居る。特に赤黒いバックを有った一枚は調子から何から皆落着いた大人びたものであった」<sup>(8)</sup>としている。1915年1月10日に完成した作品(図4)はアーチ状の枠、白い半襟などに装飾性が見られるが、他の作品は無背景で、無地の衣装も一致している。これらの作品の構図や綿密な描写は、当時岸田が数多く描いていた自画像や友人等の肖像画と大きく異なるものではない。しかし、結婚生活をめぐる岸田の旺盛な執筆活動は、岸田にとっての「妻」という存在の大きさを物語る。

岸田は秦とのかわりを、絵画に先だって文章によって表した。代表的なものとしては小説形式の「結婚迄」(1913年)や「ある夫婦」(1914年)<sup>(9)</sup>などが知られるほか、交際から結婚に至る軌跡を綿密につづった日記<sup>(10)</sup>が残されている。心の動きを克明に記し、断定口調で綴るスタイルは武者小路実篤の影響を示していると考えられており、『白樺』との出会いを「第二の誕生」とまで述べた岸田の人生観—自己の欲望を肯定し、「仕事」をしぬくことでそれを正当化するというもの—が全面的に主張されている。その中で秦との恋愛は「思想も興味も喜悅も苦痛もあらゆる生活の中に彼奴が滲んで居るのだ」(日記、1913年4月21日)という全存在をかけたも



図2 岸田劉生《画家の妻》1914年  
※『没後50年 岸田劉生展』東京国立近代美術館、朝日新聞社、1979年より転載。



図3 岸田劉生《画家の妻》1914年、高知県立美術館



図4 岸田劉生《画家の妻》1915年、大原美術館



図5 岸田劉生《裸体習作》1913年、笠間日動美術館

のであり、また自分が彼女を導くという意識を伴うものでもあった<sup>(11)</sup>。そこに「結婚」が重要な意味を持っていたことは、たとえば互いの恋愛感情を確認してから最初に蓁と会った際の会話を記した日記の下記の文章などから分かる。

「貴方、私と結婚して下さる？」

「え？」彼女の顔に一寸怒りがひらめいた。「私御答へしませんわそんな事、解ってるぢやありませんか」

「だって、結婚のきれいな方があるもの、ラブだけして居て」

「まあ」二人は顔を見合して笑った。(1913年4月10日)

「ラブだけ」の関係を否定するものの、岸田にとって結婚の根拠は「ラブ」以外になく、例えば子供を残す手段といった観点ははっきりと否定されている。「ある夫婦」において「自分達夫婦の〇〇は殆ど絶対に子孫の生殖といふ事に使命がない事を感じて居た。只御互の『愛』を育てるために、御互の霊を肉によって創造するために、御互のほんとに心と肉の快樂の為にのみそれが使命を感じて居た」(伏字は引用元に基づく)とする岸田は、妻との性交渉について、また自分の性欲のために妻が疲労することへの不満や「女郎」を買った方がいいのではないかという半ば本気の煩悶についても赤裸々に綴る。妻の妊娠を知った岸田は、まず「自然は飽く迄俺を苦しめ様とする。奸略を重ねて、とうとう俺を陥し入れた」と動揺し、「自分の性慾やすべての慾求の結果として生れさせられた子供にも心があり肉体がある慾望もある。そして運命がある。自分の心はそれを思ふと耐らない」という「悲痛」を記している。

妻の妊娠と子供の誕生は、自己の欲望の所産であり、他者の人生を左右する点で自らの「罪」を強く思い起こさせる問題であった。彼の苦悩は、突出した自意識の持ち主であり、また幼少期に数寄屋橋教会へ通ってキリスト教的世界観を身につけた岸田固有の問題であると同時に、家同士の関係性や第三者による仲介を経ず、恋愛のみを根拠とする結婚における苦悩であり、それは山崎正和が「大正初期といふ時代は、それほどまでに青年達を人生の場所から追ひ立て、とりとめない虚空のなかで、しかも自己といふ確実なものであれといふ、矛盾した要求をつきつけてゐたのである」<sup>(12)</sup> というように、当時の若者が共通して直面した社会的なよりどころのなさを前提としていたとも考えられる。1914年4月10日、麗子の誕生を迎えた岸田は「ほっとした。そうして、一時に、実に、一時に、自分の父親の本能が目醒た。はっきり己は父親のとうりだと思った」、「子供よ美しくなれ。美しくなれ。丈夫に育て。俺達はきっと御前を生涯愛してやる」と日記に記すが、友人らの証言によれば、その後も1916(大正5)年に肺病を宣告され死の覚悟を余儀なくされるまでは、世捨て人のように家を出て暮らすべきではないかといった悩みに苦しめられていたという。

妻の肖像とは別に、岸田が妊娠した妻の身体を描いたと考えられる作品がある。1913年11月29日の日付を画面に持つ《裸体習作》(図5)は、腹部の張り出した様子と描かれた時期から妊娠中の妻を描いたものと考えられている<sup>(13)</sup>。また《画家の妻》と同じ田中屋での個展に出品された《黒き土の上に立てる女》(図6)、《南瓜を持てる女》(図7)には、胸をはだけ、下腹部を腰紐で締めた姿で大地を踏みしめる女性像が描かれるが、張った腹部の描写は妊娠状態を表しているようにも見える。これらの女性像には、同時期に描かれた《エターナル・アイドル》や《人類の肖像》といった画題とともに、象徴的な意味合いが込められていると推



図6 岸田劉生《黒き土の上に立てる女》1914年、似鳥美術館



測されてきた。岸田が妻の妊娠に、彼自身の全ての行動の原動力となる欲望とそれによって生み出される罪、「自然」との相克といったテーマを見出していたことを考えれば、これらの象徴的な人物画に、妻の妊娠と出産という出来事が反映されていたと考えても無理はない<sup>(14)</sup>。

一連の「画家の妻」と《黒き土の上に立てる女》などの象徴的な人物画は、後に「クラシックの感化をうけ過ぎ」としているとして岸田の自選年表からは全て除外されている<sup>(15)</sup>。この時期の岸田は、現実空間を再現する絵画では表現しきれない無形のテーマを表すべくもがいていたと考えられるが、妻の妊娠がそこに重要なモチーフを提供した可能性はある。岸田を「見える『かたち』を写すことを通して見えない『かたち』(アイデア idea)を求めつづけた画家」とし、岸田の1916年頃の肖像画におけるデュラナー受容を中心に解き明かした田中淳氏による論文<sup>(16)</sup>の言葉を借りれば、この時期の岸田はヨーロッパ古典絵画に感化されたアイデアの「かたち」を通して、変化し続ける自らの内面という「見えないかたち」を画面に定着することを試みていた。その試みの中で「妻」とは、彼にとって本質的なテーマを内在させる形ある存在として、特別な位置を占めていたといえる。

1916年に制作された《手》(口絵1)は、岸田が妻をモデルに描いた作品の中で、最小限の要素によって対象の本質を表すという、同時期に描かれ始めた静物画にも指摘できる方向性を表す作品である。画面全面に人物の左手が描かれ、画面右上に「手・10・Nov 1916 R」と記される。手の甲に付けられた陰影と、人差し指と中指を伸ばし親指、薬指、小指を内側に曲げるポーズにより、ふっくらとした甲と先端に向かって細くなる指との対比が際立ち、細い手首の描写とともに骨が細く丸みを帯びた手の特徴を印象づける。武者小路実篤『劉生画集』(平凡社、1962年)に収録された本作品のカラー図版には、岸田の娘・麗子による以下のような解説がある。

「これは母の手である。母の手は小さくて可愛い手で、手の甲にピョコンピョコンと笑くぼがで、爪は小さな桜貝のようだ。

私が小さい時母がよく自慢し、それはいつも、お父様がお母様の手は笑くぼができて可愛いとおっしゃった、とか、しげるの爪は小爪ばかりだとおっしゃったとかいうたぐいであつたが、その言葉のなかに、母の手をいつくしむ父の愛とそれを喜ぶ母の心が感じられ、私は母の自慢を聞くのが好きだった。」

「手」というモチーフの持つ象徴性に岸田が注目していたことは、人物画における手の描写や静物画との関連において既に指摘されており<sup>(17)</sup>、妻の「手」のみを描くという選択は、こうした関心の表れであると考えられる。「手」のみを緻密に描き出し、愛撫の対象としての好ましさを存分に表現することを通じて、岸田は象徴性と生々しい質感描写を融合させる独自の手法に、新たな深みを加えたように見える。

次に、木村荘八による《妻の肖像》(口絵2)を取り上げたい。本作品は「現代美術社主催第一回美術展覧会」



図7 《南瓜を持てる女》1914年、石橋財団ブリヂストン美術館



図8 木村荘八《壺を持つ女》1915年、愛知県美術館

(事実上の草土社展第1回展、10月17日～31日、於銀座読売新聞社)に出品された<sup>(18)</sup>。全身像で描かれた女性は、左上の壁に架けられた肖像画と左手で支える横に倒した風景画に挟まれ、軽く腰掛けた体勢でやや目を伏せている。画面右上と左下には装飾的な文様が、そして画面中央左側の女性の右手のすぐ横には「Portrait (of?) My Wife」という文字が見える。画中画に描かれた人物は、鋭い視線を斜め上に向け、絵筆を水平に構える。木村莊八の容貌を知る人には、それが木村の自画像であることが分かるだろう。画中画の上部の文字は判読が困難だが、「Shohachi Kimura」と読めるようである。画家がかざす絵筆の先は妻を指し示し、「妻」が、画中の全ての事物と同様に自身の創造の所産であることを主張する。畳の描写から、画中の空間は、掛け布によって奥の空間と遮断されてはいるものの展覧会場などではなく生活空間であると考えられる。背後の装飾のついた布や気負ったポーズの夫とは対照的な佇まいと柔和な表情で描かれ、無地の着物から大きく頑丈そうな手足をさらす妻は、モノクロ図版によって印象が強調されているおそれはあるが、質実な印象を与える。また夫のあつらえた空間に自足する素直さといった資質が表現されているようにも見える。

《妻の肖像》に採用された、画中画によって画家本人を表す手法は特筆すべきである。木村が参照したと思われる作品を具体的に提示することはできないが、彼は西洋絵画における自己言及的な作品の系譜<sup>(19)</sup>を意識していたと考えられる。同様に西洋絵画を踏まえて結婚生活を描いた作品である小出櫓重《Nの家族》(1919<大正8>年、大原美術館)などと比較しても、入れ子構造による自画像という凝った形式が使いこなされている点には注目すべきだろう。また人物の性質や置かれた状況を想像させる細やかな描写は、後年の室内画や、『東京朝日新聞』に連載され、永井荷風による本文を上回る人気を博した「濯東綺譚」の挿絵などにもつながる特徴だといえる。

木村は1913年に実家を離れて独立し、間を置かずに中学の同級生である福田実甫の妹・万寿(ます、旧姓福田。福田和五郎の娘)と結婚した<sup>(20)</sup>。結婚にあたり、木村は1911年から付けていた日記を彼女に送っている。最後の日記となる1913年10月27日の記述は「愛するます子へ」と始まり、「まあちゃん、僕は君が物を読んだり書いたりするのがきらひな事をよく知ってゐる。それにも係らず長い々々手紙を出したり物を読ませたりしてゐる。一には離れてゐるからだ、それにも増して、君を熱愛する心から読ませたくなるのだ。僕の日記を君へ送る」と日記贈呈の趣意が示され、「之れからの生活はピッタリ合一させやう。死ぬ迄。」と結ばれる。妻となる女性に自らの内面についての全面的な理解と合一感を求める点において、木村もまた岸田と共通する恋愛・結婚観を持っていたようだ。また木村は、同年2月に初めて実家を離れ独居を始めたことを画期的な事件として日記に記している。自画像のある室内という「妻」を取り巻く情景をきめ細かく描くことで、木村は作品の特別な意義を表現した。中川一政は後年、草土社の会において岸田から「ここからここまで切ったら構図はよくなる」と断じられた木村が悔し涙を流したことを記している<sup>(21)</sup>が、《妻の肖像》は、切り詰めた構図の中に対象の本質を表現する岸田とは異なる方向性—中川は「木村の本領は春陽会に入ってから発揮された」とした—が、草土社の初期から高い精度で追究されていたことを、図版ながら充分に示しているとはいえないだろうか。

《妻の肖像》より先に登場した《壺を持っている女》<sup>(22)</sup>(図8)、《壺を持つ女》1915年、愛知県美術館所蔵。以下《壺を持つ女》と表記)もまた、木村の「妻」をめぐる絵画として重要である。林野を背後に、紺色の肩掛けを首まで巻き、壺を抱えた人物の上半身が描かれる。人



図9 岡田三郎助《縫いとり》1914年  
※『岡田三郎助 —エレガンス・オブ・ニッポン—』佐賀県立美術館、2014年より転載。



物が抱える壺に「To My Wife」とあることから、モデルは妻か、あるいは妻とかかわりの深い女性だと考えられる<sup>(23)</sup>。しかし、この作品の与える印象は《妻の肖像》とは異なる。自然景の中で壺を抱える女という構図は、川や湖からの水汲みという西洋絵画に頻出する画題を想起させるが、水道の整備された東京で戸外の水汲みの必要はなく、偽古的な設定によって、人物は物語性を帯びた存在として表現されている。また身体をすっぽり覆い隠す衣服と髪型、大作りな顔の造作は、モデルに中性的な印象を与える。殊に画面のこちら側を見据える切れ長の大きな目は、《妻の肖像》におけるやや目尻の下がった伏し目がちの目より、木村の自画像における目に近いように見える。描く夫と描かれる妻という関係を明示した《妻の肖像》とは異なり、《壺を持てる女》では、木村自身の面影を「女」に融合させた人物が描かれているかのように見える。女が大切そうに抱える壺の「To My Wife」の金文字に、円満な結婚生活という連想を働かせることもできるかもしれない<sup>(24)</sup>。《妻の肖像》と《壺を持てる女》という2点の作品からは、西洋絵画の外形をなぞるのではなく、「象徴」という表現形式を独自の表現言語として洗練させる木村の意欲が伺える。

岸田劉生と木村莊八による「妻」の肖像は、最小限の要素で画面を構成する岸田、背景を描き込み物語性を感じさせる木村という二人の画家の造形上の関心や資質の違いを表す一方で、自ら選び取った人生を映し出す鏡のような存在としての伴侶を描くという、同時代の若者ならではの意識を色濃く映し出すものであった。彼等が妻に送った日記などに見られる熱いメッセージを踏まえると、この時期以降妻の肖像が描かれなかったことも、これらの作品が、恋愛の成就（としての結婚）によって最高潮に達した自らの生の象徴として描かれたことを意味しているように思われる。

岸田と木村の描いた「妻」を、大正期には完成していた日本のアカデミックな絵画の中に置き直してみよう。貴顕の妻の肖像画などを除けば、「妻」「夫人」を題材にとったことが第三者にも分かるように描かれた作品は少ないといえる。その中で以下に挙げる作品はいずれも質の高い作品であり、「妻」のいる私的空間が、絵画の対象として一種のフロンティアであった状況を想像させるに足るものである。岡田三郎助による《縫いとり》(図9)と《支那絹の前》(図10)には、小山内薫の妹でもある岡田の妻で、小説家として活動していた八千代が描かれる。暖かみのある照明で照らされた室内空間に裁縫をするモデルを配し、優れた室内画となっている前者と、掛布とモデルのまとう着物の描写に染織への傾倒を示しつつ、それに埋没しないモデルの存在感を描き出した後者とは、岡田の作品の中でもとりわけ評価の高いものである。

八千代は後年、《支那絹の前》に描かれた自身の「直しても直しても悲しそうな顔」について「私はそのころ、人の細君業がいやになっていた時でした」と振り返っている<sup>(25)</sup>。八千代が小説を書くことや三郎助と別居したことなどによって社会から受けた強い攻撃については児島薫による前掲論文に詳しいが、小山内薫による次の文章は当時の状況を端的に説明している。既婚女性が小説を書き続けるのは難しいと妹を止めたものの、夫の三郎助が「書け書け」というので「主婦の余技」の範囲で書くようになった妹は、結局「とうとうこの日本で『細君』と『小説家』を兼業する事になったのである。併し、この兼業は私の前に心配した通り、妹に幾多の社会的迫害をもたらしたやうである」と小山内は述べる<sup>(26)</sup>。三郎助が八千代について述べた文章として広く知られるものはないようだが、《支那絹の前》において画家の筆はモデルの醸し出す不穏な空気をごまかすことなく、内面に葛藤を抱えた印象的な女性像として完成させている。時に「人形」という批判も受けた定型的な美人画で人気を



図10 岡田三郎助《支那絹の前》1920年、高島屋史料館



博した岡田の女性像<sup>(27)</sup>のみならず、近代日本絵画において異彩を放つ作品だと言える。

鹿子木孟郎《画家の妻》(図 11)は、歴史画の名手ジャン＝ポール・ローランスに学び、白馬会以降画壇の中央から外れたとはいえ確かな存在感を示した鹿子木の画力を表す作品である。装飾的なタペストリーを背後に裸体でソファに座る女性を描く構図から、女性は裸婦像のモデルを務めていることが明らかであり、腰に布をかけ寛いだ姿勢から、ポーズ中でないことも推測できる。モデルが誰かの「妻」であることを示す情報は題名以外になく、この作品は大正期に描かれているものの、百武兼行《臥裸婦》などに描かれた古典的な裸婦像のバリエーションとして見ることができる。鹿子木による《新夫人》(1909年、京都市美術館)もまた第三者的に「夫人」を描いた作品だといえる。職業モデル、舞妓、漁業従事者といった鹿子木が描いた様々な属性を持つ女性像と等しく緻密に描き出された「妻」「夫人」は、奇しくも岡田八千代が自らの境遇を「人の細君業」と表現したように、社会的身分として描かれているように見える。

岡田、鹿子木の描く「妻」は、卓越した描写力によって人物の内面に迫る《支那絹の前》のような例外的な作品をも含めて、描き手とモデルの関係を強調せず、モデルを第三者的に描き出す視点を共有している。岸田と木村の描いた「妻」をこれらの作品と比較するなら、画室の中に「妻」を描いた木村の《妻の肖像》はこれらの作品に近いが、それでも画中画や「my wife」の書き込みなどによって描き手との関係性を強調する点が、岡田や鹿子木による作品とは異なる。岸田による「妻」の絵画は、《手》を除けば一般的な肖像画として見ることのできるものだが、濃密な文章によって自分と妻の関係を赤裸々に発表するという、明治期には考えられない活動の中で発表されている。「妻」を描いた絵画におけるこのような懸隔を埋める画像として、中村彝の描いた相馬俊子像や、青木繁による福田たね像といった「恋人」の画像を思い起こすのは月並みかもしれないが順当だろう。事物を描き手の関心に従って彩色し、デフォルメし、画面の中で再構成することを肯定する明治末期から起こったムーブメントを経て、モデルは描き手の主観的な関心に再び引き寄せられた。描き手のみならず鑑賞者にも起こった変化は、例えば夏目漱石による第6回文展評である有名な「文展と芸術」<sup>(28)</sup>中、和田英作《H夫人肖像》(1912年、東京国立博物館)と山下新太郎《マンドリーヌ》を比較した部分に表れている。夏目は和田の作品について「此夫人はいやだけれども義理に肖像を描かしてゐる風がある。でなければ和田君の方で、いやだけれども義理に肖像を描いてやった趣がある」、山下の作品について「山下君の女は愉快にさうして自然に寝てゐる」とした上で、「自分は彼女(《マンドリーヌ》の女性像、稿者註)の耳の傍へ口を付けて、彼女の名をささやいて見たい。然し目を開いて此方に向いてゐるH夫人には却って挨拶する勇気が出ない」と結論する。明治末期から大正期にかけて起こったこのような変化は、「妻」というモデルの表現と鑑賞にも尾を引いたと考えられる。

いま一度、岸田と木村が「恋人」ではなく「妻」を描いた点に注目したい。実家の経営する牛肉店「いろは」の帳場で早熟な青春期を過ごしたという木村のみならず、木村からは「あらゆる意味でピューリタン」と言われていた岸田でさえも、「ラブだけ」を楽しむ享乐的な都市生活者を横目に青年期を過ごし、「妻」となる相手と自由に交際を進めたにもかかわらず、彼等はそろって質素な装いで伏し目がちの「妻」を描いた。自由な恋愛ではなく制約に満ちた結婚こそ描くべき主題であるとしても言いたげな彼等の選択からは、恋愛と結婚を接続し得な



図 10 鹿子木孟郎《画家の妻》1921年  
※『鹿子木孟郎展 一師ローランスとの出会い展』  
府中市美術館、2001年より転載。

かった先達への挑戦めいた姿勢が感じられる。代表作《湖畔》のモデルでもあった金子てるとの結婚を長く認められなかった黒田<sup>(29)</sup>や、妻をゴシップ的関心の的にされ続け、結局は別居に至った岡田など、明治期の画家たちは、(特に留学中の)恋愛は容認された一方で、結婚においては個人の自由を重んじる分だけ社会との対立を抱えざるを得なかった。彼等の私生活における妥協や挫折は、飛躍を恐れずに言えば、帰国後の画風の変化に重なる形で岸田や木村の心に印象づけられたのではないだろうか<sup>(30)</sup>。木村は草土社の活動を、日本において油彩画を本業とする以上「不完全な段階」の上にいることを承知の上で『手製油絵』へ突込んだ別動隊」と総括した<sup>(31)</sup>が、画風の上でのクラシックへの回帰と、私生活における結婚という「型」の選択が同時期に起こったことは、偶然とは思えない。彼等は「油絵」と同様に生活を「手製」する最中にあり、「結婚」はそのひとまずの完成を意味したと考えられる。黒田の「スケッチ以上に進みたい」<sup>(32)</sup>という、大画面コンポジションの欠如という、自らを含む同時代の日本画壇の限界をめぐる言及を借りれば、岸田や木村にとって結婚は、恋愛という二者関係のみの「スケッチ」を超えた「型」の創出を迫るテーマとして自覚されたのではないだろうか。

岸田や木村が絵画化した「妻」には、明治期に描かれた「妻」よりも、むしろモデルの人間性や「妻」としてのあり方を限定しているように感じられる部分があり、そこには彼等が「妻」について書き残した、真率な愛情の吐露である反面、過度な期待、専横ともいえる支配欲、意識すらされない優越意識を露わにするいびつな文章との対応が見て取れる。それでもなお、あるいはそれゆえ一層、彼等の描く「妻」は、描き手の存在を超越的な場に置く明治期の肖像画には見られない危うい緊張感をもって迫ってくる。「画題」と呼ぶには短命であり安定性を欠くように見えるものの、岸田と木村にとって、「妻」は単なるモデルを超え、人生と芸術を結びつけ、新たな画境を拓くのに不可欠のテーマであったように思われる。

(よしだあきこ 福岡市美術館学芸員)

#### <註>

- (1) 石井柏亭「岸田木村両氏の作品」『卓上』1914年12月号初出、東珠樹編『近代画家研究資料 岸田劉生Ⅱ』東出版、1977年所収。
- (2) ヤン・ファン・エイクによるマルガレーテ・ファン・エイクの肖像(1439年、フルーニンゲ美術館)など。
- (3) 渡辺崋山が愛妾を描いたとされる《芸妓図》は、法律上の配偶者を描いたわけではないが、モデルの個別的な特徴が表現される点、描き手との関係性が明示される点において、画家が私的なパートナーを絵画化した先駆的な存在として注目されるが、モデルを蓮や竹といった文人画の常套句になぞらえて愛玩物として取り扱い、術学的な趣向を解する同好の士に向けた表現としている点で、画題として新しいものとは言えない。佐藤康宏「雨後の菡萏 渡辺崋山《芸妓図》を読む」(『美術史論叢』13号、1997年、71-89頁)、佐藤康宏「解説 渡辺崋山筆 芸妓図」『国華』1433号、2015年3月、41-42頁)。
- (4) 萬鉄五郎《裸体美人》(1915年、東京国立近代美術館)など。
- (5) 女性の画家が親しい成人男性を絵画化した例としては、渡辺幽香が父を描いた《五姓田芳柳像》(1889〈明治22〉年、東京藝術大学)、神中糸子が兄を描いた《神中正雄像》(1915-25〈大正14〉年)などがある。
- (6) 木村莊八は岸田が「相当長い期間その左指に細い金のエンゲージ・リングを嵌めていた」と証言している(木村莊八「草土社―岸田劉生について」『美術』1946年4, 5, 7月、『近代画家研究資料 岸田劉生Ⅰ』、40-80頁)。また岸田の《人差指たてたる自画像》(1915年)には、右手薬指に指輪が描かれる。
- (7) 岸田が妻・蓼をモデルに描いた作品としては、油彩画の他に多数の素描、水彩作品がある。1918(大正7)年頃まで描かれるこれらの作品は、題名に「蓼」という名前が冠されたり、顔のみが描かれたりするなど油彩画よりもバリエーションが多い。

- (8) 前掲文献。
- (9) いずれも『岸田劉生全集 第1巻』(岩波書店、1979年)所収。本稿中の引用は同書から行った。
- (10) 岸田の日記は、しばしば妻の目に触れ、妻からの日記への返事のような内容が書かれる場合もある。また日記の一部から雑誌原稿が作られる場合もあることから、私的な記録でありながら、発表を前提とする文章の準備段階としても機能していたと考えられる。本稿中の引用は全て『岸田劉生全集 第5巻』(岩波書店、1979年)から行った。
- (11) 「昨夜莊太氏(木村莊太、引用者註)泊る。自分が藁子をほんとにクリエートして行くといふ事の自覚を話し合ふ」1913年5月29日の日記、『岸田劉生全集』第5巻、133頁。
- (12) 山崎正和「場所を失った感情 —『不機嫌の時代』補遺」『月報8 岸田劉生全集 第4巻』1979年11月。
- (13) 松本育子氏による作品解説「7 裸体習作」『画家岸田劉生の軌跡 油彩画、装丁画、水彩画などを中心に』(笠間日動美術館、2007年、23頁)。田中屋での個展に先立って京橋区尾張町の三笠で行われた個展(1914年3月19～28日)に《裸体立像(裸婦習作背面)》とともに出品されたと考えられている。岸田は生涯にわたりほとんど裸婦像を描かなかったとされ、1913年に描かれた5点の画像が例外的に知られている。
- (14) モデルの特定には至らないものの、うつむいた《黒き土の上に立てる女》の目元と頬骨には藁との共通点があるように見える。
- (15) 岸田劉生『劉生画集及芸術観』(聚英閣、1920年)所収の「作品年表」。同書の全文は『岸田劉生全集 第2巻』(岩波書店、1979年)所収。
- (16) 田中淳「岸田劉生研究—『駒沢村新町』療養期を中心に」『美術研究』422号、2017年8月、29-76頁。
- (17) 前掲の田中論文において、デューラーによる「祈る手」の図版が、岸田が同人として加わっていた雑誌『エゴ』の1915年9月号の裏表紙に用いられていることが指摘され、肖像画や自画像にしばしば手を描きこみ、指を上げるなど意味ありげなポーズを試みていた岸田がこの図版を選んだのではないかと推測されている。また稿者は《手》が静物画と同時並行的に制作されたことに注目し、「手」が無形のイメージを象徴的に表すモチーフとして《手を描き入れし静物》(1918年、個人)のような作品制作を導いた可能性を指摘した。吉田暁子「消された『手』—岸田劉生による1918年制作の静物画をめぐる試論—」『美術史』183号、2017年10月、170-183頁。
- (18) 『近代日本アートカタログ・コレクション 034 フェウザン会/草土社 第1巻(大正元～5年)』には未掲載。データは田中淳氏(東京文化財研究所客員研究員、大川美術館館長)にご提供頂いた。なお、このデータは、田中氏から同研究所文化財情報資料部文化財アーカイブズ研究室に寄贈され、同研究所資料閲覧室で閲覧することができる。
- (19) ヴィクトル・I・ストイキツァ著/岡田温司、松原知生訳『絵画の自意識—初期近代におけるタブローの誕生』ありな書房、2001年。
- (20) 丸地加奈子編「木村莊八年譜」『生誕120年 木村莊八展』(東京新聞、2013年)及び東京文化財研究所、小杉放菴記念日光美術館編『木村莊八日記(明治編) 校註と研究』2003年。本稿での日記の引用は同書から行う。
- (21) 中川一政「劉生と私」『芸術新潮』1953年7月号初出、東珠樹編『近代画家研究資料 岸田劉生Ⅲ』(東出版、1977年)所収、131-137頁。
- (22) 1915年6月に美術店田中屋(前述)で開催した個展に初出品。その後草土社第3回展(1916年4月1-10日、銀座・玉木美術店)に再出品し、「『瓶を持ってゐる女』の再出品について」の一文を寄せている。『近代日本アートカタログ・コレクション 034 フェウザン会/草土社 第1巻(大正元～5年)』参照。
- (23) 自然景を背景にした人物の上半身という同様の構図(壺は持たない)の素描作品には《身内の像》(1915



年、豊橋美術館、『生誕 120 年 木村莊八』展図録、58 頁)と名付けられる。草土社同人による類似の作品としては河野通勢が妻・光子の妹を描いた《好子像》(1916 年、東京国立近代美術館)などがあり、《壺を持つ女》にも妻の近親者が描かれた可能性が否定できない。

- (24) 西洋絵画において、性交を経験した女性を象徴的に表した「毀れ瓶」の画題を木村が知っていたのかは不明である。前野みち子『恋愛結婚の成立』(名古屋大学出版会、2006 年)、「第Ⅱ編 恋と〈毀れ瓶〉」参照。
- (25) 岡田八千代「私の肖像画の行方」『日本経済新聞』1955 年 5 月 29 日。児島薫「岡田三郎助と女性画家、および妻八千代との関わりについて」(前掲)及び、同論文掲載カタログにおける岩永亜季氏による作品解説(216 頁)を参照。同文献によると、岡田夫妻は大正末年には別居した。
- (26) 小山内薫による、岡田八千代『絵の具箱』(1912 年)の序文。児島薫、前掲論文より引用。
- (27) 野中耕介「『人形』と『表現』のあいだ ―岡田三郎助が描いた肖像画について―」(前掲書、176―187 頁)。
- (28) 夏目漱石「文展と芸術」『東京朝日新聞』1912 年 10 月 15-28 日まで 12 回にわたり連載。本稿での引用は田中淳「序論『おわり』と『はじまり』―夏目漱石『文展と芸術』をめぐる―」(東京文化財研究所編『大正期展覧会の研究』、東京文化財研究所、2005 年、3-21 頁)より行う。
- (29) 東京文化財研究所編『美術研究作品資料第 5 冊 黒田清輝《湖畔》』東京国立文化財研究所、2008 年。
- (30) 木村莊八は初期文展の頃を振り返り、「僕のいはゆる『鑑に堪へる』油絵は一例へば藤島さんの写生品であるとか、山下さんの『靴の女』の如きであるとか―それは此の頃としては先づ例外なく滞欧何年かの帰朝者に依ってそれも概ね日本の空気に触れない期間に作られたもの」であったとしている(前掲文献)。
- (31) 前掲文献。
- (32) 「スケッチ以上に進みたい―第十回文展に関する感想―」『美術』1 巻 1 号、1916 年 11 月。

# 平成 28 年度福岡市美術館大規模改修工事に先立つ美術資料等の輸送

渡抜由季  
宮田太樹

## 1. 概要

本稿は平成 28 年度に行われた福岡市美術館リニューアルに伴う美術資料等の輸送について記録した報告文である<sup>(1)</sup>。

福岡市美術館はリニューアルに伴い平成 28 年 9 月 1 日から平成 31 年 3 月まで改修工事のため閉館している。このリニューアル事業は PFI 方式を採用しており、改修工事、維持管理、広報等に関わる事業をリニューアル後も含め 15 年間という期間で事業者と委託契約している<sup>(2)</sup>。この改修工事に先立って美術資料を輸送する必要があった。現在は、片道分の美術資料の輸送は終了し、戻しの輸送作業を来年度に控えている状況である。本報告はこれら美術資料の輸送・保管に関わる現在までの一連の事項をまとめたものである。なお、文中 4-①の古美術に関する記載は宮田が担当、執筆した。

美術資料の輸送には、作業場所や美術資料・梱包資材の保管場所の確保、保管方法の検討、輸送期間の設定、保存環境の確認等が不可欠となる。1990 年代から日本国内で予防を中心とした保存理念が声高に挙げられて以降、美術資料に関する保存理念も年々体系化されつつあり、美術資料の輸送もまた保存に関連する重要な項目の一つである。今回、輸送について設置から休館中の保管までの一連の報告が、今後、他の美術館・博物館で行われるリニューアル事業への一助となれば幸いである。

|          |                                                                |
|----------|----------------------------------------------------------------|
| 輸送対象資料   | 美術館所蔵品、所蔵品関連資料、寄託品、寄贈予定美術資料、フィルム等の関連資料等（約 16000 件）             |
| 輸送先      | 福岡市美術館館内、九州国立博物館、九州歴史資料館、福岡市博物館、福岡アジア美術館、美術品専用倉庫、福岡市が管理する旧学校建築 |
| 輸送に要した期間 | 平成 28 年 6 月 1 日～ 12 月 28 日（総作業日数 120 日間）                       |

## 2. 保管場所決定までの経緯

美術資料の輸送作業に至るまでの経緯については平成 24 年度～ 26 年度までの「福岡市美術館 活動の記録」に概要が記載されているため参照されたい。特筆すべきは当館の美術資料輸送に先行して、平成 25 年度に館内格納庫等の一部を収蔵庫化し、休館中も利用できる美術資料保管場所として事前に準備を進めていたことである<sup>(3)</sup>（図 1）。これにより、平成 28 年度から行われた美術資料のうち、大半の資料を館内に保管することが可能となった。

しかし、館内のみでは美術資料全てを保管することは不可能である。そこで、当時の学芸課長を中心に福岡県周辺の美術館・博物館での休館中の美術資料の保管や活用について可能性を検討し交渉が進められた。その結果、

福岡市美術館内、九州国立博物館、九州歴史資料館、福岡市博物館、福岡アジア美術館、福岡市が管理する旧学校建築を休館中の保管場所に決定した。さらに、既存の収蔵棚の有効容量と輸送予定先の有効容量を算出・比較し、必要となる保管場所が不足していることが判明したため、その不足分を民間の美術品専用倉庫を借用することで補完した<sup>(4)</sup>。

### 3. 契約から美術資料輸送業務着手まで

契約に先立ち、美術資料輸送にかかる懸念事項や輸送期間や輸送に関わる金額等大まかな概要を把握するため、各専門家や美術資料輸送専門業者と打ち合わせ下見を繰り返し、おおよその仕様、輸送期間と保険のための美術資料評価額を算出した。本業務には国指定品の取り扱いも含まれるため、美術資料輸送業者が（公財）日本博物館協会主催「美術品梱包輸送技能取得士認定試験」1級合格者またはそれに相当する資格取得者を直接雇用していることも審査の基準とした<sup>(5)</sup>。また、美術資料の保管場所の確保をより確実なものとするため、美術品専用倉庫を所有している、もしくは借用可能であることも条件に追加した。平成28年4月25日、これらの条件を仕様書に加え、福岡市美術館美術資料輸送等業務委託として入札を公告し、美術品輸送業者を決定した。

美術資料輸送業務という項目の中で美術資料輸送業者に保険の手続きもまとめて委託した。今日、国内における美術資料輸送業務に関する保険では、今回のケースのように複数の保管場所へ輸送・設置・保管し、また戻すという一連の流れを一括して対応できる保険は存在しない。そのため、今回は一輸送と言われる、当館での梱包から他館への輸送、開梱までをカバーした、いわば片道分の保険に加入した。これに併せ、当館が普段館内収蔵に利用する保険も適用し、保管場所の記載項目を福岡市美術館から休館中保管先へ変更するという対応をとった。

輸送に先立ち事前準備の検討も行った。輸送スケジュールの設定、スケジュールの課内共有、といった全般に関するものの他、各美術資料の保管場所の選定、シーズニング、作業場所・資材置き場の確保、仮収蔵棚の館内設置といった美術資料に関連する課題への対策を検討した。各項目の詳細は下記の通りである。

#### ① 輸送スケジュール

輸送先を館内・館外美術館等・美術品専用倉庫の3種類に分類しスケジュールを振り分けた。館外美術館等の場合は展覧会スケジュールなど、先方とのスケジュール調整が必要であり、逆に館内や美術品専用倉庫への移動作業は特にスケジュール上の問題はなかった。そのため、館外美術館等のスケジュールを優先し、館内での輸送作業を先に済ませ、美術品専用倉庫への移送作業を最後とするスケジュールを基本とした<sup>(6)</sup>。

#### ② スケジュールの情報共有

エクセルで美術資料輸送スケジュールカレンダーを作成した（図2）。カレンダーは学芸課内の共有フォルダに保管し、誰でも自由に閲覧・更新することが出来るようにし、協議の際プリントアウトしスケジュール管理のツールとしても利用した。さらに、円滑な引き継ぎを行うため、メールによる日報を活用した。美術資料の移送を行った後、メールにて学芸課全員に日報を送り作業の引き継ぎを行った。

#### ③ 各美術資料の保管場所の選定

美術資料の保管場所については、事前に保管場所の保存環境を確認し、その環境に見合った美術資料を保管することとした。例えば館内の収蔵庫は当初から美術資料の長期保存を想定した環境設定としているため、施設そのものの環境が美術資料の保管に適していた。一方、撮影室や補修室などの一時保管庫については収蔵庫と比較するとある程度の温湿度の変動が認められ、繊細な資料の長期保存には適さないことが予想された。そのため、



前年度より諸室の温湿度変動を調査し、諸室の特徴を把握した上で素材ごとに美術資料を選別し保管することとした。また、休館中も寄贈を受ける方針に決定したため、未燻蒸の作品との混同を避けるよう別途専用の一時保管庫を用意するなど、区画整備を行った。さらに、美術品専用倉庫に輸送する際も画面保護や額装されたものに限定することで、輸送時の破損リスクの軽減を図った。

#### ④ フィルム資料のシーズニング

映像資料室のフィルム類の輸送を行った。輸送先は館内であるが、作業効率や資料散逸の予防のためフィルムキャビネットごとまとめて輸送することとした。映像資料室の設定温度は 18 度(湿度設定は不可)となっており、館内保管先は 22 度 55% と差があったため、輸送作業の 1 週間前より映像資料室の温度設定を段階的に上げていき、保管先の温湿度に徐々に慣らした。

#### ⑤ 作業場所および資材置き場の確保

美術資料を輸送する上で、作業場所や資材置き場の確保も重要な事項である。今回は収蔵庫隣の資料補修室を輸送期間の後半まで作業部屋兼資材置き場として活用することで、急な入用にも対応できるよう梱包材を備蓄し、その場で作業が行える場所とした(図 3)。輸送作業が終盤に入った時点で資料補修室を美術資料の一時保管庫に戻し、輸送作業を行った。

#### ⑥ 仮収蔵棚の館内設置

自立出来ない美術資料や立体的な資料など効率的に美術資料を収納するためには、保管するための棚が必要となる。棚を必要とする資料は主に平面作品であったが、それ以外にも立体資料などを収蔵するため、複数種類の仮収蔵棚を館内に設置した。棚は一時的ではあるが、2 年半の長期休館に耐えうるだけの強度が必要である。スチール棚には天板を設け、耐震補強としてボルトで棚と床を固定した(図 4)。空いたスペースには館内で使用している大型机を集め、棚の代用とした(口絵 3-1)。

### 4. 梱包作業

梱包作業の共通事項として、全ての美術資料に対しラベルの貼付を義務づけた。これは美術資料の紛失予防の他、輸送作業を円滑に進めるためでもある。梱包のレベルについては輸送業者と協議し、館外移動と館内移動の 2 パターンに分け、館内移動に関しては振動や衝撃のリスクが少ないため必要最低限の梱包とした。実際の作業は当館の近現代美術係と古美術係の 2 係が中心に行い、各担当の美術資料について計画を立案し梱包作業を進めた。

#### ① 美術資料リストとラベルの作成

美術資料リストとラベルシールを作成した。これらは情報の齟齬による混乱を防ぐため所蔵品データベースと連動させた。具体的には当館の所蔵品データベース(「FileMaker Pro 13」を利用)に作家名、美術資料名、所蔵番号、現在の収蔵場所、休館中の保管場所、新収蔵場所を入力し、ラベルのレイアウトに併せて出力、ラベルシールを作成した(図 5)。また、美術資料リストは、美術資料の確認時に何らかの変更や特筆すべき点があった場合は、その都度リストへ直接書き込んだ。リストに書き込まれた内容は現在、データベースに反映し、内容に齟齬のないように修正している。シールの貼付方法については、紛失を防ぐため、原則美術資料に直接貼る手法を採用した。例えば油彩画の場合は裏面の木枠に直接貼り、額装された作品なら額縁の裏面に貼付するといった対応である。

例外として、梱包が必要な作品には梱包材に直接貼付した。

古美術作品については、原則複数の作品を梱包箱に格納するので、ラベルシールを2セット用意し、美術資料および梱包箱に貼付した(図6)。また、絵画・陶磁・染織など品質を記載したラベルシールも作成することで、保管および輸送作業の便を図った。また、箱リストを別途用意し、輸送時の漏れが出ないように配慮した。梱包箱の作成にあたっては、保管先の棚の大きさをあらかじめ測定し、空間を最大限活用できるよう工夫した。

## ② 預かり資料や寄託美術資料の取り扱い

所蔵品と分けるため、ラベルを別途用意した。寄託品等のラベルのレイアウトは所蔵品のものとほぼ同様であるが、所蔵品との混同を避けるため、美術資料の保管場所はエリアを固めて保管した。

## 5. 輸送作業

館外への輸送作業の立ち会いは、原則として複数名で対応することとした。入庫出庫時には美術資料リスト(古美術は箱リスト)の読み上げとチェックを行い、より確実な美術資料の輸送を進めた(図7)。

### ① 大型美術資料等の輸送

収蔵美術資料のうち、重量物や特殊な形状を持った美術資料については特別な配慮が必要である。ラファエル・コラン《海辺にて》は美術資料寸法が297.0×446.0cmと巨大でそのままでは館内移動が出来ない状況であったため、美術資料を巻き取るという追加処置を行った(図8、口絵3-2、口絵3-3)。また、アニッシュ・カプア《虚ろなる母》の寸法も高さ216.0×幅210.0×奥行212.5cmという巨大な美術資料の上、グラスファイバーに顔料を塗布という技法のため、輸送の方法や導線確保に特別な配慮が必要となった<sup>(7)</sup>(口絵3-4)。屋外に設置されていた彫刻や石塔等はクレーンによる特殊輸送を必要としたため、これらは作業が集中できるよう期間を定めた(図9、口絵3-5)。

### ② 美術資料保管場所の記録

輸送の終了後、保管された資料がどのような状況で保管されているか、配置図面を作成し、写真記録を残した。戻し作業までの約2年半の間で記憶が曖昧になる恐れがあるため、スケジュールカレンダーと同様に誰でも閲覧・更新が出来るよう、撮影した美術資料の画像や作業画像等を全て共有フォルダに保存した。

## 6. 輸送後の維持管理

1で前述した通り、福岡市美術館はこのリニューアル事業にPFI方式を採用しており、美術館が休館した2016年9月1日から施設維持管理業務を委託している。休館にあたり、事業者と事前に協議し休館中の維持管理業務計画や非常時の連絡体制等を決定した。休館中に行っている主な保存環境管理の内容は空調管理、セキュリティシステムの監視、虫害・粉塵対策の3つで、これらは全て事前協議で決定した内容に基づいたものである。そのうち、空調管理と虫害・粉塵対策について下記に述べる。

### ① 空調管理

空調管理は22℃と55RH%の24時間管理とし、館内に保管された美術資料については、備え付けの温湿度センサーによる記録確認と、諸室に立ち入り、設置された自記式温湿度記録計を基に保存環境の変動を確認してい

る。館内の立ち入りについては、あらかじめ施工業者らと協議し、月に1度の館内立ち入りを可能とした。また、立ち入りの際は維持管理業者と共に現場に立ち入り、異常がないか確認している。館外へ輸送した美術資料のうち、美術品専用倉庫に保管したものについては、月に一度、月報として温湿度記録を提出してもらう等、定期的に連絡を取り合うようにしている。

## ② 虫害・粉塵対策

一時保管庫として準備した諸室の扉は収蔵庫のように気密性の高い仕様ではない。そのため、虫害と粉塵予防を目的として養生テープによる扉目張りを行い、何か異常が見つかった際は直ちに美術館へ報告する連絡体制を構築した。また、部屋によっては室内に天井板がない場所もあるため、上階で工事が予想される場所では、振動で粉塵・埃が落ちてくる危険性もあった。そのため、むき出しの美術資料に対して、空調の気流に留意し、ある程度通気性のある薄葉紙や不織布などを上から覆った（図10）。ところが、実際に定期的な点検を行ってみると、ダクト上に積もっていた粉塵や埃の工事の振動による落下が多く見受けられた。今回の輸送では想定出来なかったが、天井板の無い諸室については作品輸送の前に事前にダクト上の点検・清掃を行うべきだった。

## 7. まとめ

来年度に控えている美術資料等の戻しの輸送について、いくつか課題が残っている。

一つめは、収蔵庫内の美術資料レイアウトの見直しである。輸送のために作成した美術資料ラベルには、「新収蔵場所」というリニューアル後の保管場所も項目として記載し、素材や形状、同一作家等をまとめる等、戻しの作業時に備えようとした<sup>(8)</sup>。しかし、改修工事に伴う館内設備や備品に変更が生じたため、美術資料の保管場所も当初の計画通りには進まないことが判明した。早い段階で計画を立てることは重要ではあるが、このような変更にも対応出来るだけの程度の融通を持たせていくことが必要であることを認識した。

二つめは、戻しの作業で美術資料の導線を変更しなければならないことである。これは館内外の大規模改修により、美術館全体のレイアウトが変更するためである。幸いなことに建築設計者との協議を重ねたことで、現状、技術的な問題で輸送不能となる美術資料はないが、往復の輸送方法の変更についてはあらかじめ把握し、輸送業者と改めて調整を行わなければならない。

さて、ここまでまとめてみたが、今回の輸送・保管業務は、美術館職員だけでなく作業員やリニューアルに関係する事業者など非常に多くの人が関わったことで初めて成立したものである。作業に対する制約や立地上の条件等は各館の環境や体制によって大きく異なることはいうまでもないが、与えられた条件の中でいかに最大限のパフォーマンスを引き出せるか、情報共有と協議の重要性を改めて認識した。行った結果を振り返り、今後の安全な輸送作業に繋げていきたい。

(わたぬきゆき 福岡市美術館学芸員)

(みやただいき 福岡市美術館学芸員)

### <註>

(1) ここでいう「輸送」とは、輸送・設置・保管の意味を含めて総称したもの。

(2) PFI 事業については参考文献 E－H を参照のこと。

(3) 参考文献 E－F、J を参照のこと。

(4) 本文で紹介の他、近現代美術を対象に「夢の美術館—めぐりあう名画たち—」展や「モダンアート再訪—ダリ、ウォーホルから草間彌生まで 福岡市美術館コレクション展」と2つの巡回展への出品があったが、



これらの美術資料についても、次回巡回展までの待機期間や巡回展後に戻された美術資料の保管など、一時的に作品を保管するスペースを別途確保する必要があった。

- (5) 資格の所有に関する記載は、当館の後藤学芸員の提案によって実現したものである。
- (6) 大型資料や重量物など、特殊な機器等を使用する場合の日程はその都度調整し対応した。
- (7) 表面の一時的な保護処置としてシクロドデカンを採用した。詳細については参考文献 D を参照のこと。
- (8) 「新収蔵場所」の項目は近現代美術係に限定して作成した。

#### 参考文献

- A 三浦定俊・佐野千絵・木川りか（著）『文化財保存環境学』第2版、朝倉書店、2016年、pp. ii - iii, 196-201
- B 『博物館資料取扱いガイドブッケー文化財、美術品等梱包・輸送の手引き—改訂版—』日本博物館協会（編集）、ぎょうせい、2016年
- C 甲斐由香里「平成27年度熊本博物館リニューアルに伴う資料引越の記録」『熊本博物館館報 No.28』、熊本博物館、2016年、pp.133-138
- D 渡抜由季「【報告文】アニッシュ・カプーア《虚ろなる母》の輸送のための表面保護—シクロドデカンの有用性について—」『福岡市美術館研究紀要』5号、福岡市美術館、2017年、pp.16-24
- E 福岡市美術館『平成24年度 福岡市美術館 活動の記録』福岡市美術館、2014年、pp.5
- F 福岡市美術館『平成25年度 福岡市美術館 活動の記録』福岡市美術館、2015年、pp.4
- G 福岡市美術館『平成26年度 福岡市美術館 活動の記録』福岡市美術館、2016年、pp.4
- H 福岡市美術館『平成27年度 福岡市美術館 活動の記録』福岡市美術館、2017年、pp.4
- I 福岡市美術館『記録集「福岡市美術館 クロージング／リニューアルプロジェクト2016 について語る。」』福岡市美術館、2017年、pp.103-109
- J 福岡市美術館『つなぐ、ひろがる美術館をめざして 福岡市美術館リニューアル基本計画2012』pp.6（URL: <http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/45567/1/plan.pdf>）

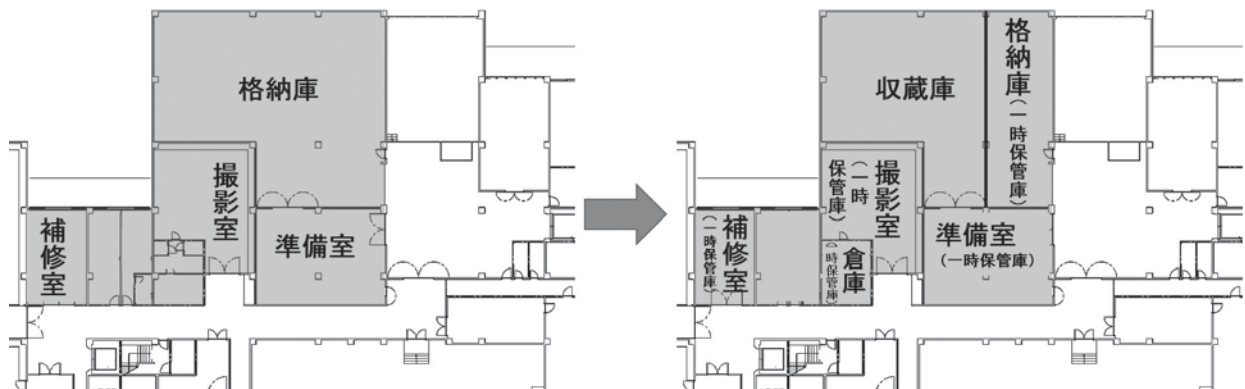


図1.平成25年度に行われた格納庫等諸室の収蔵庫化（左図が改修前、右図が改修後）

|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    |                                                              |
|---------------------------|------|--------------------|--------------------------------------------------------|------------------|-----------------|--------------------|--------------------------------------------------------------|
| 2016<br>10                | 日sun | 月mon               | 火tue                                                   | 水wed             | 木thu            | 金fri               | 土sat                                                         |
| 備考:<br>九博特別展:10月4日～11月20日 |      |                    |                                                        |                  |                 |                    |                                                              |
| 倉庫行き作品の梱包をこの月で終了させる       | 2    | 3                  | 4                                                      | 5                | 6               | 7                  | 8                                                            |
|                           |      | 田中丸コレクション集荷(北九州市美) | 山口・正路                                                  | 吉田・正路            | 渡根・吉田           | 渡根・山口              |                                                              |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 | 九博活用未梱包作品を片付ける(宮田) |                                                              |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 | 9:30-17:00 補修室にて作業 |                                                              |
|                           | 9    | 10                 | 11                                                     | 12               | 13              | 14                 | 15                                                           |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | つきなみ講座@あじびホール(6)                                             |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | 舞鶴中学へ屋外彫刻輸送作業、倉庫行き作品の梱包作業(近現代)                               |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | 九博活用作品点検梱包(彫刻)2班                                             |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | 渡根・山口(彫刻)正路・吉田(宮田)正路・山口(彫刻)吉田・渡根(宮田)正路(彫刻)山口・渡根(彫刻)山口・正路(室内) |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | 9:30-17:00 補修室にて作業                                           |
|                           | 16   | 17                 | 18                                                     | 19               | 20              | 21                 | 22                                                           |
|                           |      | 東京文化財研究所調査(皿井)     |                                                        | アジ美行き作品点検・梱包日    |                 | 中・倉庫行き梱包作業         | 倉庫行き梱包作業                                                     |
|                           |      |                    | 九博活用作品点検梱包(書)                                          | 九博活用作品点検梱包(陶磁)   | 九博活用作品点検梱包(陶磁)  | 宮田(彫刻)             | 正路(室内)                                                       |
|                           |      |                    | 九博活用作品点検梱包(陶磁)                                         |                  |                 |                    |                                                              |
|                           |      |                    | 渡根・山口(彫刻)正路・吉田(宮田)正路・山口(彫刻)正路・吉田(宮田)正路・山口(彫刻)正路・吉田(室内) |                  |                 |                    |                                                              |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | 9:30-17:00 補修室にて作業                                           |
|                           | 23   | 24                 | 25                                                     | 26               | 27              | 28                 | 29                                                           |
|                           |      |                    | 中へ屋外彫刻輸送作業、倉庫行き作品の梱包作業(近現代)                            |                  |                 |                    | 倉庫行き梱包作業                                                     |
|                           |      |                    | 九博活用作品点検梱包(陶磁)                                         | 九博活用作品点検梱包(陶磁)2班 |                 | 宮田(彫刻)             | 吉田(室内)                                                       |
|                           |      |                    | 渡根(彫刻)正路・吉田(室内)                                        | 崎田(彫刻)正路・吉田(室内)  | 渡根(彫刻)正路・吉田(室内) | 渡根(彫刻)山口・正路(室内)    |                                                              |
|                           |      |                    |                                                        |                  |                 |                    | 9:30-17:00 補修室にて作業                                           |
|                           | 30   | 31                 | 終日収集審査会撮影(山口)                                          | 終日収集審査会撮影(吉田・正路) |                 |                    |                                                              |

図2.美術資料輸送スケジュールカレンダー



図3. 梱包材保管部屋としての補修室



図4. 設置後の仮収蔵棚（右下図は床固定金具）



図5. 輸送用美術資料ラベルの一例（近現代美術）



図6. ラベルが添付された梱包箱の一例（古美術）



図7. 美術資料の入庫出庫チェック



図8. ラファエル・コラン《海辺にて》の巻き取り作業



図9. 特殊作業車を用いた輸送



図10. 粉塵対策としての養生作業



## 【資料紹介】満州の甲斐巳八郎 雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事③

中山喜一郎

### 解題

今回は第108号（昭和8年10月15日発行）から第138号（昭和10年1月15日発行）までの1年余の期間に掲載された記事と作品を紹介している。

第100号から114号まで連載された「クリーニング水滸伝」は、多彩な登場人物の描きわけや動きのある構図、滑稽さを感じさせる戯画的な表現など、巳八郎の別の一面を見せてくれる挿絵である。水墨でゴリラの全身像を描いた後年の作品などには、わざとらしくない柔らかなユーモアが漂っているが、帰国後の巳八郎の画業全体からすれば例外的なものであり、彼の作品のほとんどは生真面目で細やかな神経を感じさせる風景画である。「クリーニング水滸伝」の仕事は巳八郎にとって戸惑うこともあっただろうが、伊藤順三が執筆する軽妙な物語の内容を見事に視覚化しており、回が進むにつれて文章と挿絵が渾然一体となった世界となっていく。そうした評価を反映したものであろうか、第111号の目次には「水滸伝……順三巳八郎」とあって、伊藤順三と甲斐巳八郎の名前を合体させた表記もなされている。このシリーズを描いたことは巳八郎にとって有益だったと思う。例えば前回掲載したNo. 91「新京風景」では大きな水のタンクを背景に若者の上半身がクローズアップして描かれ、今回掲載している中ではNo. 107「鐵嶺」やNo. 111の開原駅附近の大豆の野積を描いた作品など、人物の生き生きとした表情や個性が巧みに表現されており、巳八郎が人物表現に自信を得たと手に取るようにわかるのである。さらに今回の最後に紹介したNo. 139～143「満州郷土画譜 31 街頭拾遺」の軽妙な人物表現は、ひとつの到達点と言ってよい。

今回掲載した記事の多くは、1ページ全体を使ったグラビア扱いの作品と文章である。当初は一時的な編集方針によるものだったと思われるが、その後「満州郷土画譜」というシリーズ名がつけられた。巳八郎にとって大きな意味があったと思う。シリーズタイトルに「画譜」とついたので、ここに掲載するのは挿絵ではなくページの主人公たる絵画作品である。そういう意識の変化があったはずだ。紙質の関係で中間色が出ないことを意識した白黒のはっきりした線主体の表現から、墨の柔らかな階調を生かした湿潤な表現へ変化したことは、紙質のよいグラビアページを前提にしたものだ。以前に掲載した線描によるスケッチ（No. 57「繞陽河附近にて」）をもとにした別の作品（No. 126「繞陽河附近」）を描いて掲載しているのは、挿絵ではなく絵画作品をグラビアで見せる意識が働いたゆえのことであろう。比較が容易になるようNo. 57「繞陽河附近にて」も今回再掲載した。また、以前から時折感じられた風景の大胆な単純化や抽象化についても、No. 118「鄭家屯」やNo. 119「本溪湖」では明確な意図的表現として試みられている。

（なかやまきいろう 福岡市美術館副館長）

### 凡例

- 1 甲斐巳八郎の挿絵や記事が掲載された『協和』の号数（発行年月日）を見出しとし、掲載順に配した。掲載ページは省略した。
- 2 自筆記事、挿絵や作品には通し番号をつけてNoで示した。最終的には、Noは『協和』に掲載された全作品点数とほぼ一致する。
- 3 活字化されたタイトルや署名などがある場合は、Noのあとに「」で記した。ない場合は、「なし」とした。
- 4 活字化されたタイトルや署名とは別に画中に文字や署名があり、解読可能な場合は「」で記した。





No. 100 [なし]



No. 101 [なし]



No. 102 [なし]



第 111 号 (昭和 8 年 12 月 1 日発行)

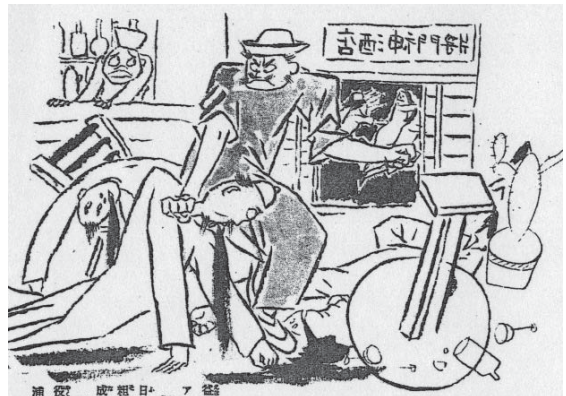
No. 103 [なし] 「撫順大山坑附近」



\*表紙裏半ページの口絵。文章はなく、「撫順音頭」(西条八十作詩、中山晋平作曲)の歌詞が掲載されている。目次には「口絵…撫順音頭…甲斐巳八郎」と書かれているが、絵の内容は歌詞とは無関係であり、前例からすると撫順に関する巳八郎のレポートが掲載されてもよかったのではと思う。何らかの事情があったのかもしれない。いずれにせよ、「撫順音頭」の歌詞掲載が先にあって、それで巳八郎が描いたとは到底思えない。

No. 104 ~ No. 106 [クリーニング水滸伝 文は伊藤順三 画は甲斐巳八郎]

No. 104 [なし]





No. 105 [なし]



No. 106 [なし]



第 112 号 (昭和 8 年 12 月 15 日発行)

No. 107 [ 鐵嶺郊外 ] 「鐵嶺 巳八郎」

支那風の塔は近寄って見ると随分と汚いものである。無数に鳥が巢喰って縞状の鳥糞によごれ切っているだけでなく、苦力坊主が住っていて、見物人から金をせびる。

塔の根方は塵アクタが盛り上がり、例の如く人糞もまた多い。家の突っ張りにされたり、どうかすると百姓家までが割り込んで壁ともなり、物置にもなっている。鐵嶺の塔も御多分にもれず薄汚いものである。

だが、それを遠目の背景として程よいところに突っ立って、まず、百姓が粃殻を風選する図でも取り合わせたら、日本の特別保護建造物のものものしい塔よりも余っ程親しみが多く、あたりの風物と

ぴったりしたものが感じられる。

甲斐巳八郎

No. 107 「鐵嶺 巳八郎」



＊表紙裏のほぼ 4 分の 3 を占める口絵。四本爪の備中鍬のような農具を持つ農民は、文中にあるように粃殻の風選をしているのであろう。描かれている古塔が唐時代に建立された円通寺の塔であれば、現在も鐵嶺市の観光名所として存在している。また、第 115 号には「雪の白塔」と題された写真がグラビア掲載されており、撮影者の名前は不明だが、巳八郎の描いた鐵嶺の塔と思われるので参考に掲載しておく。

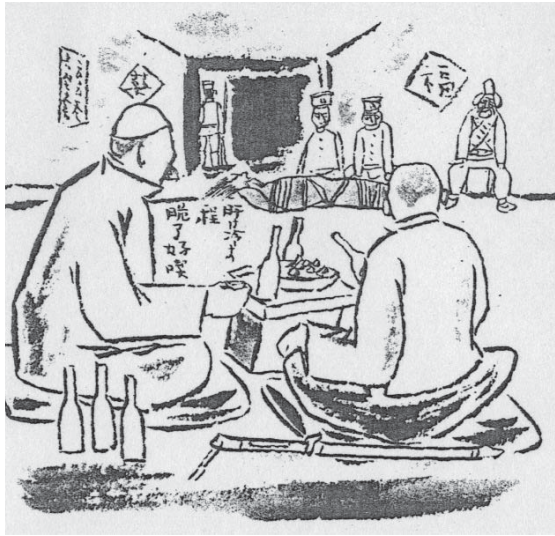
《参考》



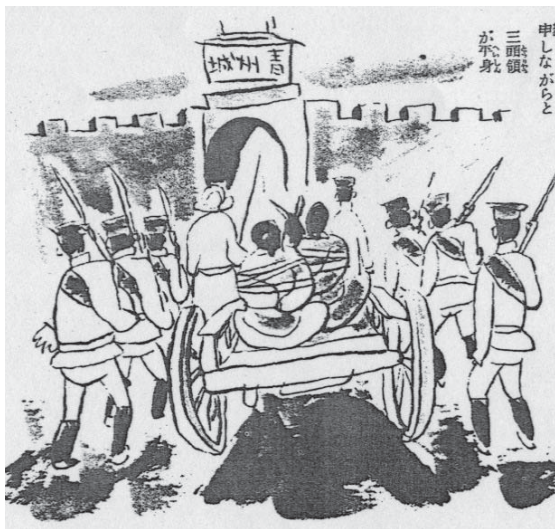


No. 108～No. 110 [クリーニング水滸伝 文は伊藤順三 画は甲斐巳八郎]

No. 108 [なし]



No. 109 [なし]



No. 110 [なし]



第113号(昭和9年1月1日発行)

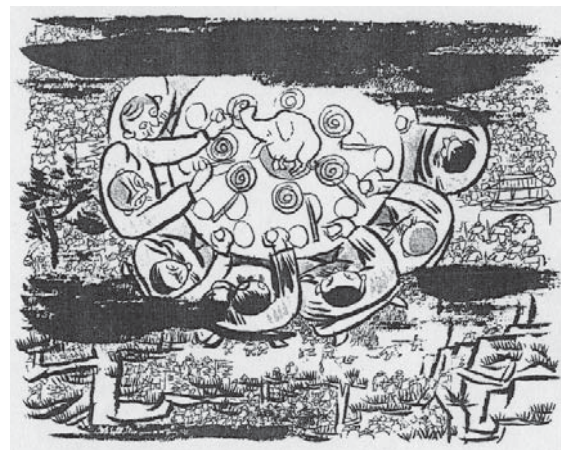
No. 111 [なし]「開原駅附近の大豆の野積 巳八郎」



\*表紙裏ほぼ全ページ大の口絵。図の下に少しスペースがあげられたままで、巳八郎による文章はない。目次には「口絵……開原 巳八郎」と略して記されている。開原駅は現在の遼寧省鉄嶺市開原市にある京哈線<sup>けいは</sup>の駅。No. 107 [鐵嶺郊外]と同時期の取材と思われる。

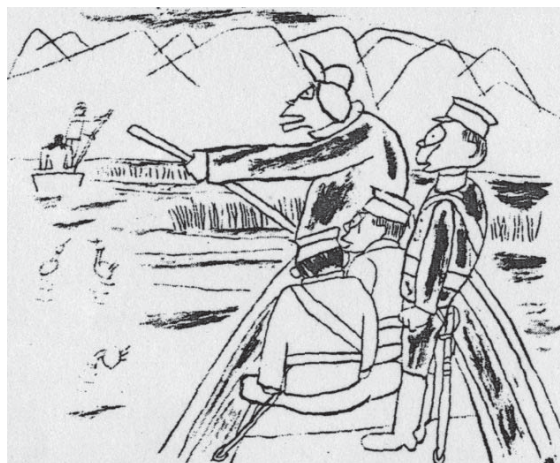
No. 112～No. 113 [クリーニング水滸伝 文は伊藤順三 画は甲斐巳八郎]

No. 112 [なし]





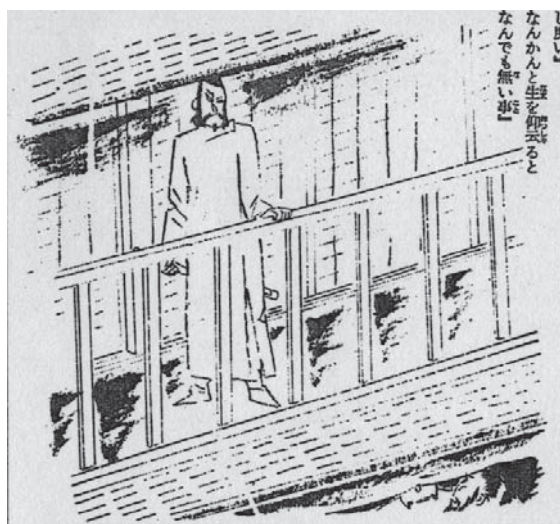
No. 113 [なし]



第 114 号 (昭和 9 年 1 月 15 日 発行)

No. 114 ~ No. 116 [クリーニング水滸伝 文は伊藤順三 画は甲斐巳八郎]

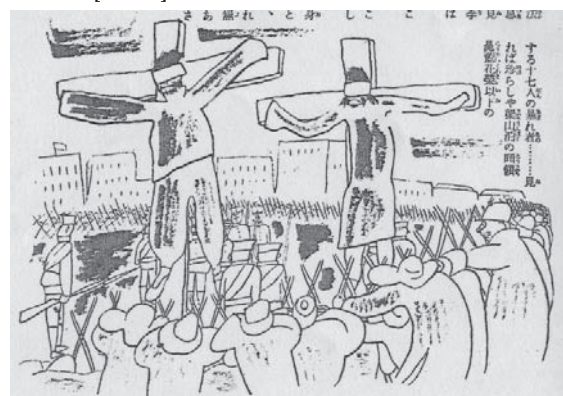
No. 114 [なし]



No. 116 [なし]「黒旋風 河童の良事に水をのまさる」



No. 116 [なし]



\*この処刑場面を描いた挿図をもってクリーニング水滸伝は完結。連載回数は 13 回である。

第 115 号 (昭和 9 年 2 月 1 日 発行)

No. 117 [鳳凰城]

鳳凰城駅から城内までは七八丁の道程だが、夏なら道の両側には自然木のような並木がウッソウとして、その上に、満州にはめづらしい清冽な水をたたえた小川が流れ、宛ら内地も奈良を偲ばせるところがある。

木の葉がぐれに鳳凰山の偉容が隠見する。

城内は朝鮮文化の面影が、建物やその他のものに



も感じられ、白衣の同胞も多く見られて、朝鮮に近きを思わせる。

街は幅狭く、家並が古くさびていて田舎の臭いが深い。

城内を北に、石畳の敷かれた、屋敷街らしい棗や夾竹桃の茂り込んだ、立派な住宅街を通過して、城外に出ると、酒造長屋の居並んだ、田舎者相手の居酒屋や馬車宿のある、急に道幅の広い田舎への一本道に出る。

田舎からの旅人が、やれやれと一呼吸入れる町の取っつきといったところ背の山は雪に蔽われた鳳凰山である。

巳八郎

No. 117



\*表紙裏ではなく、これまで目次などがあつた扉のページに掲載。グラビア扱いである、全体の4分の3を図が占め、下に巳八郎のルポが載る。遼寧省丹東市鳳城市にある鳳凰城山は、遼寧省の四大名山のひとつとされる。

第116号（昭和9年2月15発行）

No. 118 [招牌]

鄭家屯、通遼の土埃りの街を歩いていると、大連や奉天で見たドギツイ支那街の看板が、此处では当たり前だと思わせる。

満鉄本線を捨ててホンの僅かの時間で蒙古の土の

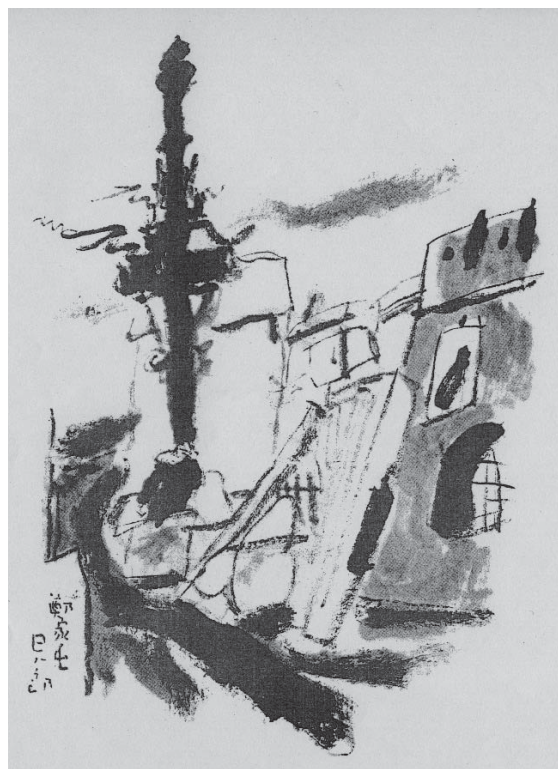
匂いのする鄭家屯に着くことが出来るが、満鉄本線の何処にも見なかった、一切合財が土でうち固めたような変化に乏しいこの街には自ら絢爛な色彩が必要なのだ。

灰色だけのユウウツな世界に生きる人達には日本人の地味好みは解らない。また地味の必要もないのである。自然の要求するまゝに殊に店舗の看板は人の目を惹きつけなければならぬ立場からも強烈な色彩の招牌は必要なのだ。

赤、黄、金、銀と競って街頭に突きだした招牌の形面白く重なり合っているのが恰度日本の戦国時代、士大将の旗印が並んでいるかのようなのである。

なかにも目立って大きく美しいのは反物屋の招牌だ。日本の看板は軒に沿った大抵は平たいものであるが支那のは屋根から街頭に遠慮なく突き出ている。また店の前に大きな柱を立て、四方に龍の彫りものなどがのさばり出ているのも面白い。（巳八郎）

No. 118「鄭家屯 巳八郎」



\*作品と文章で1ページのグラビア掲載。タイトルとなっている招牌は文中にあるように看板のこと。画面のあちこちに黒くて太い強烈な線が走っているのは、招牌が並んだ町並みの強烈な色彩を白黒で印象づけようとしたものかもしれないが、空間の抽象

化にもつながっている。左下には「鄭家屯」と地名があるが、鄭家屯は、この記事より 20 年近く前の 1916 年（大正 5）に、ささいなきっかけから日中両軍が衝突した鄭家屯事件が起こった場所で、現在の吉林省双遼市にある。

#### 第 117 号（昭和 9 年 3 月 1 日発行）

##### No. 119 [本溪湖]

本溪湖は薄汚い炭礦町である。プンプン悪臭を放つ小川を仕切りに、片方が炭礦の納屋、片方が街になっている。その納屋も街も小川を抱く山になっているので、軒並はダンダラ上りに重なりあっていて如何にもせゝこましい。

本通りは小川と並んだ一步横路に入ろうとすれば坂を登らなければならない。通りに立って山を見上げると、家の一軒一軒が見極めらるゝほどの急坂である。家と家との間には所々に空地が見え、其処にはノラ犬や豚が遊んでいる。

冬になると道路が凍りついて、田舎から出て来る百姓達はどれもこれも犬糞やら牛に曳かせた糞やらを引っぱってゆく。真黒に顔を汚した子供が驢馬に粉炭を積んでゆくのは此処の名物らしい。

此処では水の配給が大変らしく、街中に大きな井戸があって、その淵には次から次こぼしてゆく水で凍りついている。その周囲には何時も水汲みが順番を待っていて、危ない足場で水を手ぐり上げるのであるが、今にも滑りこみやしないかを見ていてヒヤヒヤする。くみ上げた水は危なげな足取どりで桶でツルツルに光った路、あの急坂を登ってゆくのも大抵のことではあるまい。（巳八郎）

##### No. 119 「本溪湖」

＊ 1 ページに図と文章が載るグラビア扱いである。現在の中国遼寧省本溪に位置する本溪湖炭鉱は、年間産出量が 40 ～ 50 万トンの炭鉱で、日中合弁事業として 1905 年（明治 38）に採掘が開始された。この記事から 8 年後の 1942 年（昭和 17）に、鉱山内の可燃性ガスと石炭の粉塵による爆発が起こり、炭鉱事故史上最大となる 1500 人以上の抗夫が犠牲となった事故が起こっている。



#### 第 118 号（昭和 9 年 3 月 15 日発行）

##### No. 120 [ハルビン]

ハルビンの冬は暗くて憂鬱だが、ムキ出しの夏よりも旅人には好ましいものがある。

風のない、ジンジンしめつける黙った寒さは旅愁をこゝろよくゆすぶるものである。

冬中、鉛のような雪空にとじ込められた人達は、何ヶ月と陽の目を見ないことがあるだろう。メインストリートのキタイスカヤ街さえも夜になると人足が絶えて燈は街頭にはかすかに窓を通して洩れ出る程の侘しさである。

石造りの硬い舗道を遅いロシヤ馬が大刻みにカポカポと音立てゝ走る。稀に見る人影も黙々として語らない。

クオーズナヤ街は埠頭区の中央にある南市場の裏通りでキタイスカヤとは目と鼻の近くにある。そこにロシヤ特有のドームの大寺院が気永に、まだ未完成の姿を晒している。何年前に着手したものかは知らないが、相当の年月を経て来ているものらしい。工事の足場が三年前と同じ儘に今年もまだ残っていた。

ハルビンに来て先ず目に留まるものは何と言っても寺院である。殊にこの大がゝりな寺院のドームは金色に塗られて、町の何処に突っ立って見ても、あた



りを圧迫するほど高く、鬱陶しく灰色の空に光っている。(巳八郎)

No. 120 「ハルビン 巳八郎写」



\*ハルビンに関しては、文中に「工事の足場が三年前と同じ儘に今年もまだ残っていた」とあるように、第 68 号(昭和 7 年 2 月 15 日発行)掲載の No. 48 [哈爾濱停車場] から第 69 号(昭和 7 年 3 月 1 日発行)の No. 55 [トリゴワヤの娼家] まで 8 図からなるルポルタージュがすでにある。掲載は 2 年前であるが、巳八郎がハルビン取材したのは昭和 6 年のことだったから 3 年前と記しているのであろう。以前の記事ではロシア色豊かな町の表情を活写していたが、一年後の昭和 8 年に満州国が建国され、同年 7 月 1 日にはハルビン特別市が成立している。以前は哈爾濱、今回はハルビンと表記を変えているのはそういった変化を映してのことだろうか。ただし、巳八郎のルポにはそうした政治的な背景は全く読み取れない。彼はいつものように淡々と風景と人々の暮らしを語るのみである。

第 119 号(昭和 9 年 4 月 1 日発行)

No. 121 [洮南]

洮南の三月は大連の一月よりも寒かった。駅から城内までの道路は雪が除けられてあったが、城内の空地には馬車の車軸が没するほど深く溜っていて馬はいくら鞭うたれても走れなかった。

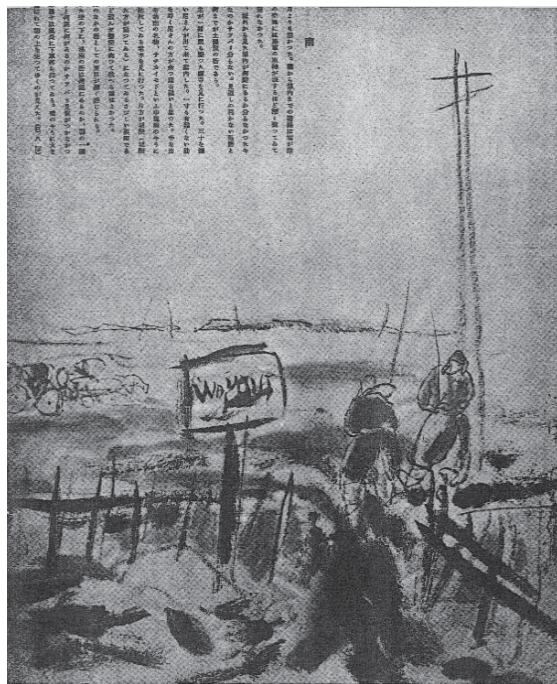
城内に入って見ると、城外から見た城内が何処にあるか分からなかったように、城外であるか城内なのかサッパリ分らない。見通しの利かない広野としか思われない。何から何までが土饅頭の街である。

城内の尼さんと苦力坊主と一緒に居る変わった禅寺を見に行った。三十を幾つも越していない、美しい尼さんが出て来て案内した。一寸も有難くない助平顔の仏さんの前に、鐘を叩く尼さんの方が余っ程有難いと思った。寺を出ると馬車はまた雪のなかを洮南の名物、サチカイモドという中風病のようにヘナヘナに枝を延ばして枯死している老木を見に行った。片方が城壁(城壁というよりも土壁と行った方が当たっている)になっているさびしい裏町である。蒙古犬が眼の痛むほど澄んだ碧空に向って吠える図はよかった。

大通りは如何にも広野のなかの街としての面目が濃く感じられる。

夕暮、黄色く暗く焼けた空の下に、洮南の街は何処にあるのか、駅の一隅に立ってもう一度見直すと何処に何があるのかサッパリ見当がつかなかった。吹きつけの駅前に馬車やは気長に下車客を待っている。嘘のように大きく見える黒い豚が犬に追われて雪の上を走ってゆくのが見えた。(巳八郎)

No. 121 「洮南 巳八郎」



\*グラビア扱いの 1 ページ掲載。記事の一部が図に



かかってレイアウトされているのは、巳八郎の指示かどうかはわからないが、作品をできるだけ大きく掲載するためと思われる。洮南<sup>とうなん</sup>は現在の中国吉林省白城市に位置する県級市である。県級市とは、省級・地級・県級・郷級という四つの行政区分のひとつで、日本でいえば県ではなく市の規模に近い。洮南市のある白城市は地級市である。

## 第 120 号（昭和 9 年 4 月 15 日発行）

### No. 122 〔新民〕

雨上がりの夕闇に、駅前の広場は泥沼のように光っていた。暗い提灯が忙しそうに走っている。

客を乗せた蒲鉾馬車は、車台の大部を泥に汚して、川でも渡るような風でゆっくり進んでゆく。

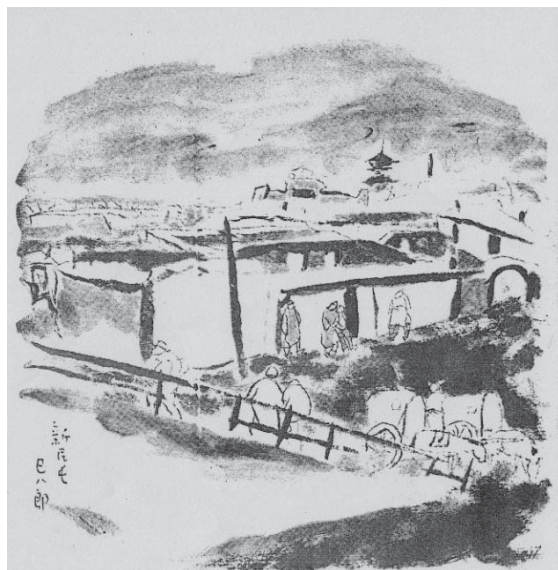
客棧の客引は、宿名を大きく記した子供の前垂のようなものを着けて、針金に紙張の提灯をてん手に高く掲げて、客を呼び立てている。

新民駅は市街よりも五十米も高いところにあって、駅後方はそのまゝの高台が延びて、砂原の荒地になっている。市街は満州特有の地低い平屋根づくりばかりで、所々に粮棧や大酒店の飾りものが突き出ているのや、まだ新芽をふかない裸樹の幹が、駅から一目で見渡せる。

辛うじて馬車を拾い出す。馬車が動き出すと大変だ。今にもぬかるみに横倒しを喰いそうに何かに車がぶつつかる事に身体ははね上り、泥水が飛び込んで来る始末である。驢馬の頭にくくりつけた鈴が鳴り、四辺の田舎臭い風景もよい。（巳八郎）

### No. 122 〔新民屯 巳八郎〕

＊グラビア扱いの 1 ページ。新民は現在の遼寧省の省都である瀋陽市に位置する県級市。客棧（コーチェン）とは、設備の粗末な宿屋や旅館を表す言葉であるが、前近代の中国で使われていた。日本語に置き換えると旅籠（はたご）に近い。客棧は、時には旅商人の荷を預かる倉庫を提供したり、代理運送業務もしたりすることがあった。また粮棧（リャンツァン）は雑穀問屋のこと。客棧、粮棧ともカタカナで示した中国語読みは、ふりがなつきの用例に沿ったものであり、この通りとは限らない。



## 第 121 号（昭和 9 年 5 月 1 日発行）

### No. 123 〔錦州〕

錦州城の中央、鼓楼に登って見ると、船形になった城壁と平べったい同じ造りの家並が、手にとるように見渡せる。

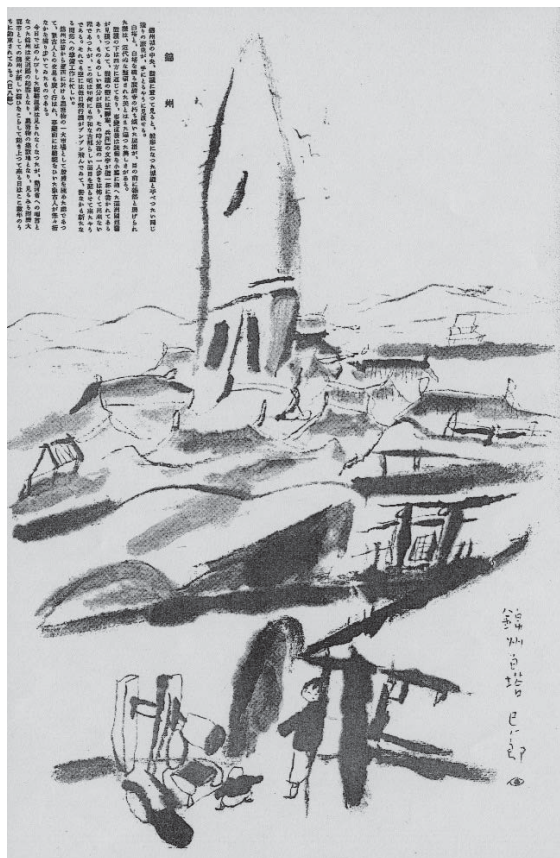
白塔と、白塔を繞る広済寺の朽ち傾いた屋根が、目の前に雑然と展げられた様は、近代的な整頓された美とはまた違った美しさがある。

鼓楼の下は四方に通じており、事変直後は刀剣を小脇に抱えた満州国巡警が見張っていて、鼓楼の壁には『静肅、兵匪』の文字が壁一杯に書かれてあるあたり、ものものしい気分が漲り、その時分夜の一人歩きは怖くて出来ない程であったが、この頃は如何にも平和な古都らしい面目を蘇らせて来たようである。それでも空には毎日飛行機がブンブン飛んでいて、街なかも新たなる開拓への準備工作に忙しい。

錦州は昔から遼西に於ける農産物の一大市場として殷盛を極めた処であって、蒙古人との交易も広く行われ、事変前には駱駝をひいた蒙古人が悠々街なかを練り歩いていたものである。

今日ではのんびりした駱駝風景は見られなくなったが、熱河省への咽喉となった錦州は交通路の起点となり、農産物の集散地となり、見るみる経済大都市としての錦州が新しい装いをこらして起き上がって来る日はここ数年のうちに約束されている。（巳八郎）

# No. 123 「錦秋白塔 巳八郎」



＊ 1 ページ大のグラビア。錦州は、中華民国成立後は遼寧省に帰属していたが、満州国の成立で奉天省の管轄となり、この記事が掲載された昭和9年には新設された錦州省に移管され、さらに3年後には市制が施行された。現在は遼寧省に属する地級市として人口300万人（2005年）を超える大都市になっている。また、描かれた広済寺と白塔は現在も錦州の代表的な観光名所のひとつに数えられている。

## 第122号（昭和9年5月15日発行）

### No. 124 「大西山貯水池 巳八郎」

大西山貯水池は大正広場から僅かに一里半。一日の行楽として、老人子供にも楽な道のりである。

大連近郊にこれほどの幽還境のあらうとは大方の人が、まだ知らないことゝ思う。

満々と水をたゝえた大池を周る山岳は、高くはないが重畳として春霞にうしろはぼかされ、見えなくなるあたり、一時、満州に在ることを忘れて終う。

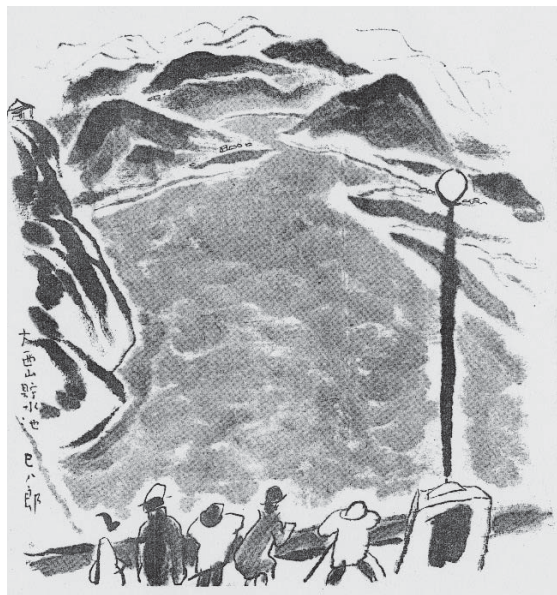
満水したら周囲四里を有するという貯水池は、ダ

ムさえ見なければ正に自然の火山湖である。

六百米に近い大きなダムに遮られて、ゆるく流れたスロープの芝原がある。芝原には桜が植えられ花見の頃の美しさが思いやられる。

春によし、青葉もゆる盛夏はまた春に優って水と山色の魅力があろう。 巳八郎

### No. 124 「大西山貯水池 巳八郎」



＊ 1 ページのグラビア。ダムはこの記事が掲載される2ヶ月前の3月に竣工したばかりである。

## 第123号（昭和9年6月1日発行）

### No. 125 「齊齊哈爾」

頭の皮までうずかせた寒気からやっと解放されて人心地になったと思う間も与えられず、初夏の風は意地悪く黄塵を吹き送る。

地びくい齊齊哈爾の家並は少し強い風に見舞われると瞬く間に見えなくなる。

事変直後は第二の哈爾浜を目論んで、街の有志家たちの間には意気込強く見えたが、なかなかその運びには至らぬものらしい。

齊齊哈爾にたった一つのオアシス、龍沙公園は生命の慰安所だ。高い石段を上ってゆくとお粗末ながらロシア風の花壇があって一寸異国の色を漂わせている。土地の満州人はこの公園にさまざまな店を持出して市場の様な繁盛ぶりだ。公園の下には嫩江<sup>のんこう</sup>の大きな流れがあり、気味の悪い大鯰、五尺に近い鯉



にスッポンが捕れる。河向こうには風の加減で砂丘が出来るあたり満州里からシベリヤに続く、見渡す限りの砂漠は恐ろしくて大きな眺めである。

砂漠の夕なぎとでも言うか、ハタと風の休んだ幾時間かを見つけて、家族連れ、二人連れの漫步風景があり、嫩江に糸を垂れて太公望を極めこむ幾組が見うけられる。 巳八郎

#### No. 125 「齐齐哈尔 巳八郎」



※ 1 ページ大のグラビア。齐齐哈尔に関しては前回紹介した第 92 号（昭和 8 年 2 月 15 日発行）掲載の「吹雪の齐齐哈尔」で平康里（娼家）を詳しくレポートージュした記事と挿図がある。

#### 第 124 号（昭和 9 年 6 月 15 日発行）

##### No. 126 「遼陽河」

遼陽河附近は目路の限り砂地が続いていて、泥柳の樹木などが置き忘れられたように、ポツンと樹っていて、言はば小さな砂漠風景である。

一寸風が吹くと砂の表面<sup>うわべ</sup>だけが小浪<sup>さざなみ</sup>のように綾をこしらえて、地を匍う野火のように飛んでゆくのが美しい。

この日は吹いては休み、暫くしてまた吹くといった風で、鳥の群が砂礫を喰って舞い上がっては飛ばず、風で再び地にたゞきつけられていた。

やっと風がおさまったと思うと今度は強い音をたてながら遠く横一列に線を描いた突風が此方に押し寄せて来る。その砂煙のさまが恰度馬隊でも突貫して来るようで、泥柳は頭を地面にこすりつけんばか

りにお出でお出でをしている。

この風のなかを大きな袋を担いだ四、五人と銃を持った何とも正体の判らぬ警備らしいのが、列車と並行して徒歩で行くのを見る。

この風のなかを、わざわざ列車を避けて歩くのだから、恐らく密輸入者であろうと車中の取沙汰は決めた。 巳八郎

#### No. 126 「遼陽河附近 巳八郎」



#### 《再掲載》No. 57 「遼陽河附近にて 巳八郎」



※ 1 ページ大のグラビア。遼陽河は遼寧省中央部の平原を流れる河であるが、ここでいう遼陽河は鉄道の駅の名である。遼陽河駅は錦州と瀋陽を結ぶ泰山線沿線にあり、No. 122 [新民] 駅より錦州寄り二つ目に位置する。また、この No. 126 は前号 P33 で紹介した No. 57 「遼陽河附近にて 巳八郎」をもとに人物たちをクローズアップして作品化したものであることが明かである。また、No. 122 の構図が絶妙である理由も、以前に描いたスケッチをトリミン



グしたものと解釈すれば理解しやすい。本図は、ルポルタージュ記事を視覚的に伝える挿絵ではなく、文章よりもさきにあって観賞されることを求める絵画作品である。2年前の記事と一緒に両図を比較すると巳八郎の意識の変化も読み取れる。

#### 第125号（昭和9年7月1日発行）

##### No.127〔復州城〕

瓦房店から十里、石塊の山でも股まで没する河なかでも突込んで行く装甲自動車ならぬガタバスが通っている。二時間で往くことになっているが、三時間は見て置かなければなるまい。

城内は金州と大方同じほどの大きさであるが、近代文化に程遠い為、古城らしい面影がそっくりそのままに保たれている。窓や壁に塗られてある色が街総体をコバルトに統一して見せるところは、山東の印象に似寄ったものがある。渤海に依って結ばれた往時を想えば偶然ではなからうと思う。

殊に南門外の石畳にこの感が深い。城門から外に一町ばかりの間の道路が全部石で固めてあって、路傍に三角の石の眼鏡橋のある辺り、泥柳の大木が房々とした緑を湛え、そこには毎朝豚肉や野菜の市がたつ。

城外の東南隅にはボロボロに朽ち崩壊した古塔が、しょんぼりと、繁った柳の間から頭を見せている。唐代のものだと伝えられているが、下部地面に接続する辺りが崩れ落ちて、今後ながく風雨に持ちこたえ得るものだろうか危ぶまれる。

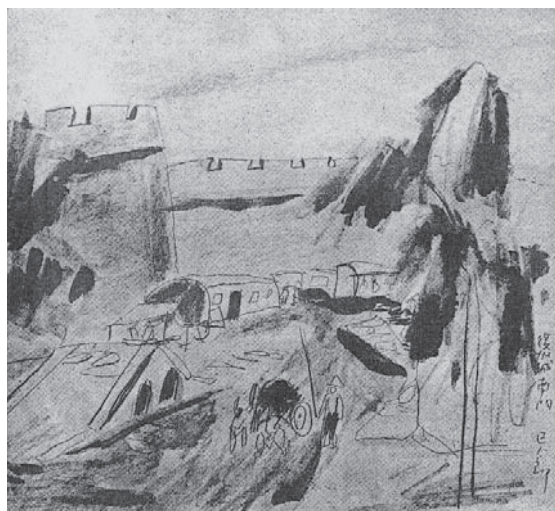
塔の附近は墓場になっていて、満州にはめづらしく草がおい繁り、内地の廃寺を偲ばせるものがある。塔の傍らに見事な五輪の塔が二基、これも危うく転落しそうである。

復県の県城として一時は殷盛を極めたものらしい城内も、最近諸官衛が瓦房店に移ってから急に今日の衰微をもたらしたらしい。

人間も質朴である。城門の警邏が、吾々日本人が通ると直立して敬礼するのには恐縮した。

—巳八郎—

##### No.127「復州城南門 巳八郎」



＊1ページ大のグラビア。瓦房店（がぼうてん）は遼東半島中西部に位置し、南に渤海を望む。復州はその旧名である。

#### 第126号（昭和9年7月15日発行）

##### No.128〔平泉の町〕

町の入口に古びたお寺の山門のような門があって、一筋の町が半里近くも真直に延びている。熱河の町は何処も然様であるが、瓦葺きのガッチリした家並がほこりっぽい街路に不似合いなほど整然としている。熱河戦では敵は退却の一手だったから町は戦争の災厄を受けず、今は戦争前よりも満人の人口が増して遙かに活況を呈しているようだ。

凌源から承德に行くにも、工事区のある下板城に行くにもここが中継地で、工事材料や食料品を積んだトラックがひっきりなしに往来する。天気の日にはほこりが濛々と舞い上り、一度雨が降ると車の輪などは半分近くも埋ってしまうほどひどいぬかるみに化してしまう。そんなときトラックの走るのを後から見てみると丁度尻振りダンスのような恰好だ。

まだ霧のような雨の降っている中で、これから何処へ行こうとするのか、七八人の若い女達がトラックの上に横坐到に坐りながら、別れの盃を交わしているのは物寂しかった。

満鉄や軍隊の外に日本人が千人位はいる。小学校も支那の家屋を修理して小ざっぱりしたのができていた。

宿屋は無論支那家屋であるが、奥まった室に這入ると芍薬の大輪が置床に投げざしにしてあり香りが室一ぱいに漂って、外の荒っぽい気分とまるで違っている。熱河には花が沢山あるから、もう少し日本人が沢山になったら花屋をやりたいと年とった宿の女中が言っていた。町の外れに果樹園があり、春には杏の花が美事だが、日本人達は花見のついでに枝を折って持ってかえると聞いて何処に行っても日本人は日本人らしい処を捨てないものと思った。

# No. 128 「平泉の街 昭和九年六月」



＊1 ページ大のグラビア。文中にある熱河とは、満州国にかつて存在した省名で、No. 123 [錦州] の記事文中でも言及されている。位置としては現在の河北省、遼寧省及び内モンゴル自治区の交差地域にあたる。なお、この作品や記事本文にはめずらしく「巳八郎」の署名はなく、眼の形のサインがあるのみである。

## 第 127 号（昭和 9 年 8 月 1 日発行）

### No. 129 [凌源附近]

ゴミゴミした凌源の町を出外れると、熱河の山も空も急にすがすがしい色を見せる。国道建設局で作ったバラス道路がまっすぐに延びて、そこを自動車で通ると畑に出ている農夫達が、仕事の手を休めてぼんやり見送る。はたけは南満で見るよりも余程青々しているし、その畑の中に大きな古塔の立っている図などは熱河特有のものだ。

川には小石が多く晴れた日には清冽な水が可愛い音を立てて流れている。車から下りると六月にしては涼しすぎる程の川風が頬を吹く。川下は緑の濃い

なだらかな山、川上にはそれとは又反対な切り立てた様な山がある。それは恰も乗鞍の麓から見た笠ヶ嶽の様な山容である。一帯が満州というよりも絵画で見る支那の感じに近い。

道の傍に大きな榆の木があって鉄道工事の人たちが休んでいる。運転手は『おーい、どうかい』と声をかけて通った。

### No. 129



＊1 ページ大のグラビア。凌源も平泉と同じく熱河省にある町。この画面には署名や書き込み、眼の形のサインもない。また、掲載当初からと思われる小さな欠損や穴が認められる。記事にも署名はない。

## 第 128 号（昭和 9 年 8 月 15 日発行）

### No. 130 [満州郷土画譜 山海關]

山海關駅に下りると日本の憲兵がいて一々厳重に所持品を調べる。その必要があるからだろうが旅行者は一寸いやな思いをせねばならぬ。町は思ったより汚く、狭くてゴミゴミしている。そのくせ車など真直に走れぬくらい、せせこましい道路に人の往来が多い。

山海關事件のとき日本軍の盛んな砲撃を受けて崩れた城壁がそのままになっている。天下第一関の城門に上って山上を這う城壁を見たら誰でも一様に昔を憶う心が湧いて来るだろう。城壁の上から見ると町はシンと静まり返って何処にあの雑沓があるかと思うくらいだ。時々驢馬に乗った見物人が鈴の音を立てて陽ざかりの城門を通る。

蛙声の高い郊外の道を二里近くも南へ行くと海岸で、北寧鐵路経営の海水浴場がある。万里の長城はこの海から起っている。城壁に近く英国の旗が風に



はためき真白なテントが張り並べられて明るい風景を見せる。元気のいい英国の青年達に混って、貧弱な日本の女達が泳いでいるのも近頃は見られる。

#### No. 130 「山海関 巳八郎」



＊1ページ大のグラビア。この号から「満州郷土画譜」というシリーズ名がグラビアページの端に現れたが、記事や図のあつかいは特に変わらない。文中に「天下第一関」とあるのは天下一の関所ということではなく、万里の長城における東から数えて一番目の関所の意味。山海関より西側を「関内」、東側の満洲を「関東」、「関外」と呼んだ。日露戦争後に租借権がロシアから日本に移った関東州や、そこに駐留した関東軍の名称はこれに由来する。

#### 第129号（昭和9年9月1日発行）

##### No. 131 [満州郷土画譜 碧山荘]

鎌倉から逗子あたりの別荘にありそうな名前だ。  
与謝野寛先生は碧山荘を歌って

快よし二十のこゝろ帰るなり碧山荘の初夏のかぜ  
奥さんは

長安の柳につづく日もあらん碧山荘のアカシヤの道  
これではやっぱり別荘のようである。目で見てもこんな歌が歌えるのだから世話はない。まだ見ない内地の人はどんな立派なところだろうと想像するだろう。碧山荘はたしかに大連の一つの名所なのだ。働蜂のような独身苦力一万人の収容所で、ウジのような生活相を見せてくれるその集団生活は、与謝野夫妻ではおよそ知ることの出来ない人間の生活が行われている。夏の夕、一日の労働を終えて、隆々たる

半裸体をズラリ幾十人もが並べて、道路に饅頭と大根の夕飯を楽しむ彼等、洗面器一杯の水で行水を済ます彼等である。辺りにはパイリンがさえずり、笛ふくものもある。一寸のびやかに見えないこともない。

#### No. 131 「巳八郎」



＊1ページ大のグラビア。かつて描いた苦力シリーズや碧山荘の様子を改めて作品化したものであろう。「パイリンがさえずり」とあるのは、蚊に似た毒虫の白蛉ではなく、路上におかれた鳥かごに飼われている鳥のこと（パイリンニャオとも言うらしい）を意味すると思われる。なお、このグラビアでは文章は横組みになっている。また、図中に書き込まれたように見える白抜きの「満州郷土画譜」は印刷文字である。

#### 第130号（昭和9年9月15日発行）

##### No. 132 [満州郷土画譜 海城]

海城の城内は沿線各地の城内中最も異色のある田舎情緒を備えているように思う。道幅せまく軒ひくく空地は何処を歩いても見当たらないほどに隙がない。真昼の街なかにも人の行き来で埋るばかりの賑やかさである。

魁星楼下の平康里は一ト夏でも過ごして見たくなる、素晴らしい場所を極めこんだものだ。前に護城河があり、河には蓮がかおり、河向うは遮るものゝない一望千里の平地になっている。背は城壁で北を防ぎ、風致を極めた魁星楼をひかえている。

城内で見る婦人は老人から少女に至る迄麗しい顔立のものばかりであるのに平康里は今堀りたての芋と言った田舎臭みのとれない然し健康そうな女が多かった。樹の下蔭に憩っている女等は嫋子とはどうみても見えなかった。次から次に違った音色の物売りがふれてゆくのも此処ではゆかしいものに思われた。

No. 132 「海城魁星楼 巳八郎」



※ 1 ページ大のグラビア。海城市は遼東半島の北に位置する遼寧省の都市。満州国建国以後の頃は奉天省の直轄だった。魁星は北斗七星の第 1 星であり、進士の試験に第 1 位の成績で及第した者も意味する。中国各地に魁星を祀った魁星楼や魁星閣があり、科挙試験の合格祈願が盛んだった。この図に描かれた海城の魁星楼は、18 世紀後半に建立され 1923 年に修復された建物で、1999 年に再建されたものが現存する。

第 131 号（昭和 9 年 10 月 1 日発行）

No. 133 「満州郷土画譜 25 平康里」

平康里の窩子（置屋）は大体一、二、三等の等級に分ってある。一等は小班と言っているが、満州では何々書館と書いてあるのが多い。書館は楼と同じもので、二等は茶室、三等は下処と言っている。同じ書館でも大都會の書館と齊齊哈爾あたりのそれとは二等位のひらきはある。

一等では客があると、吉原か新宿の大見世の妓夫太郎のような（満州では特に大きな坊主頭を使用している）のが大声で「見客」と客の来たことを奥に

通じる。すると別な男が出て来て一室に案内し「桃一個」と言う。これは沢山の女のなかから一人を選ぶということであるが、一人一人の女の名前を叫んで、女は戸口まで来て僅かな時間に顔から足まで、正面側面後姿の全面を見せて、次から次に現れて去る。女が決ると「開盤子」と言って、一時間ばかりお茶を飲んで女とふざけるだけのことであるが、満人はこれを吾々が四畳半に遊ぶ以上に楽しむらしい。二等は一等よりもいくらか簡単である。

三等になると、こんな手間をとらない。女が道路まで出ていて、客を引っぱるから品定めも手っ取り早いし交渉ごとともその場である。

言葉にも民情にも通じて来ると一、二等の遊びも面白からうが稀に旅のもののような気分で嫋見して歩くのには寧ろ、三等のむき出しのまゝの姿が興味深い。

三等も一等に色々あると同じに、無理に分けたら五等にも六等にも分けることが出来よう。地獄絵巻を現実に見るような都会地の下処は、息つく暇もないめまぐるしい人生の一相貌を見せつけられる。そこは苦力相手の、世界中で一番単純化された遊里の姿だ。

乳飲兒と添寝しながら春を売る四十女も此処では見うけられる。暗窩子（淫売婦）でないだけに殊更哀れを催すというものだ。悪の花とか毒の花とか美しい獵奇的言辞を以て片づけることの出来ない真剣な生活が窺える。巳八郎

No. 133 「平康里 巳八郎」



※ 1 ページ大のグラビア。この作品からシリーズ名に番号がついた。第 100 号に掲載された No. 80 「奉



天城外北」以後のグラビア作品に番号を付けるとつじつまが合う。まずはシリーズ名がつけられ、遅ればせながら通し番号もついたところである。<sup>ピンカンリ</sup>平康里については前号で紹介したように巳八郎は各地に取材し、ルポとスケッチを掲載してきた。この作品はあらためてグラビアでとりあげるにあたって描かれたものと思われる。画中に「桂玉堂」という屋号が見えるが、これまで描いたり言及したりした平康里に同名の店はなく、地域を特定するような表現もなされていない。

### 第 132 号 (昭和 9 年 10 月 15 日発行)

#### No. 134 [満州郷土画譜 26 賭博]

賭博は支那人の生活には飯の次になくではならぬものらしい。三銭の煙草一個買うにも飴玉一つ買うにもただでは買わぬ。支那街を歩いていると、何かの形で賭博が行われている。

街なかでは煙草や菓子<sup>チェスズ</sup>の行商人が手にしてジャラジャラならしている「籤子」というのが一番多く、何処の辻ででもやっている。

街なかで行われているのは賭博と名のつくようなものではないが、一步遊技場か納涼あたりに這入って見ると、その殆どのものが賭博の形式でないものはない、と言ってよい位に賭博の数々が見られる。身分相応に、金を持ったのは何千、何万両という大賭博をうつだろうし、路傍に生きる労働者はまたそれだけの賭博をうっている。

賭博はしかしその日稼ぎの労働者にとってまたとない慰安であろう。物欲の強い彼等に虫のように生きることだけを強いてもそれは無理だ。然し彼等は虫のように生きるより他はない。いくら分別して見ても日に三十銭か四十銭より収入は増えはせぬ一生である。彼等は自分の身上を誰よりもよく心得ていて決して謀反は起こさぬ。そのかわりに彼等は何かの形でそれをまぎらわそうとする。それは現実以外のものに求めるより方法がない。それが賭博ではなかろうか。用を便ずる時間さえも楽しもうとする彼等である。小は三銭の煙草から、銅子兒三十枚もかけるとなれば、彼等の全神経は生命諸共の真剣味を帯びて来る。ほんとうの意味で賭博は彼等にとって

なくてはならぬものではなかろうか。あり余る金で賭博する者には賭博は娯楽であるが、その日その日を送る者には生きる為になくてならぬものであるかも知れぬ。

絵は、満州の至るところで行われている「押寶<sup>ヤボウ</sup>」という賭博の変形したものである。 巳八郎

#### No. 134 [巳八郎]



\* 1 ページ大のグラビア。前々号で紹介したNo. 14 [碧山荘絵巻 3・賭窩]には、碧山荘の苦力たちが本図と同じ賭博をしている様子が鬼気迫るような表現で描かれていた。その時の記事では押寶は「おうほう」とルビがふられていたが、本記事では「ヤボウ」とふられている。「ヤボウ」のほうが中国語読みに近いのであろう。

### 第 134 号 (昭和 9 年 11 月 15 日発行)

#### No. 135 [満州郷土画譜 27 新京]

野原の中に、ポツカリ蜃気楼のように近代都市を捏<sup>で</sup>っち上げようとしている新京建設風景を横目で見ながら、馬車を附属地から城内に走らせる。余り広くもない道路にゴツタ返している人、馬車、洋車、自動車の群。濛々と舞い立つ塵埃は、満州のいづれの都市にも付きものだが、此処のホコリは一段と深い。城内と言っても奉天などの比ではない。それも概ねは洋化されていて満州色に乏しい。

<sup>いっとうはう</sup>伊通河は南門を出たところにあって、道を曲がると街に不釣合な堂々たる鉄筋コンクリートの橋がある。そのたもとに関帝廟があって、此のあたりに建並んでいる土壁の、低い、窓の少ない汚穢な満陣家

屋と、ごみごみした雑沓と、異臭と、騒音とが、漸く純粋な満州の臭をかがしてくれる。

河原に豚がぞろぞろ何やら餌を漁っている。その豚をカメラに収めようと河原へ降りて行くと、異臭が鼻を衝いてくる。気がつくと河原の到る処人糞だ。うっかり歩けない。見るとあちこちに尻をまくって煙草を喫い乍らのんびりと用を足している。豚が漁っていた餌とはこれだ。豚よりも糞を垂れている人間をカメラに収めようと近づいて行ったら、<sup>はぢ</sup>慚もなく、ほがらかにしゃがんでいる面を見ると、こちらの方で顔負してう。

No. 135「新京関帝廟 巳八郎」



\* 1 ページ大のグラビア。1932 年の満州国建国により長春を新京と改めて首都とし、日本が中心となった都市建設が始まった。この記事はそれから約 2 年半後のもので、建設途上の様子が窺える。新京は 1945 年の満州国滅亡まで発展し、附属地を含む人口は建国時約 10 万人から約 86 万人まで増加した。冒頭の「近代都市を<sup>で</sup>捏っち上げようとしている」という表現はなかなか過激である。文中の洋車とは人力車のこと。

### 第 135 号（昭和 9 年 12 月 1 日発行）

#### No. 136「満州郷土画譜 28 麻袋ぬい」

あわただしく寒さが迫ってくると名物の特産がじわりじわり頭を掲げて次にどッと津波のように流れ出てくる。

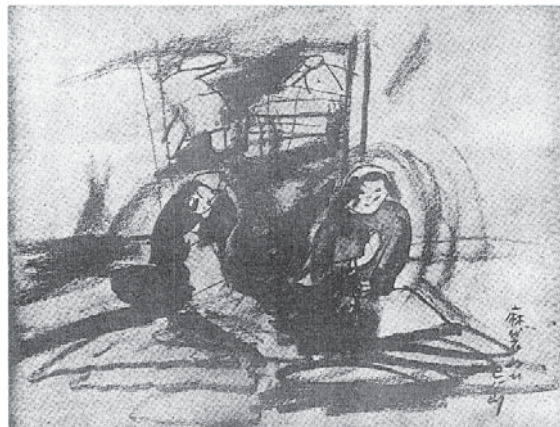
こゝは風をよけた南向きの陽だまり、むせ帰る塵の中に胡坐をかいた女達が大きな縫針を動かしている。紅い着物の十六七の娘から皺くちやの婆さんまで色とりどりだ。お附物のおしゃべりは誰の陰口か

笑声が姦しい。

埠頭から苦力に曳かれて運ばれた古麻袋の穴がこゝでツギを当てられると、また二度の勤めに現場に返される。

一枚縫って幾らになるのか、どうせ親方に上前をはねられるのだろうが女達には大事な臍繰り金の書入れ時だ。じっと看着いると、一人々々の年配や表情などからさまざま微笑ましい想像が湧く。

No. 136「麻袋ぬい 巳八郎」



\* 1 ページ大のグラビア

### 第 136 号（昭和 9 年 12 月 15 日発行）

#### No. 137「満州郷土画譜 29 鳥市」

アカシヤの葉が全く色を失い、煉瓦壁のすゝけたのが目立って見える頃になると、西崗子の東南隅、伏見臺寄りの小高い丘を下りて道を隔てゝ電影館のある場所には毎年小鳥の市がたつ。

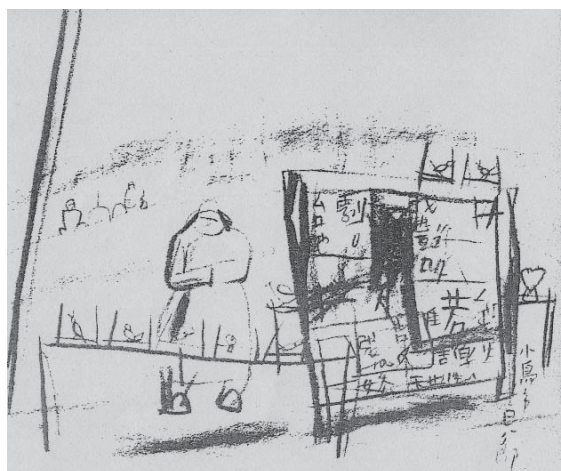
市と言ってもほんのわづかな数でしかないが、鳥はみな籠に入れたものでなく、とまり木に脚を紐でくゝられた裸身であるのが此処には面白い。どの鳥も手なづけて慣らし飼いをするのばかりである。

吹き晒しの野天に芝居の広告板がたった一つ、重なり合って張られた紅紙が特に目立つ。鳥屋は広告板を巧に利用して台をくくりつけ、至るところに鳥をとまらせている。美事に羽さばきのかかった鷹を拳にのせ、房を片手に掴んだ肥大漢が自慢そうに鳥屋の前を、これ見よがしに往き来するのがある。

鈴を鳴らして小鳥を放し、屋根の上で暫く啼かせて再び鈴の音で呼び戻し、閑人を喜ばせるものもいる。（巳八郎）



No. 137 「小島市 巳八郎」



第 137 号 (昭和 10 年 1 月 1 日発行)

No. 138 [満州郷土画譜 30 コマとハネ]

支那正月が近づくとフクラ雀のようにまんまる着込んだ子供等が滑りのよい石畳やコンクリートの舗道に塊<sup>トコロ</sup>って陀羅というコマをまわして遊んでいる。コマは縦に長い円柱形の底の尖ったもので、丸太だけのものもあり、外側を武で囲んだものもある。棒の先に二尺ほどの紐をつけてコマの溝のところに巻きつけて廻し、紐でたゞけば何時までも廻っている。

もう一つは<sup>テイチアル</sup>踢毬という日本の羽子板のハネのようなもので、ムクロのかわりに一文銭か一文銭のような平たい丸い鉄に羽根や紙をくっつけているのを脚の先で蹴上げるのである。纏足の満足に歩けない女の子までが器用に片脚で突っ立って蹴った数を数えている。

No. 138 [巳八郎]



\* 1 ページ大のグラビア。文中には中国の独楽のことを陀羅と表記しているが、これは陀螺の誤植と思

われる。また踢毬という羽根蹴りゲームは、近年は<sup>ジャンチウ</sup>毬球と呼ばれるスポーツとして整備され、中国以外の東南アジアやベトナムでも行われている。

第 138 号 (昭和 10 年 1 月 15 日発行)

No. 139 ~ 143 [満州郷土画譜 31 街頭拾遺]

\* 1 ページに 5 点の人物画と解説を配置したグラビア。ここでは 1 図づつに番号をふった。

No. 139 [売饅頭の]

厳冬の街頭に、屋ならばやはり洋車、馬車の溜りか小路の四ツ辻などに多い。トンキョウな大声をあげて客をよんでいる。

饅頭は冷えないように垢で黒光りのする綿蒲団に包み、見本の石膏饅頭が一つ突き刺してある。

No. 139



No. 140 [趕車的]

何処も同じ馬車曳は威勢がよい。殊に多の服装は苦力特有のものものしさとチョツとかヤツとか馬を駆ってゆくさまは何と言っても街頭一番の武者振りだ。右手に鞭、夜ならば左手に新聞紙を円錐形にしたなかにローソクを入れ、或いは針金に油紙を張った提灯を持っている。

No. 140



No. 141 [杏仁湯的]

人気のない深夜の街上に、ポッポ湯気をあげている何処となしアハレを思わせるのがこの杏仁湯的である。小造りの美しい担いものと身綺麗なのは杏仁湯の身上らしく、何処で見るのも美事な商売道具である。品物はお粥に砂糖をいれたアッサリした飲物である。

No. 141



No. 142 [修拾鞋的]

吹き曝しの四ツ辻に一日中動かぬ商売だけに傍観のギョウギョウしさは街頭随一であろう。股下にはお粗末な火鉢を置き、風上には布をめぐらして風壁

をつくったのもある。

主に老人で、ハナミズは凍らしたまゝ、髭は真白に花を咲かし、赤児の頭ほどの手先はなかなか思うように動いていない。

No. 142



No. 143 [巡補]

夏ならば銃を小脇にかい込んで四辺を威圧したさすがの巡補君も、極寒の巡察には身なりをかまってはられないと見え、そのダラシなさは街頭一であろう。

ケダルそうな眼の玉をパチクリさせて前かがみに曳きずるような外套を着込んで、腹のすいた熊のような恰好で歩いている。(絵と文 巳八郎)

No. 143





- ⑤ 東京美術倶楽部百年史編纂委員会編『美術商の百年 東京美術倶楽部百年史』（株式会社東京美術倶楽部・東京美術商共同組合、平成十八年）
  - ⑥ 齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家たち』（思文閣出版、平成二十四年）
  - ⑦ 岡山理香「建築家仰木魯堂の生涯とその作品について(1)」『東京都市大学共通教育学部紀要』七号（平成二十六年）
-

(78)

現在、福岡市美術館蔵（重要文化財《五祖荷鋤図》）。桑名松平家伝来。附属の売渡札より、昭和十六年二月十八日の入札で実業家・前山久吉（一八七二—一九三七）から入手したことがわかる。当日病床にあったため入札に参加できなかった仰木魯堂に、耳庵は一時この掛軸を貸与していた。その間、魯堂はこの幅を模写して耳庵に贈り、耳庵は五逸の賛を写して愉しんだ（『茶道春秋』上、一一五頁）。

(79)

山本条太郎（一八六七—一九三六）。実業家、政治家、茶人。三井物産常務、衆議院議員、満州鉄道総裁など。松永耳庵の別荘であった柳瀬荘（埼玉県所沢市）敷地内に現存する二畳台目の茶室「久木庵」は、山本条太郎の没後（昭和十四年頃）に松永耳庵へ譲渡されたもので、庵号も「条」の字に由来すると伝わる。この茶室は江戸時代の武士にして茶人であった土岐二三の遺構とされ、本書や耳庵の著書においても、柳瀬荘での茶事の記録に時折登場する。当該記事によると「且坐席」（本書第九冊、影印本下巻一五頁）や「自在軒」（耳庵『茶道春秋』下、一四五頁）とも称されていた。

(80)

島田佳矣（一八七〇—一九六二）。図案家。

(81)

古筆了信（一八六三—一九四六）。古筆鑑定家。古筆家一三代。

(82)

栗原芳太郎（生没年未詳）。道具商（本書影印本の「人物略解説」七三七頁）。

(83)

斎藤弥之助（生没年未詳）。道具商（本書影印本の「人物略解説」七三八頁）。

(84)

名は未詳。道具商（本書影印本の「人物略解説」七三九頁）。

(85)

石川宗叔（一八四九—一九三九）、本名は聚三。別号に和齋、智月庵。茶匠。

(86)

大島義修（一八七二—一九三五）、旧姓は蘆田。教育家。帝室博物館総長。

(87)

山本淇翠（生没年未詳）は道具商（本書影印本の「人物略解説」七四八頁）。

(88)

柳川鉄宗（生没年未詳）は煎茶人（本書影印本の「人物略解説」七四二頁）。

(89)

中野忠太郎（一八六二—一九三九）、号は春山。実業家。新潟での油田開発で「石油王」と謳われた中野貫一（一八四六—一九二八）の長男。茶人、美術品収集家でもあり、収集品は邸宅・庭園とともに新潟市に寄贈された（公益財団法人中野邸記念館）。

(90)

樋口三郎兵衛（一八六三—没年未詳）、本名は松次郎。浪華画学校校長。

(91)

土橋玄琢（生没年未詳）、本名は嘉兵衛。京都の道具商（本書影印本の「人物略解説」七四二頁）。

(92)

松平直亮（一八六五—一九四〇）。華族（爵位は伯爵）。松平不昧の子孫で、茶の湯に親しんだ。

(93)

畠山即翁（一八八一—一九七二）、本名は一清。実業家。ポンプの開発と事業化に取り組み、株式会社荏原製作所を創業。代表的な近代数寄者の一人。政斎、耳庵とも親交が深く、本書においても昭和十一年から同三十二年まで、席主や招客として度々登場する。

(94)

加藤正治（一八七一—一九五二）、旧姓は平林。号は犀水。法学者。中央大学初代総長。

(95)

初代・津村重舎（一八七二—一九四二）。実業家。現在の株式会社ツムラの創業者。

(96)

川添寅造（生没年未詳）。京都の道具商は（本書影印本の「人物略解説」七三七頁）。

(97)

丸岡耕圃（生没年未詳）。金沢の築庭師（本書影印本の「人物略解説」七四六頁）。

(98)

瀬津伊之助（一八九六—一九六九）。道具商「瀬津雅陶堂」。

(99)

中村作次郎（一八五八—没年未詳）。道具商「中村好古堂」。

(100)

川部太郎（一八九〇—一九三七）。道具商「川部商会」。

#### 〈主要参考文献〉

- ① 斎藤利助『書画骨董回顧五十年』（四季社、昭和三十二年）
- ② 展覧会図録『木工芸 明治から現代まで』（東京国立近代美術館 昭和六十二年）
- ③ 『講談社日本人名大辞典』（講談社、平成十三年）
- ④ 『角川茶道大事典』（角川書店、平成十四年）



- (45) 伊丹揚山（生没年未詳）、本名は信太郎。道具商。屋号「大元」。福岡市美術館研究紀要第五号、四五頁参照。
- (46) 吉田梅露（一八八七頃—一九三二）、本名は五郎三郎。道具商「水戸幸」二代目。
- (47) 室田義文（一八四七—一九三八）。外交官、実業家。明治四十二年（一九〇九）伊藤博文に随行中、伊藤の暗殺事件に遭遇。
- (48) 益田家の家従（本書影印本の「人物略解説」七四四頁）。
- (49) この「勘一郎」は「貨一郎」を誤記したものか。柏木貨一郎（一八四一—一八九八）、号は探古、探古齋。古美術鑑定家、収集家、建築家。明治維新後文部省に勤務し、正倉院などの宝物調査にあたった。
- (50) 牧田めい（一八八四—没年未詳）。團琢磨の長女。三池炭鉱会長を務めた実業家・牧田環（一八七一—一九四三）の妻。
- (51) 藤谷宗仁（生没年未詳）。茶人。高橋帶庵に茶の手ほどきをした茶人の一人（参考文献⑥、三五頁）。
- (52) 川面義雄（一八八〇—一九六三）。版画家。複製木版技術の先駆者として知られる。
- (53) 大心義統（一六五七—一七三〇）のことか。大心義統は、号は巨妙子、小心子など。臨済宗の僧侶で大徳寺住持を務めた。
- (54) 清水亀蔵（一八七五—一九四八）、号は南山。彫金家。
- (55) 高村豊周（一八九〇—一九七二）。鑄金家。彫刻家・高村光雲（一八五二—一九三四）の三男。
- (56) 六代・清水六兵衛（一九〇一—一九八〇）、本名は正太郎。号は緑晴。
- (57) 北原千緑（一八八七—一九五二）、号は千鹿。彫金家。
- (58) 昭和三年（一九二八）年の第九回帝展において、木工界で初めて特選を受賞した経箱「遠き時代を偲びて」（参考文献②所載、作品番号一三）をさすことは間違いない。ただここでは昭和五年の出来事であるかのように記述されている。執筆時より二十年以上前のことを、思い起こすままに筆を走らせたゆえの誤りであろうか。

- (59) 香取秀真（一八七四—一九五四）。鑄金家、研究者。東京美術学校（現在の東京藝術大学）教授。香取正彦（前掲註11）の父。
- (60) 前掲註（4）
- (61) 未詳。
- (62) 粟田天青（一八七八—一九五三）、本名は常太郎。別号に有声庵。茶道史家。
- (63) 米山梅吉（一八六八—一九四六）、銀行家。
- (64) 未詳。
- (65) 二代・渡辺喜三郎（一八六九—一九四三）のことか。塗師。團狸山や益田鈍翁の知遇を受けた。
- (66) 未詳。
- (67) 沢田宗味（一八七五頃—没年未詳）。金工家。生没年は未詳であるが、畠山記念館のご教示によると、同館による聞き取り調査で昭和二十二年に七十二才であったという情報が得られている。
- (68) 津田信夫（一八七五—一九四六）、号は大寿。鑄金家。東京美術学校（現在の東京藝術大学）教授。
- (69) 関野聖雲（一八八九—一九四七）、本名は金太郎。彫刻家。東京美術学校（現在の東京藝術大学）教授。
- (70) 板谷波山（一八七二—一九六三）、本名は嘉七。陶芸家。別号に勤川。
- (71) 二〇代・堆朱楊成（一八八〇—一九五二）、本名は豊五郎。漆芸家。未詳。
- (72) 海野清（一八八四—一九五六）。彫金家。東京美術学校（現在の東京藝術大学）教授。海野勝珉の四男。
- (73) 飯塚琅玕齋（一八九〇—一九五八）、本名は弥之助。竹芸家。
- (74) 四谷正美（一八七六—一九四一）。金工家。
- (75) 黒板勝美（一八七四—一九四六）、号は虚心。歴史学者（古文書学）。東京帝国大学名誉教授。
- (76) 本書第一冊、昭和五年四月十九日の記録「遠州会 芝田中邸に於る」（影印本上巻、五六頁。本稿六六—六五頁に詳述）。

- 古筆を模写したほか木版やコロタイプによる複製本を刊行した。また、益田鈍翁、原三溪、藤原曉雲、松永耳庵、畠山即翁らとも親しく交わった。
- (15) 森川如春庵（一八八七―一九八〇）、本名は勘一郎。古筆研究家にして茶人。益田鈍翁の知遇を得た。佐竹本三十六歌仙の分割時に、『柿本人麿』（出光美術館蔵）を入手したことも知られる。
- (16) この「琉球」は「琉球」の誤字と思われる。
- (17) 吉田白雲（生没年未詳）。煎茶家。
- (18) 坂井久波（生没年未詳）。吉田白雲の父。
- (19) 老舗料亭「八百善」で修業した料理人（本書影印本の「人物略解説」七三八頁）。
- (20) 現在、福岡市美術館蔵（藤村庸軒作《茶杓 銘「わたし」》）。
- (21) 堀口蘇山（生没年未詳）。研究者（仏教美術）。
- (22) 田辺孝次（一八九〇―一九四五）。研究者。東京美術学校教授として工芸史を講じた。
- (23) 田辺泰（一八九九―一九八二）。研究者。早稲田大学教授として建築史を講じた。
- (24) 鎌倉芳太郎（一八九八―一九八三）。染織家、研究者。沖縄の紅型・藍型等型絵染の研究・伝承者として知られる。
- (25) 吉川霊華（一八七五―一九二九）。日本画家。本名は準。東洋の古典芸術に学び流麗な線描を得意とした。
- (26) 正木直彦（一八六二―一九四〇）。美術教育・行政家。明治三十四年（一九〇一）から昭和七年（一九三二）まで東京美術学校校長を務めた。
- (27) 今泉也軒（一八五〇―一九三二）。美術史家。岡倉天心らとともに東京美術学校の設立に尽力した。
- (28) 横井半三郎（一八八三―一九四五）、号は夜雨。実業家。
- (29) 新橋の料亭（本書影印本の「人物略解説」七三六頁）。
- (30) 大野鈍阿（一八八五―一九五二）、本名は準一。陶芸家。
- (31) 田中平八（一八三四―一八八四）。実業家。開港後の横浜で生糸を売り込

- み活躍。「天下の糸平」として知られる。
- (32) 竹内有竹（生没年未詳）、本名は広太郎。別号に三巴、大声。道具商。仰木魯堂の縁者。
- (33) 小堀宗明（一八八八―一九六二）、本名は正徳。別号に其心庵。茶匠。遠州流十一世として、小堀家の復興を果たした。
- (34) 未詳。
- (35) 後藤良（一八八二―一九五七）。彫刻家。彫刻家後藤貞行の次男。少年時より父貞行について彫刻を学び、また高村光雲について伝統的な木彫技法の修行に励んだ。
- (36) 福井利吉郎（一八八六―一九七二）。美術史学者。東北大学名誉教授。
- (37) 根津青山（一八六〇―一九四〇）、名は嘉一郎。実業家、政治家。東京地下鉄・東武鉄道・南海鉄道などを経営し、「鉄道王」とも謳われた。高橋需庵の指導を受けて茶の湯を始め、独自の審美眼によって精力的な茶道具収集を行った。収集対象は多岐にわたり、日本・東洋美術の一大コレクションを築き上げた。
- (38) この「掃雲台」は「碧雲台」の誤記。
- (39) この「碧雲台」は「掃雲台」の誤記。
- (40) 佐藤三吉（一八五八―一九四三）。外科医、医学博士、貴族院議員。日本外科医学の先駆者。
- (41) 相沢康恵（生没年未詳）は「相澤章未亡人 茶友」（本書影印本の「人物略解説」七三三頁）。
- (42) 平沼淑郎（一八六四―一九三八）。経済学者、法学博士。早稲田大学商学部長。
- (43) 円山伝衣（全提要宗）（一八七二―一九四〇）。俗姓は円山、室号は伝衣。大徳寺四百八十八世、大徳寺派第六代管長。裏千家十四代淡々斎が師事。
- (44) 藤瀬秀子（生没年未詳）。歌人。茶人として昭和前期に活躍。夫は、藤瀬政次郎（一八六七―一九二七）、三井物産取締役、東洋綿花株式会社代表取締役社長。



せられ箒庵初め、團夫人、益田夫人、馬越夫人の外、

世話人山邊、中村(99)、川部(100)、其外多数参列した。席八大雄殿の裏丘陵に好位置を  
伊丹鈍阿、横井夜雨夫婦、魯堂余

ベテ三畳台目 水屋附  
である 広間構え

床にハ一休和尚筆 墨蹟  
三行 花入 藤原時代  
経筒 花 白玉  
ハシバミ 釜 芦屋  
蓮花地文 炬縁 時代  
黒柿

水指 時代  
根来 茶入 古瀬戸  
大海 銘 松島  
石州箱 、茶杓 箒庵新作  
銘ト、ハ、グリ 、建水 ハシネラ  
蓋置青竹

広間、釈迦像 唐絵  
宋人 、棚にハ鍍金 博山、  
香炉 香小倉山 書  
院 藤原時代経巻 法華經  
一字一塔 帙上二

已上の飾附道具組にて、濃茶の振舞があり、用いられし茶碗ハ 柿、  
遠州歌箱 柿の替

この柿の替茶碗は、團家秘蔵の名碗にて、他はすべて魯堂持出しであった。  
お茶の終ると共に陶工鈍阿君が、管長帰依の為、自作茶碗を寄贈せるも奇特  
であった。猶茶杓ドングリは箒庵翁より改め紀念の為とて余ニ贈与せられし  
は、何よりの好紀念であった。

禅門とて食事は食堂長が卓上にて供養あり。晴れて秋空を宏大な伽藍を  
一巡し流石曹洞関東本山道場のさまを仰ぎ宗祖道元禅師の遺業の高大無  
辺を感じた。

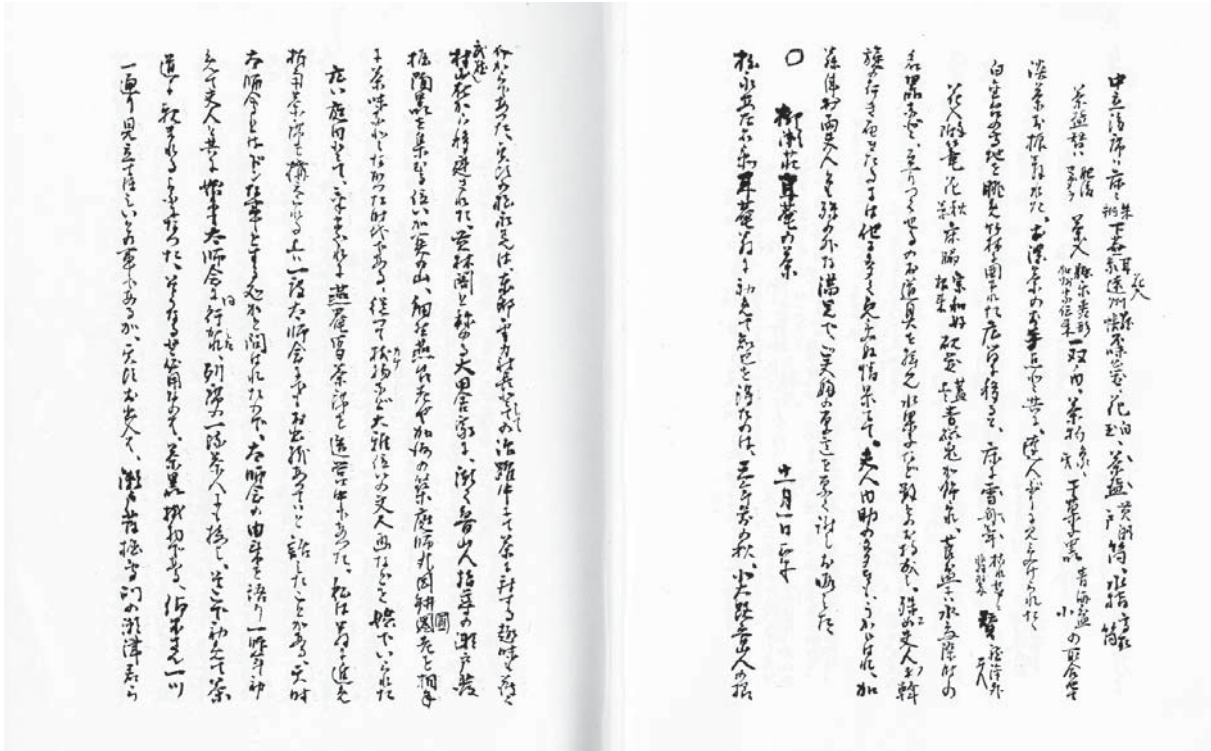
この第二冊はこれにて終り第三冊にうつる。

廿七回

昭和七年十月より同十一年十月下旬までの記録を失した為、此間の記事を  
録しえず、中断の止むなきは遺憾である。他日発見の期あらば改分挿録する  
こともあらん

〈註〉

- (1) 北大路魯山人(一八八三—一九五九)。書家、陶芸家。若くして書に優れ、料理・美術にも才能を発揮した。独創的な料理と什器をもって星岡茶寮を開く一方、北鎌倉に星岡窯を築いて本格的な作陶を行った。
- (2) 北原大輔(一八八九—一九五一)。陶磁史研究者。東京美術学校を卒業した後、帝室博物館に勤務した。
- (3) 細野燕台(一八七二—一九六二)。商人、茶人。本名は申三。魯山人の才能を認めた最初の人物としても知られる。
- (4) 伊藤信造(生没年未詳)。道具商「推古堂」。
- (5) 岡田三郎助(一八六九—一九三九)。洋画家。温雅な画風で官展に重きをなし、美術学校で多くの後進を育てた。
- (6) 辻永(一八八四—一九七四)。洋画家。岡田三郎助に師事した。
- (7) 菅原栄蔵(一八九二—一九六七)。建築家。直線を巧みに組み合わせた細部、スクラッチタイルを多用した作風で知られる。
- (8) 岩田藤七(一八九三—一九八〇)。ガラス工芸家。ガラスの色彩と流動感を生かした表現を特徴とする。
- (9) 守屋松亭(一八九〇—一九七二)。漆芸家。
- (10) 中川哲哉(一八九七—一九七六)。漆芸家。
- (11) 香取正彦(一八九九—一九八八)。鍍金家。香取秀真(後掲註59)の長男。
- (12) 山澄亨一(生没年未詳)。道具商。山澄力蔵の子息。
- (13) 藤原公任撰の三十六歌仙に基づき編まれた『三十六人集』のほぼ全体に近い形で残る最も古い写本。平安末に後白河法皇の宝蔵にあったことが知られるが、天文十八年(一五四九)に後奈良天皇から本願寺に下賜され、明示二十九年(一八六九)に本願寺での調査中に再発見された。そのうち、昭和四年(一九二九)に分割された貫之集下と伊勢集の断簡は石山切の名で知られ、現在諸所に分蔵されている。
- (14) 田中親美(一八七五—一九七五)、本名は茂太郎。古筆研究家。多くの古画・



「柳瀬莊耳庵の茶」昭和 11 年 11 月 1 日

影印本より転載

水指 瀬戸 時代ケイカン  
檀手 中次少庵在判 茶碗 対州焼  
茂三 替 黒瀬戸  
筒 茶杓 ハ 象  
牙

十一月初め謂は口切であるべきに、田舎家にての催しとて、新来客に対して大炉の茶も、新入茶人としては大侘茶趣向。或ハ近來の富豪数寄者への面あてかとも思はれた。

懷石とて、取立る程の馳走もなく、ただ広大な自園採り立の野菜にハ他に見られぬ、おいしさがあつた。お淡が終り大広間に移ると、床に良隆筆大師絵巻の残欠

花入 古信楽壺  
花秋草 書院 新羅時代  
鍍金三足 香炉、盆 内朱唐物、近衛忠山公筆  
四方 朗詠の帖

以上のよふな飾り附の間にて番茶水菓子のお振舞があり、一同広い庭内を散策山上より武蔵野の秋色を賞し、益田夫人一行は四時帰京され、余ハ田

中氏と共に、集合した 奈良の  
森田や 河内金剛寺住職らと共に、今日の水屋幹旋者を

まじえ、夕食を供せられ、金剛寺和尚とも金剛寺参りなど約し、八時半帰京した。道具組にも多く民芸的が見られる内茶碗 新羅香炉など余の推薦せる者である。

○鶴見總持寺 倚松庵席開 十一月三日

曹洞宗本山總持寺塔中に先代管長より發願中の茶席倚松庵が高橋籌庵翁指導魯堂設計で落成した。其の開席の今日、招かれて参列した。この朝、伊豆長岡南風山莊から帰浜後病床中の原三溪翁を本牧本邸に見舞った。倚松庵は其の庵号木額を余に托されたので、この日余は寄贈した。

本山大講堂では、茶席献納大法会が、管長導師にて衆僧大勢によって厳修

花入手 竈花秋 床脇宗和好 硯箱 蓋上二青磁鬼が飾られ、蓑盆にハ水鳥染

附の名器など、至りつくせるのお道具を拝見 水菓子など数々のお持成し。殊ニ夫人ノ幹旋の行き届きたるには他に多く見受ぬ情景とて、夫人内助の多きも、うかがはれ、加藤津村両夫人とも殊の外な満足で、ご夫婦の厚意を厚く謝しお暇した。

## ○柳瀬莊耳庵の茶 十一月一日正午

P 132

松永安左右衛門耳庵翁に初めて知己を得たのは、三年前の秋、北大路魯山人の紹介からであつた。其頃の松永さんは、東邦電力社長として活躍中にて茶に對する趣味も薄く武蔵村山在から移建された、黄林閣と称ゆる大田舎家に、漸く魯山人指導の瀬戸発掘陶器を集むる位いが関の山、細野燕台老や加州の築庭師丸岡耕圃老を相手に茶味などなかつた時代である。従つて掛物など大雅位の文人画などを娯でいられた

広い庭内とて、気まぐれに燕庵写茶席を造営中であつた。私は翁に進め折角茶席を構えられる上ハ一度大師会にでもお出掛あつてハと話したことがある。其時大師会とはドンな事をする処かと問はれたので、大師会の由来を語り一昨年初めて夫人と共に大師会に同行した。列席の一流茶人にも接し、そこで初めて茶道に親まれるよふになつた。そうなると必用なのは、茶器掛物である。仰木さん一ツ一通り見立てほしいとの事であるが、其頃お出入は、瀬戸発掘専門の瀬津君(98)らで当時の瀬津君では茶器選定は一寸無理でもあり、私は書画は中村好古堂に限る、兎も角何とかすると引受け、魯堂蔵品の内から一部見立て推薦した

何事も敗ぬきらしいの耳庵翁、思い切財を投して蒐集を初られた。殊に昨年

茶道の本山益田さんや田中親美翁を紹介して以来急足の進歩振りを見せられた。茶の点て方など人の指導を受けることのきらいは以前から茶に心得ある一子夫人やおぼつかない我々の口伝で濃茶まで練れるようになられた。其の結果が今日のお茶事である 松永さんにハ、およそ改めてのお茶会は今日が初めてである。それ丈に大騒でもある。

お客組は 益田瀧子夫人、藤瀬刀自、田中親美翁、政斎、平松君のお話にて

鈍翁は風邪気味とて不来、初めていた。柳瀬川橋畔まで家人の出迎え、敷台

玄関から母屋玄関六畳二 鉄瓶掛二 汲出 民芸 台 吉野 盆 根来 火鉢 時代 蓑盆 火入

次の間即ち 土間から 上った 大炉の切られた部屋二ハ 蕪村大津絵 雄打ちて家地に 狩人 歸る日も高し 花入 鷹の 銅壺

花 サンギライ 大炉 自在 藤原時代華曼 蓮花応用 ここにて懷石 汁 三州ミソ 向 アエ物 器 戸

碗 銀釣大鍋にて 強魚 小羊 器 鼠志 八寸 カラス身 外二 香の物 沢庵 器 手附の 以上にてお庄

屋ぜんともつかず荒武士振りのお給仕にて益田夫人方にはこの主人ふりと共に驚かれたような、感服気味も面白く食事。続いて其のままお茶道具組はと見れば、水指 備前壺 茶入 鈍翁好 赤絵フタ 松

茶碗 鼠志野、魯堂旧蔵 松平家 伝 茶杓 慶首座、等にて耳庵翁のお濃茶練りには茶釜も

ツブレそうふにグイグイと、茶の飛沫は膝頭は元より、畳一面青々と色ドル有さま それ丈茶はよく練れている。ドコからかの笑声も何の屈托も感じない主人ぶり。濃茶一巡後淡茶丈は、見かねられてか、夫人の代点、これは又あざなお手前であつた。





と言ふ外はなかった。こんなことで社会不安で茶事雅庭も少なく茶の湯にも遠ざかり、内幸町の胃腸病院の厄介をつづけた。それは、十一月に入り奈良正倉院拝観と、京都光悦会に行きたつた為である。

○ 京都鷹ヶ峯光悦会 十一月十三日

P 126

正倉院拝観をおえた自分は、奈良の堀部と約し京都の宿でおち合い共に鷹ヶ峯に、大徳禪門を右に丹波道を光悦会につく。一代の芸術家光悦が、徳川幕府よりこの勝地を光悦の望により与えられたと言ふ丈紙屋川の溪流を下に見るこの幽翠松林に囲まれた地に、陶器の手すざみ、漆芸に文に亦歌の思索を心行く迄いそしんだ光悦の心境がいま自分には、この環境にまざまざと憶はれる。

巨匠光悦をしのぶ茶家のこの光悦寺に茶事をもうけ雅庭を数寄者とともに光悦の遺徳にむかへゆるのも、ゆえあると言ふべきである。先づ、遠く越地より遠征の中野石油王の寄附とハ

加賀、光悦 茶碗 香合 無地 台、 三十六歌仙 光悦の筆 外炭具を列べ

本席周、文真の山水、花入 光悦作 茶碗 光悦作 替 井 水指 伊賀

大事な茶人、茶杓ハ失念したが、考えられる事は周文真の山水に対するビサ竹花入を取合したこと。たとえ光悦作とて、アマリの不釣合い、茶碗にしても井戸こそ本茶碗に用い黒樂こそ替に用いて茶の気分にもなれるのに、金持のあるままと、アマリに光悦にとらわれ過る心なさである。水指亦シカリ

である。迹にて聞けば水指は土地の道具屋よりの借り物ト

ここを出て、大坂樋口氏の席を、床にハ 本願寺 小倉の色紙が懸り花入古銅、茶碗 名物 安南、茶人 古瀬戸 名物にウマイ物なしと言ふべき物

小道具の内十二人もの京阪地の茶人が見逃して退席する間に目にとまりしは黄瀬戸竹の 節の蓋置である。その焼成の肌と作ゆき驚く程の優品、これ程の名品をよ目に見落す大方の茶人には我ながら心細き限りである。

帰京後 この話を山澄不問老 蓋置中の名品 上方茶人は人のうわさで と話された。値は 七千円

次は土橋玄琢老の持席 掛物は失念 比舍門堂旧蔵と云ふ 銅 古 は甚もつての悪物

で所有者さえなければ珍重がる骨董商の悪い癖。然も京都骨董界の長老が、この席にて頭に残りしハ雲州家 米 伝 古備前 角 の でこの香合について松平伯と

山田保太郎との間に懐しい逸話がある。大震災の惨害に、東京の古物商も一時ハ商売かへ、裸一つとなった山田君が雲州家を訪れし時、直亮伯から、お前は之からドール皆道具やは商売替と聞くがとの問いに、私はあく迄商売は続けて行きますが、ただ何に一ツ品もなく、そのみが苦勞の種と答えしに、伯はそれなら兼々お前から望まれていた、備前の 不味公から伝来なるも見

舞と進せるとお譲を受けたのがこの香合である。之を元手、雲州家の引立に間もなく財も出来 信濃町に新居かまへ其席開に 箱書直亮伯 余又手元にある

京都名物光悦会とて、京阪は元より多少茶に興味を持つ連中に、心から茶を味ふ気分もうすく、松林に設けられた縁台にて弁当の食事、京料理にも、こんなマツイ物があるかと、紙屋川のせせらぎを聞ながら、夕日傾く鷹ヶ峰

玉子手 湯吸物 土筆 八寸 エビムシリ 香物 沢庵薄切 器 南蛮、酒器 立松作 德利 三  
片口 頭 百合、ギンナン 味漬漬 内渡 染附蓋 島

杯 染付 菓子 越後制 已上の献立に依り 小 の庖丁であつた。元の動坐、再入  
芦雁 酒マン

席すると床二古銅花入  花 白玉 水指 備前 茶入 盛阿弥 茶碗井戸、  
黄梅 南はん蓋 棗

銘龜山 茶杓 権ヶ郎作 建水曲 蓋 青竹 以上にて濃茶代々木の森が練れ、引続き  
探幽書附 歌名

淡茶

茶碗 伊羅保 替ノン 写 黒 巡服し露地伝い広間へ 床二 探幽、尚信 七福神の  
銘忘水 銘忘水 コウ 紅艶作 光信三筆

横物が挂り光悦筆長巻など飾り番茶水菓子などの構成に、一同主人の厚意と  
茶趣味深きを賞した。特に梅露君ハ茶家丈感も深かりしならん。

この六年と言ふ一年は、前年以來の固疾胃腸病に悩ながら、数年来の不況  
と闘い、制作思索と共に、俗事多難であつた。年末からの風魔にも亦なやみ  
除夜に仮床に過す。百八ツの除夜、萬感も無量清浄の鐘の音。  
の鐘を聞き

○ 満州事変問題から内外の情勢は極度に緊張をつづけた。軍閥における、  
強国政策にともなう反動分士の活動に不安気分は、日と共に実力化し国内に  
ハ物情騒然の暗雲はみなぎつた。去る三月五日には、三井財閥の主権者、團  
琢磨男に対する血盟団一派の凶手によつて狙撃の珍事が突発した。こう言ふ  
ありさまで財界は沈静をたどるのみ。趣味などの余祐があるうはずはない。  
それと共に、永い胃腸は悪化をつづけ、茶事方面にもとうざかりがち。

○ 久しぶり吉田白雲居主より古器物観賞とともに煎茶を催すとの案内あ  
り、四月八日、釈降誕日を祝してと、午前から出かく 昭和七年  
四月八日

寄附椅子間二九體寺 彩 断欠小幅 角 上に印 独尊像 安 と言ふ 釈迦誕生の  
画 棚 意味に

簾組 時 花籠へハ 紫白の藤花 菜の花など 花祭らしき風晴 (ママ、 広間には 物茂卿横物  
代 菜の花など

青貝 軸 二ハ 吉川靈華筆 書院 天然木二 文房飾と 云ふ文人趣味の。  
盆 長巻を飾り 盛花 飾つけ

寸暇楽庵に入席す。ここには 山本 君のお手まで煎茶 月漢筆 雨の中に後 の幅も窓外の  
西二

雨にもつながり興をそえる。時代 附 手 籠二 紅白アザ 取合もよく、茶碗 染附、托  
ミ 甘草 火馬

組、水指 伊 茶入 唐物 涼炉、湯沸など 唐物青貝 棚に仕込 まれ、青磁端ぞり菓子鉢のうつ  
賀 電

くしきに、玉露一啜の後、露地傘に身をやどし古美術品陳列席に入る。ここ

は、柳川鉄宗翁持席である。床に 鎌倉 彩画 五曼荼羅、水牛、鍍、金装の如意を  
時代 普薩像 金

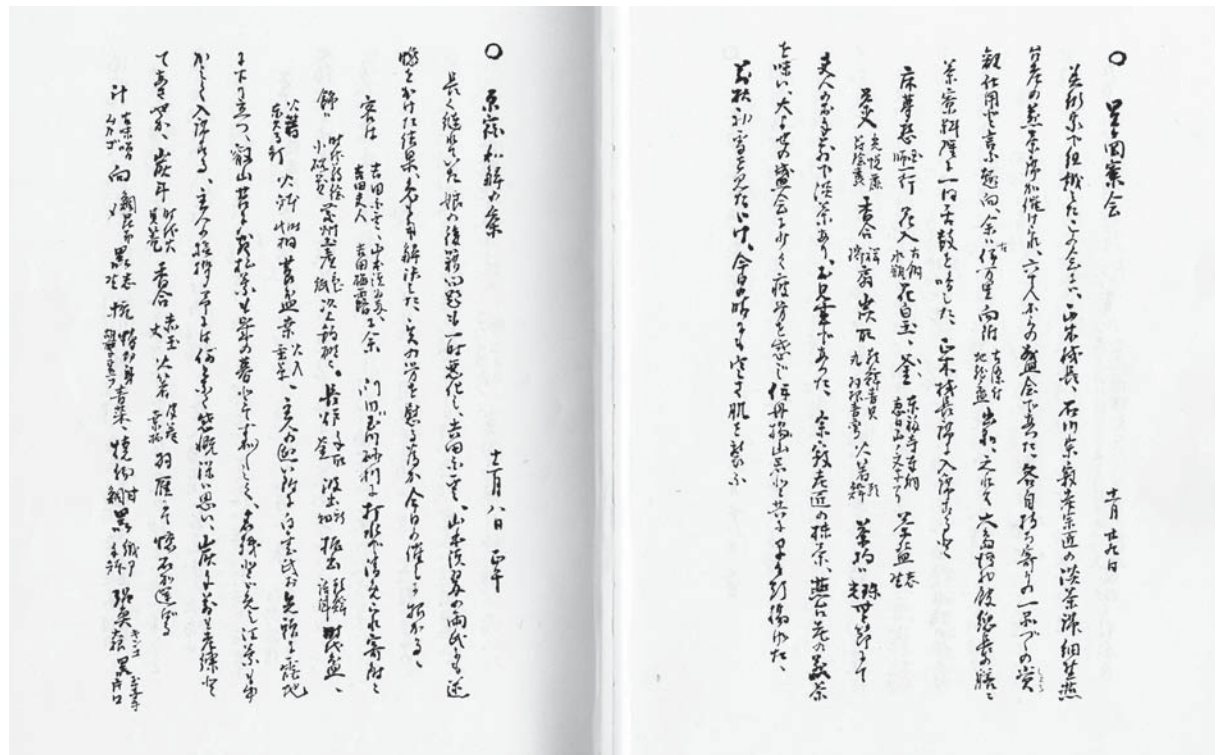
初め古銅 水 花 芍薬 白 を挿し机上に飾られ、正倉院、伝、瑠璃、ハサミ 珍品、御室山  
瓶 来

墨 流しの懷紙などがあり、猿面硯 柿柄 筆架 曲、新羅 時 刀 等々古物趣味に興  
筆 玉 味を持つ自分にハ この上

なき眼満に釈の供徳を胸にひいて見そぼ降る雨中おいとました。

○ 初夏より秋にかけ、胃療をつづけていたが、團夫人から、ご主人不慮に  
仆れられた後一日も早く祭壇の新調を起願され、魯堂に囑され、兄に手に起  
工された。其内部の一部を自分にも依囑された。病中ながらも團家に対する  
懇志から押してお引受し、中尊寺金堂円柱に模し螺鈿を施し相当な苦心を要  
した。其の為病勢はつのるばかり、家族の進めもあり九月中旬から約一ヶ月  
伊豆修善寺に湯治病を養った。従つて多少は小康を得たが、胃腸病程難物は  
ない。少し良ければ亦食事で失敗する。ツマル処食事減少と運動が一番良葉





「星ヶ岡茶会」昭和6年11月29日、「原宿和解の茶」同年12月8日  
影印本より転載

博物館総長の膳二<sup>(86)</sup>

茶寮料理に一同舌鼓を鳴した。正木校長席に入席すると

床 夢想 国 一行 花入 古銅 花瓶 花白玉、釜、東福寺奉納 茶碗 志

茶人 光悦屏 香合 瑞 扇 炭取 朝鮮青貝 火箸 朝 茶杓八 珠 無節にて

夫人のお手前で淡茶あり、お見事であつた。宗寂老匠の抹茶、燕台老の煎茶を味い、大よせの盛会に少々疲労を感じ伊丹揚山君と共に早々引揚げた。前秋初雪を見ただけ、今日の晴にも寒さ肌を襲ふ

○ 原宿和解の茶 十二月八日 正午

長く纏れていた娘の復籍問題も一時悪化し、吉田白雲、山本淇翠の両氏にも迷惑をかけた結果、兎も角解決した。其の労を慰る為か今日の催しに招かる。

客は 吉田白雲、山本淇翠、に余 門内八玉川砂利に打水で清められ寄附二

飾ハ 時代時給 慶州土産 紙 色 已上釣棚に。長炉 釜 手取 汲出 物 振出 朝鮮 時代

盆、火箸 火鉢 代 桐 蓼盆桑 火入、主人の迎い附に白雲氏を先頭に露地に

下り立つ。叡山苔に敷松葉も歳の暮とてすがすがしく、名残とどめし紅葉もゆかしく入席する。主人の挨拶予には何となく感慨深い思い、炭手前も老練とてあざやか。炭斗 時代大 香合 赤玉 火箸 桑柄 羽雁にて懷石が運ばる

汁 古味噌 向 鯛昆 器 志 梔 鴨切身 青菜、焼物 鯛 器 織部 強魚 キンコ 器

吉田白雲氏が湘南鵠沼に近頃魯堂に托し草庵を営まれ其の出来た今日招かれた。同行者ハ浜町丸幸主人重岡伊藤に余の四人。煎茶家とて、母家床にハ、

竹田筆 芭蕉の像  
孝■の句 秋の句、花入 備前種壺  
主人作 花山 抱美作 床脇 マキエ月 硯箱

ここで菊花が進められ、小雨そぼ降る庭を離れ草庵に移る。この草庵は藤沢在農家の古びしを改造茶席にせられし魯堂の構想丈面白き構えである。

床に米山人画賛 かく(ママ)見ればおよばぬことのお  
ふかりき笠きてくらせおのが心に 香炉、 盆の裏書に  
書金輪寺十ノ内 朱書アリ

時代も古く数寄者の喜ぶ物、食事は夫人心入れの鵠沼浜の新鮮魚とて美味飽食した。続いて夫人のお手点で淡茶、水指ハ 古備  
前 茶碗古伊羅保茶入 唐物、  
龍地

菓子ハ鵠沼頭で土地の物丈奥ゆかしく、炉辺に各自掘立の芋や栗など焼き炉灰の飛ぶのも田舎家らしく一日の飲をつくし帰京した。

○ 正木美術校長夫婦招茶 自庵 十一月廿五日 夜

P 118

かねて、田辺美校教授から、正木校長御夫婦をとの進めもあり今日お出を乞ひ、心よく夫人同行でこられた。田辺君と共に伊藤推古君お相伴を乞い

食事は 鯛の昆布  
メ 丈に留め、大炉に土鍋を掛け鯛や鰾野菜煮と云ふ略式之が

又校長の意にかない、酒豪とて田辺君と共に陶然であつた。今日廿五日は天神祭の日でもあり、殊に夕刊紙に校長が美術院長に兼任の発表もあり

探幽筆 菅原公ノ  
像 寸松庵 信 伝 の賛ある幅を掛け任冠の祝意もかねて、祝盃を掲

げた。食後炭直しの上釣釜にて淡茶を呈し菓子又家内手製にて鄙びし趣向に

一同喜れしもモツテの幸せ。自園の柿の枝つき山籠に盛りしも一入満足げであり、醒めやらぬ酔歩を裏門より送り出した。

○ 吉田白雲居の煎茶 十一月廿八日 昼

P 119

風がわりの客組であるが一煎茶差上げたいとの事で正午前高輪に出かく

敷瓦の椅子間に通ると、老僧二人、顔見知りの檀那寺の和尚を初め、之も知り合いの和御老あり。壁床に不動尊の像幅、彩画の残る古材角棚に蓮片 ママ 香合、テエブル上に寄木盆に香せんの用意も面白く、主人の案内にて、露

路づたいお茶席へ、床 文真横物  
江に人物 が懸り、 時代  
簞二 秋草を挿れてある。涼炉、水指の

備え付

主人持出の提籃組込、茶碗ハ 古染附  
三ツ組 茶托 政  
斎 作 茶入 青貝  
中次 茶合 竹漁夫  
刻

服紗 桃地  
モール 水指 均  
窯 角、急須 袋  
手 湯沸 チヨ  
ロギ 炭斗瓢 已上にて煎茶の苦味を

ススリ、懷石は夫人のお手料理、宗門に対する心入れの献立であつた。

広間に動坐床に月溪筆 鹿の  
絵 書院 藤原時代経筒、文房飾りの珍器  
菩提樹珠数など僧侶客への心入 を謝し散会す。

○ 星ヶ岡寮会 十二月廿九日

P 120

美術家で組織したこの会にハ、正木校長、石川宗寂老宗匠の淡茶席、細野燕台老の煎茶席が催けられ、六十人からの盛会であつた。各自持ち寄りの一品つつの賞観仕用と言ふ趣向、余ハ古伊万里向附 古染付  
地龍ノ盃 出品、之れは大島

○ 名物ソロリ花入嫁入の記 山澄不問翁より 七月二日

P 113

馬越化生翁秘愛である古銅ソロリ花入については、大家である多くの数寄者は周知のとおりである。この花入について、波満澄会の席上の話題となり、不問老のお出入関係から、其の模写を切望して置いた。処が、今朝不問翁より、一寸お邪魔したいとの電話、何事ならんかとお出を待つと、間もなく表に自動車に着いた。

包を提げし不問氏。広間に通し来意を聞くと、実はかねてお望のあつたソロリ花入を五個程写さして見た、其の一個を、ご当家に嫁入さしたためとの事であつた。私は小躍して喜んだ。包から出たお嫁さんのうつくしさ、口元から腰のあたりの線の柔き乙女の肌にふれるが如き、胴のふくらみ、流石世に噂される美人である。特に四方黒塗り盆さえ添えられている。この花生は、自分の外、魯堂に一個、菅原横井守屋へ贈り一個丈手元にとどめ、何れの親がよく育るかを娘たいとのことにて、箱にハ政斎老に贈る。不問とも認めてあつた。風流雅韻によるこの縁組この上もなき茶友を得て、翁の厚意を謝し永久愛撫することとした

○ 自庵の炉開き 十一月十四日 夜会

P 114

震災後荒れ放題のままであつた、茅屋も一部改造手入中漸く出来あがつたを幸ひチグハグながら今宵初めて炉開きを催した。本来は口切とも言ふのであるが、之れと言ふ道具とてなく有り合の道具組とて、書き残すも面恥しいことである。

お招きしたのハ 吉田白雲氏 坂井老  
夫人に厳父

床にハドン翁筆 新■に 釜のにえ音云々 の歌 寄附ハ 汲出 振出 朝鮮 台独衆 盆 時代衆

広間での茶 壁に淨瑠璃寺旧蔵 彩色仏画 根来 角切 益田紅艶 香炉 青磁 津輕家 一重口 旧蔵

床脇 根来 手附桶花入 花山杓薬 桶にハ 応永十年 自性院什 トアル、大炉釣釜 釜天貓

水指 木 地 手桶、茶碗 珠光、 銘 荒 杵築候 旧 茶入、蓬雪好 竹割フタ

あやしい手前でお茶を供し、懷石は、汁 合せ味噌 鯛 梔 島エビ ナメラコ 向 シンジースト豆腐

焼物 南瓜ノ丸二蟹 ムカゴノ玉子トジ 湯吸物 フキノ、 八寸 ツケミ青豆 山ノ芋ウニ焼 香の物 沢庵ウス切 青菜浅漬

菓子そば饅頭、こんなことで濃茶、処謂お茶をにこした。白雲氏の仏教美術に興味のあることから、茶には因縁少なき仏画を用いし訳である。手料理の献立美味である筈もないが一同満足げに見受しは、主人のうぬほれならん。

○ 魯山人 島田佳矣、伊藤 十一月十六日 夜

P 116

魯山人から貴庭軒先の柿も熟したらん 出向きたいとの懇望で、前々日の道具も其のままなり幸いとお招きした。料理もホボ前の通り、ただ食後柿を自由にモギ採らせたには一同大満悦、山人を初め美校の図案科教授の島田老とて、席画に興を添え、近來の芸術家や茶人の無観識に対する山人一流の放言に怪談時を過し散会した。

○ 鶴沼白雲居別邸煎抹茶 十一月廿一日 昼

P 116





牧溪<sup>田益</sup> 田 叭々鳥 同 布袋<sup>寒山</sup> 拾得<sup>益田家</sup>

一 牧溪<sup>五祖</sup> 團家 一 同<sup>五祖</sup> 贊<sup>前山</sup>

牧溪<sup>朝</sup> 山本条太郎氏<sup>(79)</sup> 一 同<sup>人物</sup> 小倉家

一 同<sup>雀</sup> 根津家 一 同<sup>芦</sup> 双幅 上杉家

牧溪<sup>人</sup> 益田家 外二古画<sup>大師の像</sup> 同大師尊像<sup>尊岳親王筆</sup>

牧溪一色にぬりひろげられただけ、私の考えるにハ、牧溪和尚の生地支那に一点の存在なき牧溪遺物が、斯くも多く我が国に現存することだ。東山時代貴ばれた牧溪だけ、その真筆性をドノ点まで信ら得られよう。こう考えると、此の多くの牧溪筆に対し多少の疑問を持ざるを得ない。それ丈観賞にも亦興味深い物があつた。何れにしても大師会は他に見られる盛事にて弘法大師の功德の宏大無辺を法悦した。

○星ヶ岡古陶玩賞会 四月廿七日 夜会

P 109

魯山人より同好二三と共に古陶を観し会食したいとの電話があつた。前日大師会の迹として一時にためらつたが折角の好意もだし難く、指定刻限六時半山王社頭に

参会は正木美術校長、島田佳矣氏<sup>(80)</sup>の外天青君が相伴と云ふ少数であつた。山人の案内で席に通ると、備前掛花入に山吹が水をふくみてあるのみ。茶寮美人の点茶で、菓子鉢赤絵鉢に珍菓で一服の後広間に移ると、これは又昼をあざむく電灯は消され、古風の燭台数基と替り古雅な趣きが室内に満ている。幽に席を見ると仁清筆彩画<sup>翠</sup>の小幅が掛り絵高麗破水徳利の花入に、シ

ヤガ草が挿れしは我が意を得たと言えよ。佳人の配膳に山人自慢の料理、器物ハ古陶賞観の意味か。志野、瀬戸、染付、織部、赤絵と満服満服、陶器にハ多少自信ある自分ハ校長に対する山人の説明を待つ迄もなく、私見を述べ一坐を哄笑させた。灯下幽玄の主人の趣向と、薄暗りの為か、いつとなく酒杯を重ね過した。宴酣中正木校<sup>(79)</sup>から、正倉院御物が明治十五六年頃東大寺廻廊に持ち出されての展観と言ふ。今日から見ると驚く乱暴ぶりから、法隆寺宝物中四十八體仏の一万金にて皇室への身売など有益談があり、山王下花街の三絃の音も絶えた十二時と言ふ迄歓談にふけり酔歩車を呈せられ帰途した。

○浜町山澄不問庵ノ茶 正午 五月廿九日

P 110

気の張らぬ連中だからお出掛けありたしと二三日前二案内を受け定刻参入した

相客は 古筆了信<sup>(81)</sup>、余、先代栗原<sup>(82)</sup>、純阿、斎藤伊賀屋<sup>(83)</sup>、沢田宗味<sup>ノ六人</sup> なる程気安い連中

寄附二ハ 宗旦歌<sup>柳に駒</sup> 小硯箱、瓶掛<sup>雲華焼</sup>、汲出<sup>新</sup> 振出<sup>瑞</sup>

盆<sup>切子形</sup> 塗

出し台<sup>芙蓉</sup> 好桑<sup>火入</sup> 宝堂 といふ美麗な取り合せである。

型通り主人の向附に、古筆君を先頭に、余と順次露地に、寸土も尊き浜町とて狭いながら土塀の囲い古風の燈籠を控えての寛の水の音も幽に、破風にハ法隆寺管主揮毫になる不問庵の木額<sup>(これは余ノ作)</sup>を仰ぎ入席すると床には、

（ママ）  
 参会者に特に限られし美術愛好家と茶道熱心者たげ、真に美術を賞し、茶を味い、普通大集せ会に見られぬ閑寂清筵であつた。

四月廿六日

105

△仲麿堂に席主  
坂大  
春海調古庵

都下り  
裏 武蔵野

おもひやれきよみあしからこゆる  
ときのいそたちならしきみこゆるこそ

花入  
旦宗  
一重切  
銘  
太郎

一  
言  
寺  
八

大和  
葛城  
にありしも今ハ廃寺と云ふ。

水指  
代初

記三、茶碗

漏雨  
替織部黒

銘山道  
不昧箱  
茶杓  
宗甫  
歌銘

蓋箱  
黄瀬戸  
竹の節

、大阪に於る戸田と共に茶器の双璧

とて、遠路持出しにも名品そろい、ここを辞し円成庵主は團狸山男持席、

大和秋篠寺傳來  
雲（ママ）慶作、

持物如意、苘盆

火入刷毛目

、  
香炉  
附 染

仙器、盆

松、木、釜  
古芦屋  
濡鷺

香合  
堆黒一文字  
柳に午

水指  
蜜南

繩、簾、茶入  
物名

新兵衛、山雀瓢形歌銘二

このうち（ママ）も猶うらやまし山雀、  
身のほどかくす朝（ママ）顔の宿  
替金輪寺、茶碗  
長次郎黒  
志賀寺  
替井戸仁清

茶杓宗甫共筒、已上寄附飾付に記入もれあり次に補足する。

不昧軒床藤原地藏尊の幅  
時代久能寺經一卷  
脇床二ハ金銅經筒花白ふじ

已上お道具組の内、不昧軒を除けば、去年本邸に於る雪子嬢三回忌に用いられた追善茶の遠長(ママ)と感じられた。新兵衛作山雀は、同作中の白眉と世に知られし優品である。再見したのも憶い出深く幸せであつた。

△宗澄庵 席主馬越化生翁

席を仰ぐと貫行高野切  
（ママ）  
はなちらすかせのやどりはたれもしる  
われにおしえよゆきてうらみん

花入  
青磁  
竹の節  
耳

附  
釜  
東山御物  
松鹿浦釜、

香合  
須與  
公孫樹  
千種

水指  
地  
曲  
茶入

名物  
面壁  
箱宗甫

茶杓  
委殿之

茶碗  
釘彫  
伊羅保

、  
莨盆  
季手

火入土

日染附、流石東都茶道の長老だけ稀世の名器揃

い、狸山翁と共に覇を競ふあり様であつた。  
殊に花入竹ノ節に  
 耳附ハ目珍しい

馬越化生翁は、ビール王として知られし大実業家。茶の道に於ては、益田

人にて、道具蒐集にも他に抜けがけの功名を得意とせられ、それに対する奇談逸話の持主である。

それと今日の出陳にも他を圧するかの道具組である。さて月光殿展観には



○御殿山益田邸遠州会

四月廿五日

P 101

永い間胃腸病に悩まれ茶にも遠ざかりしに、益田さんから遠州会を催すから君の斡旋たる遠州像も出陳する、其作者も同行したらとの案内に何には置いてもと作者後藤良君にも通し同行九時頃から品川碧雲台へ、

順席として応挙館陳列を観る

床にハ伝智泉筆 一字 宗甫公像 後藤良作 桐、龕、政作

香炉 呉須三足 醉庵箱 溝口家伝来 香 初音 花入 硃青磁鳳凰耳 燭台青磁、

棚上 十種香具 手宮 荻手時絵 鎌倉代 但し（私見足利初期） 茶入 鶴首蔵帳

盆 堆朱 本願寺 伝 茶碗 夕陽、天目 酒井家 伝、茶杓 珠、光、已上にて献茶が行れた。

この外藤原時代仏像を初 田中親美翁ノ模写 平家経ノ全部陳列

隣席にハ床二宗甫筆 夢想 花入 古銅 蔵帳 花 硯箱 両竹張泊（ママ）絵、蓋裏二富士見馬上人物時絵 蔵帳

釜 助左衛門作 以 五徳 与次郎作 香合 堆朱、代黒 茶入 青貝 梅折枝 茶杓 蓬雪 名八橋

茶碗 香の子 外雑具とも名品揃いの飾り附を見て太郎庵に入席す。

△根津青山翁の持席 床ハ遠州筆 入り相のかね、茶碗 汲出染附山水 振出 織部耳付

盃 時代栗手附 以上寄附

本席床 俊明、楓地文 釜 古呂屋 花入 古銅獅子耳 茶入 名物敷島 肩衝 大海 瀬戸箱 宗甫

茶碗 名物 忘水 小井戸 宗甫箱 茶杓遠州作 已上名器揃いで淡茶の振舞

実業界の豪者青山翁は、普通の茶家と違い、美術品には、茶器に限ぎらず、支那古美術を初め、日本古美術なんでも良しと多量の蒐集、随って一面玉石混合の評はあるも、財をおしまず集められる丈、今日の道具組を見ても、何れ劣らぬ名器の配合ぶりである。明極墨蹟は元より、花入を始め、別名古小井戸忘水の茶碗にハ益田家蔵隼小井戸と共に双璧の感がある。太郎庵から応挙館につづく土屏の囲は、古色を帯びし九重の塔、南都笠置よりの赤砂利が敷きつめられ、さながら奈良の築地を見る如く、雅趣豊である。折しも食事の案内を得て、黒板博士、親美翁らと共に新館洋間の食卓に、料理は主翁一流の衛養献立。翁の説明を聞きながらの、満喫。お給仕は、御家族総出のお接待丈、前回田中栄太郎邸にての八百善仕出料理とは格別の風味があった。食後幽月亭へと入席す。伊丹揚山名古屋横山

△幽月亭 床 遠州豆色紙 花入 伊賀 香合 絵 志野 茶器ハ失念した。

満員の幽月亭ではお茶も辞し、そうそうに、禅居庵にうつる。ここは、太郎夫人貞子夫人の持ち席。床にハ牧溪筆、江賛の鶏の絵が懸り、其墨色の妙を賞し、残念ながら他の器は先客多き為、見のがしたは心残りであった。

庭の一隅に急造された小笹庵にハ 小堀宗匠の出開帳。席二玉室 判在

長寿楽、花入 古瓢 花園花、茶碗 高麗堅手 銘十文字 宗箱書、水指 備前緋タスキ

炭斗 貝など、各席ともに、遠州会に由縁り深き趣向をこめし会であった

碧雲台は高層の地とて、品川湾を一望旧台場は視野の内にあり、西には大崎田甫を眼下に、池上東門寺の聳ゆる宝塔を眺めての景勝地でありしに、大井、大崎一带の工業地化した今日では、高い煤突からはき出す煤烟に悩まれ、園内の松樹を初め、由緒ある応挙館壁絵さえ、アタラ煤にけがされ、惜しき

お開き間は元の寄附 床二 地蔵 緑起 残欠光 光弘 十牛 の巻などあり 一同主人の厚意を謝し、歎深く退散した。

○鈍阿君の招茶 十二月廿八日 夜会

P 98

御殿山益田家から自立した陶工鈍阿君が、目黒根津青山翁所有の地隅に窯を築き、制陶にいそしみ、今宵一服と招かれて出かく。

暮色の森に囲まれた寄附に通ると 相 客 ハ 吉田さん 一家 余に坂井老、栗丸太四疊半

床に 鈍 翁 書幅 懷石汁 味噌 小芋 向 鯛糸 ツクリ 器 割 山椒 椀 ウツラの タタキ 豆腐 柚 子

焼物 甘 鯛 器 朝鮮 唐津 手鉢 八寸 銀杏 小エビ 小鳥 串 刺 湯吸物 フキノ トー 菓子 そば 饅頭

侘び住いには過ぎし献立口切に対する主人の心入れか、元の寄附に動坐すると、これは亦部屋はいつの間にか長炉に替り釣釜と言ふ早替りに目を見張る

炭手まえば略されたが、籠白 ヒ サ に炭の組込ミ、香合は今日

余の土産に呈した茄子を用いられしは主人のタシナミ

床に 江月筆 二字 根津氏より 到 米 柱二 伊賀 掛け 花入 カシノ 紅葉 水指 高取 写 耳附

茶碗 障子黒 (ママ) 写し

替 セント 土 筒 茶入 瀬戸写 肩付 (ママ) 写し 茶杓 自 作 以上で淡茶を巡服した。

陶工の主人とて、飯器から食器茶具に到るまで、然も色調も同じ釉薬の物多く、其上焼物手鉢の各品々に用ひられしハ、少々当られ気味であつたが、一家総掛りの心入れには深く感銘した。

○山澄家波満澄会初会 昭和六年一月廿八日 夜会

P 100

波満澄会も例会を続け、今年初頭の初会、出席者ハ

辻 菅原、横井、河辺 (66)、香取 守屋、中川、余、沢田 (67)

新築中の洋間に於て洋食の馳走があり美術談中、余技展開催などを議し

茶席に移り淡茶 床二 宗中筆 梅花開春装 之々ノ幅 上野焼 瓢ノ花入に 梅花一枝

水指 不問自作 信榮写、茶碗 刷毛目 得人黒 などの至極簡担であつた。

○互楽会新年会 於田端自笑軒 二月四日 夕

P 100

彫塑家をまじえた工芸家互楽の為組織されたこの会も会を重ねた。雨のふる今宵茶料理と云ふので、自笑軒で催された。思いの外露地も良く雨に潤ふ風精も佳く

会合席者ハ 香取、津田 (68)、関野 (69)、板谷 (70)、堆朱 (71)、磯崎、小野島 (72)、海野 (73)、青山、飯塚 (74)、四谷 (75)、後藤 余

料理も茶懷石風ながら、茶に縁遠い美術家のつどい。幹事幹旋で量も多く宴酣となり杯は飛ぶ、隠し芸がある、福引の催しなど、タワイない老人共の

一夜の快宴。余興福引にハ 香取老に ルーテサツク 赤の都 腰巻 一打津田君に 福を射とめしは、

四谷君への 米一俵 爆笑

幹事改選に 関野聖雲、後藤良、仰木政斎、堆朱楊成 海野君の外遊土産話などあり十時散会

水指 本地 阿彌桶 茶杓 石州 建水 南蛮 已上にて濃茶お手点を拝服し広間へ

P 95

○この頁ハ脱漏した為、止むなく雪子さんの偲い出を誌して見る 雪子さんは團家第二の愛嬢にて即ち牧田夫人の御妹に当らる。曾て良縁ありしも良人外遊後如何なる事情か永く帰朝なく孤独を御両親の膝下に過されつつありしに他の令妹お二人ハ小倉家原家に嫁がれし後独寂しく過されし悲哀ハ病魔の襲ふ処となり永の病院生活、それ丈御両親の愛情はかるべからぬ物があつた自分は雪子さんの病前にも数度お逢したが稀に見る才媛の方であつた。

当時自分は良家に人となられし雪子さんの御生涯に少なからず御同情申上げ茶の湯にも嗜み深き所からお母公お催しの茶ノ湯にも親しまれしに病ハ癒ず他界せられしことの哀惜から今日の御追福茶には一入感慨の深きものあり追慕のあまり誌のみ

露地を伝に広間に移る。此の建物ハ元根岸の里ニ松平某と云ふ大名の寮であつたと言はれ善美を尽した構え書院附、梨子床カマチと言ふ次第、

床 月山筆 観音ノ 花入 経筒 共蓋 花 山杓葉ノ実 白ハチス 違棚 藤原時代 経巻 盆 青貝

菊 時絵 乱盆 書院 時代根来 硯箱 のお飾りにて牧田令嬢のお手点でお淡を

水指棚 不味好 宗薫透 政斎作 青、替 光悦写 純阿作 水指 砂張 茶碗 井戸、替 光悦色紙 張 風呂先 光悦色紙 張

已上お道具ニよりお懷石に至る迄、ご追福に因む御母公の心づくし。それ程に連客一同は有りし日の雪子さんに想いをはせ追憶一入深きものがあつた。御道具の内雪舟連の絵は著名な幅、経巻は特に貴重であつて、額絵大和絵風の樹木二人物と金線上下の着色天蓋絵の壯厳目もまふしきばかりである。

別室にハ雪子さんノ遺墨箱根紀行日記やご愛蔵籠地茶箱など、なき人の面影を憶ばれしご母堂の慈愛深きを億い厚きお持てなしを謝し紀念に喜三郎作潤塗鉄鉢盆を土産にお開きした。

### ○原宿長兄の会 十一月十日正午

P 97

今日は甲子とて一服腹合したい相客も氣のはらぬ人々との案内であつた。

客は 吉田白雲夫婦 坂井久波 余 同 嚴父 大野純阿 の六人

寄附 宗紙筆 大黒ノ絵 桃山 時代 矢立 長炉 釜 手取 汲出 純翁 作 振出 青磁 火鉢籠 紅鑲翁 旧蔵

蓑盆 黒手附火 入雲草 主人の迎いつけに白雲氏を先頭にお詰鈍阿君

床 松浦鎮信筆 紅葉の消息 風呂ヤツレ鉄 鬼面 妙喜庵 伝 (今、翠庵ニアリ) 板織部 炭手

前あり懷石

汁 合七味噌 小燕 向 キス 甘酢 器 唐津 椀 寄せ豆腐 埃津 焼物 ウツラ チクワフ 器丹波

八寸 百合 銀杏 器 刷目四段 重クツキ 香物 沢庵 薄切 酒器 朝鮮唐津 徳利 杯 青磁 ネジ

菓し栗餅にて中立、元の寄附に

銅羅の音に引入れらる。床二 宗旦作 釣花入 花 ツタ紅葉 時鳥、撫子 風精も深く

水指 信 南はん フタ 茶碗 柿の 帯 茶入 菊漆絵 平 茶杓 遠州 筒宗中

口切を控え名残の茶、原三溪翁より侘の本山は魯堂と迄たえられし今日の道具取合せ茶味津々たる趣き、正客白雲氏が煎茶家であり、今日の娛みは主人魯堂一人ではなかつたらうかと、ひそかに主人の悲悦をシノンダ。



られ小憩の後山人蒐集のコレクションを観る。流石制陶家として、支那、朝鮮、国焼と、よくも多数集めしを感服した。それを終ると、曾て久邇宮殿下台臨のあつたと言ふ茅葺に濡縁をめぐらせし古びし建物にて、お手の物得意な山海の珍味で午餐を共にし屋外の秋色を賞しながら暫し趣味談にふけり、山内を逍遙しながら可憐に咲き乱れる鎌倉菊など採収し、栗田君の案内で茶席に入る。

床ハ仁清雁の絵に尾花の幅、花人朝鮮花花紅葉水指瀬戸

茶碗志野寄セツギ茶入時代木地、以上で淡茶を巡服した。仁清の幅は、流石陶工

丈に因み深く、主人の厚き持成しに一日の清閑をつくした。

秋の日の落ちやすく日は西に傾く名残をおしみ暮色を家路に急ぎ村の乙女の粗朶を背に袖すれ合ふも村里らしく都に見られぬ情緒。見送る山人とは村はずれ小社のほとりにて別れ亦の再遊を約して。

### ○團狸山家追善茶 十月廿日正午

P 92

原宿團さんから先祖追善茶を催すから俱に相伴せよとの御案内で喜んでお招きに応じた。案内状にも裏門からとあつたので、令息別邸側から参入した。道案内の東道案内で先づ寄附に、通る

地袋棚二藤原朝の如意下二佐川田喜六筆二冊を飾られ唐金菊形瓶掛瓢形鉄瓶

汲出南京赤絵振出尹部瓢盆二黒柿火鉢、蓑盆一閑手付

客組ハ米山梅吉(63)氏夫人、小林一太(64)氏夫人外三井家系婦人 以上夫人連のみ

さては、今日のお茶は奥さんのお催しであると察られた。想像通り奥さん

のお迎え附で米山夫人先頭で順次露路伝い、寄附から席への右手は狸山翁生国筑前箱崎八幡宮を勧請されし小高い岡を見て、数百年をへし椎の老樹下を清められた露路を入席すると、

席二雪舟筆円窓二蓮華彩色井上家伝来釜古芦屋松に鶯地紋

奥さんの出坐で御挨拶があり今日は雪子の三回忌に当るので、その追福の為お越を願つたとお言葉であつた。お炭の手前にハ

炭斗曲一閑羽根鶴、香合仁清柑橘

懷石、汁三州味噌初茸向キス黄菊ハサヒ器金襴手椀ウスラアカキエビ

焼物甘鯛器青磁砵、強魚野菜取り合器秋蓮華の手鉢

八寸松茸銀杏百合、小吸物秋月ノリ針シヨウガ、酒器広口鍬子黄銅フタ杯青磁ネジ組合

已上小清庖丁の美味を頂戴動坐中立は岡の中服に設けられし小亭に、こより眺める庭園は斜面を見下する池を囲い、朝鮮新羅時代の三重古塔、土屏の他には赤星家より移建されし古建築仏堂あり其の配置の美は、益田男隠退後の三井王閥を双肩に今を時めく狸山邸である。

腰掛にハ薩摩撫子絵手炉、蓑盆手附黒丸火入絵唐津

幽に打ち出される銅羅この鉦ハ淀屋个庵所持、酒井家旧蔵の音七点を聞き、松林に伝ふる余音を億ひ入席(マヤ)

床二ハ掛物なく酒井家伝来松ノ木盆二呉須香炉、香白盆にハ菊 江月朱ノ裏書アリ

名香の薫りの内に 茶碗楽長次郎銘志賀寺宗旦花挿茶入信楽目珍きもの

床脇棚二 天平式 八角 政齋作 平家時代法華經  
一巻を納めらる

いかにも法会にちなむ飾り附 地下亡父も冥福されることと思ふ<sup>(ママ)</sup>

美代さんの迎い附にて席入り、正客は勿論兄に乞ふた

先づ天目にて献茶を霊前に供ゆ。台ハ青貝新調

床 冷 為恭筆 諷蘭の歌 一首を、時代朱卓二靈牌安坐さる

花入 木 阿伽桶、花 草 水指 古染附 茶入 蓮華時絵  
地 八角 青貝入り

風呂 唐 鳳凰 風 釜 輪宝 茶碗 高麗 替黒一入筒  
金 呂 紋

茶杓 軒 作 已上にて濃茶を練られ拝服した。

懷石ハ大量器と云ふ仏縁に適した物

汁 三州味噌 向三バイ 鉢 鯛ラロシ、焼物 培烙 エビ松茸  
小無薄切 盛 汁 むし 栗

強魚 聖護院 小吸物 針 香の物 等々  
大根煮込 ショガ(ママ)

法会に対する食器など心入れの料理に、亡父有りし日の事とも聞き幼き折りのさまざま数ずかずの想出話しの末、兄揮毫になる扇面写経を贈られ会回記念を得、大心和尚手造り茶碗で淡茶を喫し夕刻辞去した。<sup>(53)</sup>

## ○帝展第四部之記

茶会記であるが、制作面の一部を記入する事にした。

帝展に四部が設置せられたは昨四年展からであった。処が四部工芸部には、鑄、彫金、漆芸のみにて、木工芸は除外せられた。理由は、木芸家に技術家トシテ人物なきと言ふのを口実に、そこで自分は今年度展に出品を志し、夏

p 88

以来、天平式螺鈿瑠璃嵌入経筒を制作出品した。処が其審査発表が行れ、自作経筒は特選主席で公表せられた。特選は自分の外、清水亀藏<sup>(54)</sup>、高村豊周<sup>(55)</sup>、清水六兵衛<sup>(56)</sup>、北原千祿<sup>(57)</sup>の諸氏であつた。出品題名ハ遠き時代を憶と言ふのであつた。

今日その招待日とて家族を連れ、都美術館会場を参観に出掛た。館の場外ハ参観の人で大混雑、警官迄出張整理する程、今回展に一般は関心をあおつた。其の光景は今日などに見られない盛観であつた。出品審査と共に、特選発表に対する主査香取秀真氏<sup>(59)</sup>から我作品についての感想をラ、ジヲに依つて伝えられた。其結果か、都下新聞記者攻めに合い、木工芸家一人者と迄報道された。此作品ハ間もなく、仏国大使の選定にて、他の作品と共に、パリに於て日本現代美術品の粹として公開され、続てベルギー国立展でも展観された。其間約二ケ年半を要した。現在この経筒は團家の有となつてゐる。

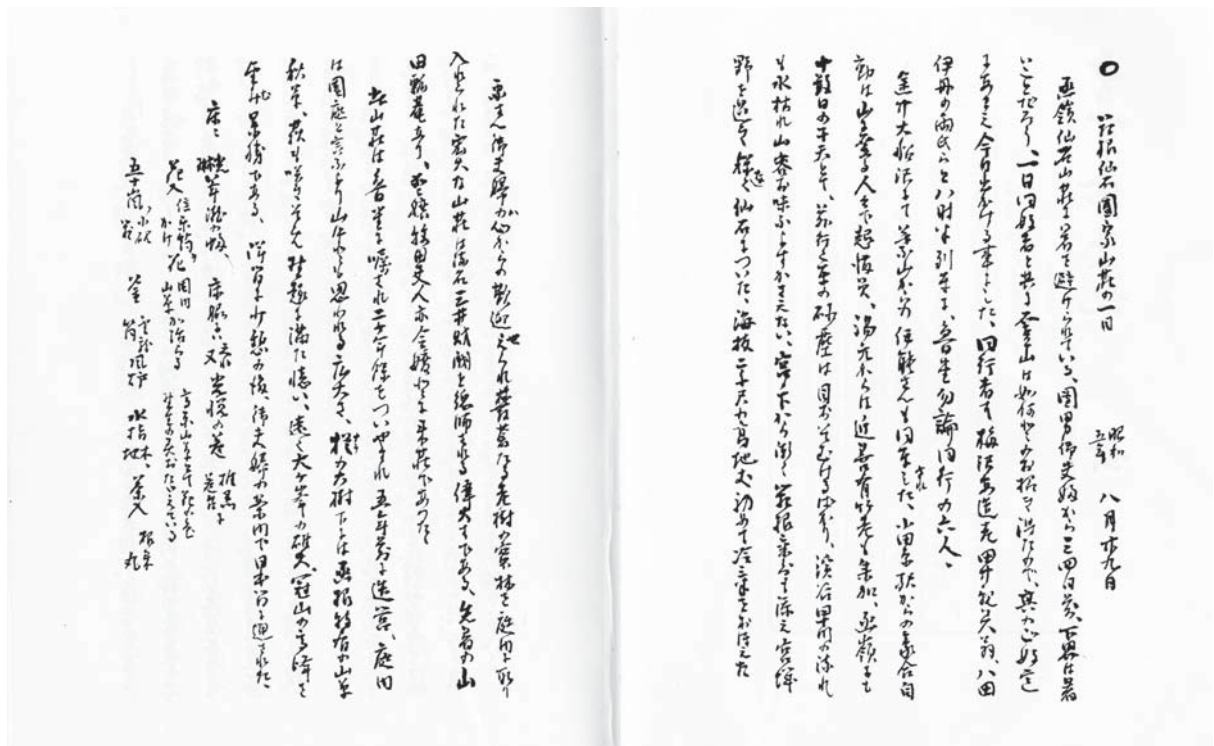
## ○北鎌倉山崎屋ケ岡窯行遊

十月廿三日

p 90

北大路魯山人から山崎の秋色も深くなった、一度来遊せよとのことであり、朝から一日の静遊を試みた。同行は伊藤推古君<sup>(60)</sup>唯一人。大船駅に降りると、旧知の銀座林屋老人<sup>(61)</sup>が其の長男と共にこれも山崎行きとある。林屋老人は今は隠退この長男氏が今の二葉屋の主人であると。道すがら紅葉に魁けし柿紅葉、黄金色稲穂に目をなぐさめ、カナリの道もいつか山崎の小高き丘に近く、原始的な切通しを抜けると正面田甫を堺に星ヶ岡荘を眺む。去年初めて訪ね僅一ケ年、山里とて建物にも落つきを見せている。一同の姿の見えしか、手をかかげているのは魯山人の姿

出迎えた主人と共に寄附大炬が釣れた小亭に入る。炬端には、山籠に黄紅葉を敷き山栗の煎立が盛られ如何にも山里らしき風情。先づ番茶でもと進



「箱根仙石園家山荘の一日」昭和5年8月29日

影印本より転載

茶杓は宗来作で淡茶を進められ、鈴安老の東都過去の茶談、有竹老の漫談、親美翁亦琳派画談などあり興をそえ、近くの「マシラ庵」に立より母屋に引揚げしは、夏の日も山の端に傾く頃であつた。

夫人のご好意に入浴の用意もあり、箱根ハ湯の里たげ一同先きをあらそい、東京からの汗を清めた。程なく夕餉の仕度を供られ、私には是非一泊を進られしも其厚意を謝し梅沢山田の両氏と共に暇を乞ふた。それなら小田原迄自動車で送るからとて難路の箱根路を辞退も出来ずお言葉にあまえて夕刻の山道を小田原へ、この間一時間と廿分の快速の、車中虫の音を聞つつ十時半帰る。

#### ○亡父五十回忌の茶 増上寺より原宿 十月九日

父久兵衛逝かれて夢のよふに五十年と過ぎた。今日その供養を増上寺於て、当時三才の自分は父の顔さえ知らぬ不幸であつた。それ丈四人の遺児についての母の労苦はなみ大ていでなかつたと追想される。大伽羅増上寺での誦經を終り、塔中安鈴社靈域に墓詣の後原宿に招かれた。

いつもなら玄關からの引き入れも、今日は中門からそのまま這入りとの案内、庭内は打水に清められ、秋とは言え、日頃手入に青苔も色青く、流に添うて白に赤との萩も盛り、砂塵にけがれたままの土足に汚す心なきとも思はれしが亡父法会の為の兄の心入れと想い、進められるまま、家内ト共々広間より入席した。

参列者ハ我々夫婦他ハ 藤原期の名幅を掛られ、

床ニ孔雀明王 藤原期の名幅を掛られ、

書院へ、荒磯 硯箱 朱管の筆などの文房飾り



三十有余年前夫人は既に、こう言ふ物に着眼せられし程の数奇者であつたかと、夫人の人となりを憶<sup>(ママ)</sup>んだ。

正午愛孫高子嬢をまじえ鰻料理の馳走を得、小間にて斗々屋、一入茶碗などで淡茶を拝服し、いろいろ美術や茶器などの話にふけりお暇した。

### 十三回

この記録帖はこれで終る。

六月から八月迄は製作と俗事に過ぎ茶の湯も遠さかつた。八月からは第二冊目に移り記録することとなつた。記録も古い以前の事でもあり、記憶も不重分とて、相違のことも数多かんと<sup>(ママ)</sup>と思と共に文章にも字句のちがいあるべし。ただ総録するのみ。

## 雲中庵茶会記 式

○箱根仙石團家山荘の一日

昭和五年

八月廿九日

P 82

函嶺仙石山荘に暑を避けられている、團男御夫婦から三四日前、下界は暑いことだろう、一日同好者と共に登山は如何とのお招き得たので、其のご好意にあまえ今日でかける事にした。同行者は梅沢安蔵老田中親美翁、八田伊丹の両氏らとは八時半列車に、魯堂勿論同行の六人。

途中大船駅にて葉山からの伊能さんも同車された。小田原駅からの乗合自動は山に登る人々で超満員。湯元からは近善有竹老も参加。函嶺にも十数日の干天とて、前行く車の砂塵は目をそむけるばかり、溪谷早川の流れも水枯れ山容を味ふすがさえない。宮ノ下から漸く箱根気分も添え宮城野を過ぎ

程なく仙石についた。海拔二千尺の高地丈初めて冷気をおぼえた。

團さん御夫婦が心からの歓迎せられ鬱蒼なる老樹の密林を庭内に取り入れられた宏大な山荘は流石三井財閥を総帥される偉大さである。先着の山田瓢庵あり、愛嬢牧田夫人亦令嬢とに來荘であつた。

此山荘は魯堂に囑され二ケ年余をついやされ五年前に造営。庭内は園庭と言ふより山中とも思われる広大さ、檜の大樹下には函根特有の山草秋草、萩も咲きそめ野趣に満ちた憶い、遠く大ヶ峯の雄<sup>ナツ</sup>大、冠山の高峰を望む景勝である。洋間に少憩の後、御夫婦の案内で日本間に通された。

床二<sup>光琳</sup> 筆瀧の幅、床脇にハ<sup>之れ</sup> 光悦の巻<sup>堆黒巻台</sup>に

花入<sup>信楽筒ヲ</sup> かけ 花<sup>園内山草</sup> が活らる<sup>高原山草とて花の色野生の美をたえている</sup>

五十嵐<sup>箱</sup> 釜<sup>雲龍</sup> 風炉<sup>木</sup> 水指<sup>地</sup> 、茶入<sup>根来丸</sup>

茶碗<sup>唐津</sup> 替斑<sup>唐津</sup> 茶杓<sup>遠州</sup> などのお道具組で、藤谷宗匠<sup>(51)</sup>によつて点茶が振舞れた。午餐には相模湾の鮮魚早川上流の香魚など珍味佳肴が進られ、何れも豪服者として、特に親美翁ハ評判の大食家として群を抜かれる有様。会後光悦

巻物の披見があつた。台紙は宗達下絵特有の金銀押形であるが、一部信花草のみ金銀肉筆であるも貴く、親美翁の説明に有益な点ありしは幸せ。

庭に出て樹林を右に左に、溪に降り小流に架せられた、丸木橋を渡るツマ先登りで丘陵に出る。左右より落る清流のせせらぎを聞き、蟬時雨ふるこのあたりの眺望は、遠く聳ゆる山嶽仙石原に点々と見る民家の様、正に唐画に観る壯観である。ここにも小亭あり、淡茶の用意が設けられている。

床二牧溪<sup>(ママ)</sup> 筆<sup>六祖の</sup> 寺小屋机二<sup>七宝剣</sup> 政斎作を飾らる

釣釜、水指<sup>古備</sup> 種壺<sup>斗々屋、権兵衛</sup> 茶碗<sup>志賀寺之碗</sup> 長次郎黒

床脇 時 唐櫃上に 南北朝 兜を飾る。釜 寒 いろは釜 常  
茶碗 鈍翁窯 銘風天 替 刷目 呼ツギ 茶入 古備前 茶杓 常庵作 芦の葉

已上にて前茶の濃い茶が練られた。懷石は遠来持出しとて、天婦羅、一種で満喫した。庵主鈍翁初め何れ気の置けぬ講生の集いに、揚山、梅露両君の諧謔能弁に天婦羅油の加減が高唱雑談に席中わくが如き歓談に、流石寡黙の団狸山翁さえ娯げに交歓、農爺姿の鈍翁も生徒ら騒ぎもよそに、温顔をほころばしての大満足であった。

生徒出品の、為恭筆絵幅など観賞し飲もつきぬかに散会した。

この日自分は、自作芙蓉形出し台を贈呈した。

#### ○小田原掃雲台行き

六月五日

P 75

一ヶ月振りの小田原訪問。要件は過る日、遠州会席上にて、鈍翁から依頼せられた、遠州好み桐仏龕が完成したのを届ける為と、翁が手習講当時微恙であった、其後の見舞をかねて、車中から眺める戸塚附近の田圃も、すでに青田と化し、都塵を放れし身には郊外の新鮮味又感じられる風精

益田家には、この日正午、室田義文 (47) 高橋常庵、森川如春伊丹の諸氏への茶の湯の催しあるとて、水屋掛り平松君と共二道具の組合中であった。来意を通し、携帯の厨子を見ると、翁は微笑ながら揮し頂き、良く出来ましたと至極満足で自分は面目であった。

席二ハ既に 定家郷小倉の色紙が懸り、時代時絵の机に

猿面硯の文房飾 土風炉、東大寺古材の風呂先などが置かれてあった。茶の催に永居は心ないわざと直にもおいとまと思いに、翁ハ兎も角小田原迄

きながら茶を吞まずに帰す訳にハゆかぬと、忙がしい中に、広間廊下にて自ら淡茶を点られ進められた。この茶の折に、この小倉の色紙は、家康より本多佐渡守に賜り、後益田家に伝わり世に定家焼色紙と称えられた物と翁の説明。翁は亦君は此頃住いの模様がえをしているように聞いたが、何れ茶席も良くなると思ふ、今は其の心祝に一首進じたいと筆を採り

新雲にかまのにえおこのしまむ

窓には月の影をやどして

無佛  
八十二年前三歳童子

と見事な筆を認められた。猶君の号ハ政 齋 ではなにか堅くるしいのと、君の技術ハますます上達先途有望の意味で、有望と新号を私は贈りたいと、亦筆をとり、有望の二字を書かれ渡され、いつにない上機嫌であった。時既に十一時を過ぎ、客来前として辞去した。

#### ○高輪東禅寺益田夫人邸

五月八日正午

P 78

小田原訪問の折、一度お遊びにと進んでいたもので、今日平松君と共に同邸を訪ふ。夫人ハ元翁の第二夫人であり、深く茶に嗜はれ婦人としてハ美術に対する鑑識眼も翁にも勝る達識者であり翁の茶の道についても、この夫人の内助によると言われている。正夫人逝きし迹この瀧子夫人が公然正夫となられ、信世氏の実母である。

広間にて、先づ夫人愛蔵三十六集の内俊頼歌四首が表具仕立が出来たと見せられた。表装ハ 中廻紫印金 一風古金襴 見事な所合せには流石が益田夫人と敬服した。こ

の外三十四五年前柏木勘一郎氏 (マム)(49) より譲り受けたと言われる、螺鈿、錫蓮片散しの春日卓を見せらる。春日卓にハ目珍しい小型、時代ハ鎌倉中頃を下らない優品

客 帝 教授 佐藤三吉(40) 博士、相沢康恵(41) 刀目  
大 平沼淑郎(42) 早大教授 同夫人

臨濟禪門祥雲寺は、今より三百数十年前、我筑前の藩主の祖黒田長政公の近親創造に始まり、旧大名寺として東都に於る名利である。従つて創造当時豊の壯嚴であつた事は、現在宏大なる寺院を見ても想像せられるが、元禄頃の祝融の為烏有に帰し再建々付に至た。

祥雲寺にハ牡丹の名所と迄明治前より都人に知れつつありしも、明治中期頃よりの住職に其の人を得ず、この名所も次第に衰えるがまま、放置されている。然しいまと数千本の老木が多種多彩と四月終より五月上旬に妍を競ふのである。今年は氣候温き為か、今日当り見頃を幸い両博士をお招き牡丹会を催したのである。

佐藤博士は世に識れた、外科の大家、平沼博士亦早大文学々校長 俱に碩学の大家であり温厚な老学者である。

敷瓦の席に招し、老妻手料理の午餐を供し、食後裏門より本堂に到り本堂軒下に咲き誇る花の王者牡丹を称し、山主寿山老に乞ひ、開山堂前中庭からの牡丹にあかぬ眺に過した。

寺から帰り茶席にて淡茶

釜 浄 水指 備前 茶入 秀次 茶杓 空、  
味 秋 緋たすき 中次 中

茶碗 古 春陽 已上で淡茶一巡終り平沼博士の席絵などあり、一堂満足に見え夕刻お開きとなった。

## ○大徳寺菩提講出開帳 四月廿九日

大徳寺本山より、管長円山伝衣師出張、本坊講堂で行はれた宗門の僧徒に

依つて壯嚴に行はれ、式の終りて後塔中冷泉院茶席の茶に招かれた。展観には有名な国宝

(ママ) 牧溪筆 芙蓉 の幅、 禅月五百羅漢の内三幅 国宝

茶席 床にハ不昧公筆円窓が懸り、今井夫人のお手点にて淡茶の振舞あり、再度芙蓉の各幅に接せるは幸であつた。

## ○小田原掃雲台田舎屋手習講 五月五日

掃雲台田舎屋は、前年魯堂兄に托され、翁好みの野趣をおびし構え。今上陛下、いまだ皇太子であられし折、隣邸山縣公邸ご臨幸のみぎり、特にお立寄せ遊れ、入口軒先に懸られた、農家の蓑をあおられ興がられたことさえあつた。手習講ハ鈍翁発起に依り、至極近親のみに限られ、今日当番は魯堂兄であつた。

小田原に十一時つく。掃雲台の右門をくぐり、竹林の坂を登り母家を左に見て右へ登ると、段々畑にハ柑橘蔬菜が耕作され、いかにも田舎家近くを感られる。遠く伊豆半島の岬洋々たる相模灘も一望に眺め、点々たる漁舟は春の陽を長閑に糸をたれ平和を漂せている。見上る老双樹の松もここでは一色の名松と伝えらる。

葦葺きである田舎家軒先にハ、蓑笠お初め、昔箱根越に用いし山籠などが釣され、過ぎ越し方の小田原街道も憶れる。家内土間にも農家にふさわしき白や農具がそこにもあるのもゆかしき限りである。

今日の来客者ハ 團さん夫婦、需庵老、藤原眺山(ママ)夫人、藤瀬夫人(44)、  
鈍翁主、田中親美老、伊丹揚山(45)君、吉田梅露(46)二余

寄附省略、広間床二公任筆 針切 あやめ  
歌三首 云々の節句に遊ぶ歌



生庵、を初め、保護建造物たる、月光殿、及び中門不老門の各木額は、魯堂建造の関係から、余が全部制作寄贈した物である。

△宗澄庵 席主 山澄静斎

床に 貫行(ママ) 高野切 花入古銅 孤蓬庵 釜 古芦屋 宗和旧蔵

香合 水牛 水指 南 縄簾、茶入唐物 銘一ノ谷引家遠州箱江雲

茶杓 宗甫 歌銘 うすくき野邊の緑の若草にあとまで見る雪のむらさき

茶碗 本手 銘魚山、この外炭具雑器に至る迄処謂江戸まえ

アカ抜けした道具組、特に古銅罽の花入の肌め、香合の優品申分なし流石場内白眉ではあるまいか。このな訳で同席福井利吉郎(ママ)、親美翁らと共に室外にあふれる、茶客のあるも忘れ、茶談にふけた。

△円成庵 席主 根津青山翁(37)

寄付 不昧軒 床二牧溪(ママ) 燕の 香炉 黄瀬戸 利休所持名物

まじめに入席するには容易でない円成庵本席、水屋から失敬して

床二 名物 沢庵筆 撃の二字 はたとあたる風のおとにおとろきて竹の心そわがこころある

花入 宗和 一重切 花 谷くむ 釜 芦屋 文字アリ

香合 鎌倉刻 義経 赤星家 旧蔵 箱、石、茶碗 本手 斗々や 松花堂箱

替え肥後焼 旗唐 津 茶杓 江 共筒 銘 卯月

この道具組を円成庵とせしは誤り 青山翁ハ不昧軒寄附飾り丈にて京都林楽庵氏持席仲磨堂であつたを訂正す。

△月光殿 展観席

床二ハ弘法大師坐右銘 益田氏より 会寄贈 国宝 金銅 護国寺造

一 金輪王仏 藤原 普賢十羅刹 藤原 以上益田家蔵

一 稚児文珠 利足 團家蔵 一 大日如来 藤原 大倉家蔵

一 文珠像 鎌倉 益田信世蔵 一 普賢十羅刹 鎌倉 美校

一 十一面観音 鎌倉 美校蔵 一 乾漆大日如来 天平 某家蔵

一 法成寺蔵扉絵 松平宗晴蔵、

已上の内益田家十羅刹は小幅なるも著名な名絵。法成寺扉絵ハ八枚を持つて扉風になされた物にて白川楽翁即ち松平定信に依つて、法成寺旧蔵を求められ、現在松平家に伝られている。

然し法成寺ハ衆知の通り道長の治安二年の創造であり、本絵は同時の筆ではなく、鎌倉期に至り絵かれたように想像せられた。

品川御殿山掃雲台時代、益田翁単独に始められしこの大師会は、翁が小田原碧雲台に移住されし為、都下有志により財団法人とされ、大師坐右銘御寄贈を得て存続された。今日に及びし茶道と美術展示会唯一の殿堂である丈、西の光悦会と俱に盛儀を極る催しである。

○自庵に於る牡丹会 四月廿四日

広間に 小堀家 伝 遠州 自作と称する 桐丸仏龕に安坐され

台子飾りで献茶の供養、隣室にハ記録古文書、印鑑を陳列。

ここより望む園内は、前も眺望よく、宏壮樹林の新緑の香もただよふ。

広間に続き、京都土橋無聲老主の持席あり

床に貫行石山切 （ママ） 桜散り卵のはなもみな咲きぬれば  
こころ（ママ）にははるなつもなし

香炉 古銅 六角型 遠州 青貝 布袋、  
孔雀 蔵帳 茶臼 光悦作とあるも  
うたがわしき物

他は多く遠州公にちなみの品にて、記憶もかすゆえ省略した。

芝生に出ると、一面手入の届いた芝生の中に、配置よく「タンホコ」が黄

花を今を盛りに咲きほこり、絞り毛氈でも敷く風情、これを賞して松林を過れば、幽月庵がある。この席主こそ、茶道界の大御所益田鈍翁である

寄附床二松花堂筆 青黄牛（ママ）の絵 賛江月 歩行坐下平生自由人真入俗無喜  
無憂偽有会話謎作問頭雖然送詩還人一尔

大炉二釜 道仁作 庵の 蓋二 庵の、竹自在 宗甫筆 松風をおしさにきくや  
一字アル 金平アリ 庵奈利 宗甫

本席 床 遠州筆 安 二字 歌 は■ぼにとふ人あらばすまの浦  
もしおたれつつわふとこたえす

香炉 瀬戸、 釜 与次郎作 宗甫 所、 香合 青貝 一雙人 蔵 箱宗甫

花入一重切 花箱根 茶入 唐物 宗甫 御殿山に於て  
家光への献茶に用ゆ 帳

茶碗高麗 銘、青柿 茶杓 沢

この外雑具に至る迄、翁好みの珍器そろい

已上のように、各席ともに、宗甫公の遺愛品なり。遠州に縁故ある人々の

筆蹟に依つて、遠州流茶祖の冥福と公を憶びて、かくも豪華な雅宴にも、当時は今日の如く有像無<sup>(ママ)</sup>ぞう、雅客ならざる集りなく、大方が真に觀賞茶に親む人々とて、園主田中翁の言れた、茶人と言ふ人々はかくも大勢にも拘はらず丁園のケガレさえ見えぬと感服された程の清寂さであつた。幽月庵外には、八百善仕出の弁当がテント内で各自おもいおもいに饗せられた。今日の催しには、都内は元より、京阪辺から多々の数寄者も集り、近頃になき盛事であつた。

益田翁は、この日私を招き、宗明君の席二同行され、宗甫の像龕を見て、是非この通り新調を願したいとの事で、宗明氏の諒解を得、後日この龕を借用すを約した。この龕と共に、後に新調と共に、宗甫公の像まで依嘱をうけ、知友後藤良君<sup>(35)</sup>に托し制作を乞ふた。其原型今手元にあり。

#### ○大師会 於音羽護国寺 四月廿一日

P 62

遠州会に続き今日亦東都唯一大茶の湯は護国寺に於て開かれ、東京方を初め京阪よりの席持とて、茶に嗜む人々の待望茶である。

この朝家を出て、原宿に至り、魯堂兄を初め来合せし伊丹金造、大野鈍阿君ら共に同行護国寺に、時は新緑山門をくぐると青銅の臺は陵丘に聳え、真言関東一を誇らしげに、石段の両側には無数のツツジが、今を盛と、新緑に美を競っている。

順序を越えて、宗澄庵に入席。この席は、当主静斎氏が岳父追福の為、造営護国寺に寄贈 今日其の席開きである。宗澄庵木額は、静斎氏より余に依嘱され、鎌倉建長寺管主の揮毫されたもの  
自分は快諾制作の上、静斎氏に寄贈した。

ここで序に誌したいのは、護国寺塔中内各茶席即ち、不昧軒、円成庵、化

○遠州会、芝田中邸に於る 四月十九日

p 56

芝葺手町田中邸はかつて天下の糸平と迄称えられし富豪<sup>(31)</sup>の迹とて、芝の市中に高台の勝地を占豪莊の邸宅。庭広く瀧あり、想像外の豪華ぶり、遠州会が同家で催すもうべなりである。

門を這ると正面に瀧を眺め、鬱蒼たる老樹のそびゆる溪流を見ながら幽谷を登ると、巨石重畳自然の美は、これが都塵市中にあるかを疑ふばかり。石橋を渉ると一望の芝生に出る。母家を右に望む小亭あり今日の席持、竹内有<sup>(32)</sup>竹君の席である。

△床に小瓢 花 入 縣宗知歌銘 見ぬ星の遠山桜咲きこめて 花 鉄せん  
花に嬉しき風もありけり 姫百合

書院 後鳥羽院筆 遠州倉帳、お茶抜き（マ）の軽き 重き  
遠島百首の帖 飾付

ここを出て、右に卯の花咲きほこる流れにそい、龍巢庵に入席す。

庵主は財界一流の数寄者、藤原銀次郎翁一睡庵氏である

△床に 松花堂筆 遠州の賛 過去よりも未来に通る一ねむり の名幅  
休庵師の像 雨ふらば降り風吹かばふけ

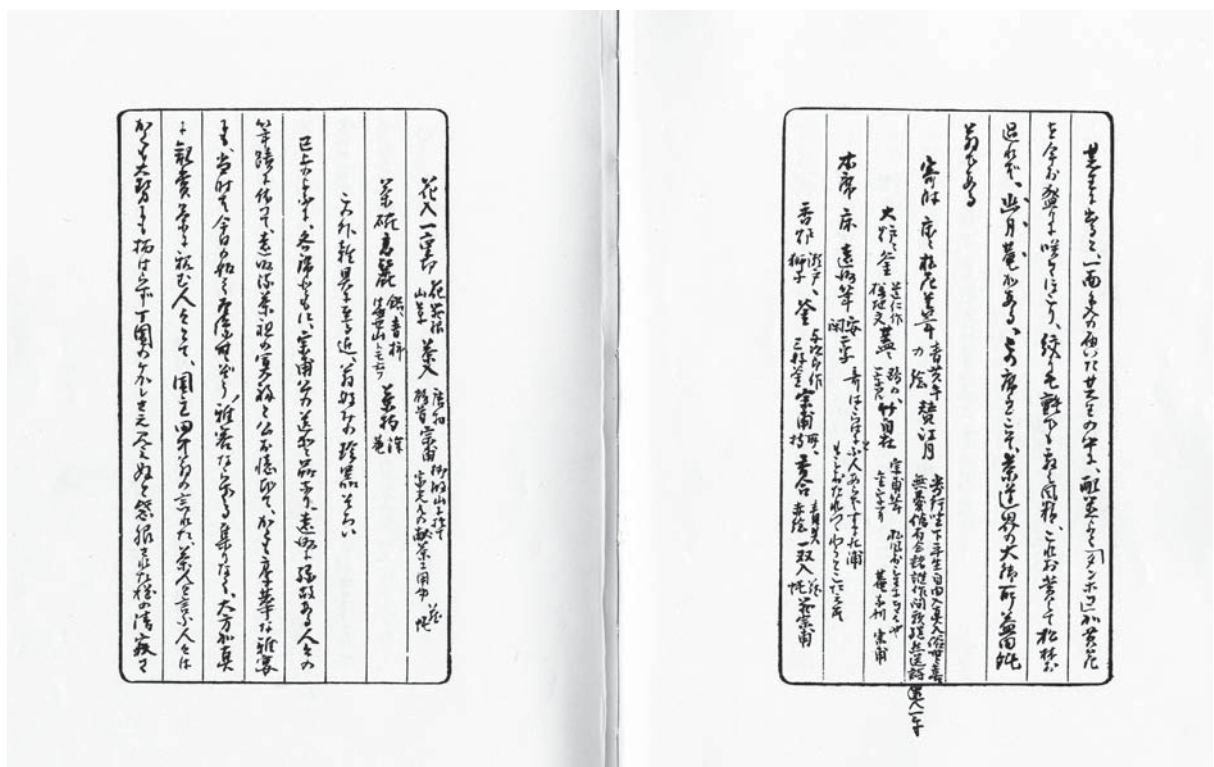
花入 名 古銅に花、香合 呉洲 茶入 橋姫手、  
物 名 松皮菱 名布引

茶碗雨漏 名 茶杓 遠州 水指丈八失念  
無二物 作

遠州会にちなむ、前席と共に縁り深きお道具の組合せは言ふ迄もなく、松花堂の物と言い、花入、遠州作茶杓の美、茶入茶碗に至る迄 流石暁雲藤原翁のお席と拝見した。翁の得意や知るべきとなる。

勿論黒幕参謀に山澄のあるは、知る人ぞしる。

元の芝生を広間に這ると、こここそ遠州会に因縁深き、遠州公の流をつと  
う遠州流宗匠、小堀宗明君の持席。<sup>(33)</sup>



「遠州会、芝田中邸に於る」昭和5年4月19日  
影印本より転載



茶席に動坐して、有合せの茶具で淡茶を振舞った。田辺君坂井老人ハ茶に堪能し外古美術特に、蘇山君と共に仏教美術に造詣の深い丈、これらについて話題はつきず、窓外雨声を聞き夜のふけ行くも忘れ十一時散会した。

○第三回波瀾澄会 三月廿七日 夜会

P 52

出席者ハ 菅原君 横井半三郎(28) 君中川君 守屋君 余

席上話術巧者の山澄氏の慢話術に、腹をよらし、横井夜雨氏の博識旅行家でもあり茶趣味も豊であることから、話題も花咲き、辻永画伯が十六才頃より写生を始めし、草花帖完成の挨拶披露などがあり、食事ハ新橋花月吉喜調理の弁当に、菅原君持ち出し「キワダ」の刺身とであつた。

席にハ探幽 破墨 横物、花 籠 花 白百合、にて

享一君のお手前で淡茶が催された。この日本席にハ

抱一門人の折雛張 干 陰 花 青磁 七官 花 桃花に 紅百合

床脇 雛道具、御所車、が飾られてあつた。

三月桃の節句気分を祝されしも、春陽の近づくを感じて散会。

○吉田白雲居氏の煎茶会 四月廿七日正午

P 54

白雲居主が、一ヶ年余をついやし、高輪南町の新邸に於る初の煎茶雅宴が今日催された。茶道の盛りと共に、スタレ行く煎茶道にハ、都下一人者である氏の催しとして興味と期待を持って時刻出席した。

相客は 魯堂兄夫婦、大野純阿(30) 坂井老人、余

広間寄附 床に 山陽筆書幅 蓑盆 火入木米祥瑞写

主人の案内で庭に下る。庭には奈良時代練塔一基が狭い庭にドッシリと寧楽時代の古色を帯びている。破風に不味公筆喫茶去三字の木額が掲げられてある。

床にハ 竹田筆 三春云々 幅

懷石ハ日本橋春日の庖丁で美味をつくされてあつた

中立後飾付ハ 涼焔 湯沸 ショ 水指 南蛮 茶入 唐物青貝 塔の字アリ

瓢杓 梅逸 茶碗 腰 急須 孟 底に玉川珍トアル

瓢杓受けに 金銀鍍金 飛遊文を 用いられ、主人の手前で苦味をススツタ

次いて広間に移ると、床に雲華筆蘭竹 山 讀 書院文房飾

硯ハ 宋 水入 沈存周 墨架 青磁一 筆堆朱 筆架 琅玕曲玉 印材数果

この会宴間、田中親美老もこられ、畑違ひながら、趣味にかはりなく色々饗応あり散会した。

炭手まいがあり懷石、

汁 三州味噌  
若菜 向 鯛  
昆布 器 柿右衛門  
桃なり 碗 白魚シンジ  
鴨の切肉青菜

焼物 生煮  
外一 強魚 カレイ  
焼 八寸 鰻ムシ、  
百合、カラスミ 湯吸物 フキノ  
トウ

香の物、酒器 禾目メン取  
那子染附蓋 徳利 備  
前 杯 染附芦雁  
刷目

菓子、越後屋 バツ 饅頭

小清の包丁<sup>(19)</sup>とて申分なき調理に一度腹をみたし 中立<sup>(20)</sup>  
元の  
寄付

銅羅七点で再入席すると

向掛にハ不昧公作尺八に花 ムシガイに  
山椿 が露をおび見事に挿れてある

水指 尹部  
耳附 蓋 ハン  
ネラ 茶碗 塩  
筒(ママ) 茶入 松時代  
金輪寺 大ぶり

茶杓 藤村  
唐軒作 銘わたまし<sup>(20)</sup>、などの道具組で濃茶が練られ一同服合し、広間へ

との主人の挨拶に、打水に潤いのある露地を順次広間に入席 床には去年團  
家から贈られたとの主人説明である

西本願寺伝来三十六人集の内 貫行集が掛られ<sup>(ママ)</sup>

床脇に 古  
銅 花入 花牡丹一輪に古枯を深ミ 遠州好 水指棚、モノハ  
松花堂筆山水絵

水指 染付  
園草 三足、釜 古  
唐津 茶碗 熊川  
替 克徳作楽

茶杓 純翁作  
名浜松 歌名 香合 薩摩  
獅子の絵

淡茶は美代さん代点であつた、

兄としては、其の頃より茶の道にハ最も高潮に達した時代、自己の持つ数寄

屋建築及造庭の妙技は團さん初め著名の数寄者に重宝がられた時代であつた。

今夜の茶も新席開きにふさわしき道具組、殊に立春、茶杓銘わたましは蔵造りの意でもあり、正客にとつても芽出たき心入であつた。  
茶菓の振舞に歓談をつくし十時散会した。

## ○自庵敷瓦席の小集 二月九日夜会

芸苑巡礼会同人堀口蘇山君<sup>(21)</sup>から、巡礼会員中の少数では非一會貴庵に押か  
けたい、主唱者は、美校の田辺孝次君<sup>(22)</sup>だとの事で心よく引受け今日催すこと  
にした

来会者ハ 田辺孝次、同泰<sup>(23)</sup>君  
堀口蘇山 坂井久波 不来者 鎌倉芳太郎君<sup>(24)</sup>

夜会といえ共、茶趣味にうすい美術家として三時にハ一同参集、其頃自庵は、  
茶席、居間としては水屋台所の外、奈良西之京薬師寺古材大円柱を中央に敷  
瓦に大炉を囲ふ土間式以外しかなかった<sup>(ママ)</sup>。

敷瓦に通した一同は、竹皮円座に坐し大炉を囲んでの座談、鎌倉君を待合  
せたが姿を見せぬ。田辺君の話でハ鎌倉君は新婚早々この日唯に蜜月のさり  
やらん不参は無理もないのだと言ふ

食事は大炉に大土鍋を掛け、鯛の湯豆腐の趣向、旗亭の普通料理にあきた  
連中として一同大悦び、然も東京風の湯豆腐でなく、九州国風丈に、中鯛三尾  
豆腐七丁と云ふ豪服ぶり、田辺君は泰博士と共に酒豪大満足であつた。

食後故吉川靈華<sup>(25)</sup>画伯所蔵であつた、吉野金峯山出土品など展示研究賞玩し  
た。田辺君曰ク、この趣向で、正木校長夫妻、今泉也軒翁等をお招き願度い、  
其折自分も是非同席したいなどあつた。

し人だけあり美術各門の為今日その初会々合を催された。

#### 出席者ハ

洋画岡田三郎助(5)、辻永(6)、建築菅原栄蔵(7)、硝子岩田藤七(8)、漆芸守屋松亭(9)、中川哲哉(10)、鍔垂香取正彦(11)、仰木、享一(12)、ノ諸氏

主旨ハ美術の向上についての坐談会及び古美術の観賞であつた。

その頃解冊せられた、西本願寺蔵三十六人集<sup>(13)</sup>の内、其十葉が山澄氏の手に歸していた。何れも貫行集<sup>(14)</sup>であつた。私は先年長兄及田中親美翁と共に、奈良に遊びし折、田中氏の東道により、名古屋森川如春<sup>(15)</sup>らと共に西本願寺に行き、いまだ解冊前この冊子を参観した。元此冊子は、皇室御所蔵であつたのを、室町時代即ち応永の乱已来皇室の衰微甚しく、畏くも先帝の御葬儀さえ行はれない程に武門の横暴時代であつた。その際西本願寺法主よりその費用とした黄金一万両を献上申上た。これに対する御礼として下賜せられたのがこの三十六人集である。かかる由緒ある貴重品も、永く倉中にうずもれしまま最近に至る迄、寺院ハ元より一般に知る人もなかつた。

二三年前初めて発見世人の一部を驚かしたが、近來古筆歌集の世上に持囃るよふになると共に、西本願寺の財政窮乏からこの集の内、貫行集と伊勢集の二冊が七十万にて売払はれ田中親美の手に依つて解冊せられた訳である。この世話役こそ益田鈍翁で、数寄者有力者と一部骨董商に分割されたのがこの山澄家の十葉である。

この冊子の用紙こそ、他に類のない壯嚴美と色紙の破継、段継などの巧妙さは、ただただ驚異と云ふ外はない。岡田画伯初め初見の人々は目を見るばかりであつた。この外同家蔵行成高野切にも、台紙に飛雲あり。それらにつき岡田氏の見解談などあり食事となる。

食事ハ中華料理の珍味。食事が終り、会名の選定あり。辻氏の指案で、波満澄会と名称決定。

階上茶席にて享一君の御手点で淡茶振舞

床 道風継色紙、

脇 金欄手仙蓋瓶子、白釜 古芦屋  
玉 菊地文

茶碗茶入は

主人 不問 の手造

茶が終り岡田画伯の琉球染織<sup>(16)</sup>についての染料に対する講話などあり一同歎をつくして散会時に十一時、家外ハ折からの雨、自動車の便をかり、岡田、辻氏、菅原君らと共に同家門前にて別る十二時。

#### ○魯堂新席の茶 二月五日 夜会

長兄魯堂が原宿に居を構えた当時の茶席は、数年前米国ヒラトルヒヤ博物館長来朝の折、切望せられ、解体移譲した。この跡に新築した新席開きが催されつつあつたが、今日我らも其招きに応じた。

相客ハ

吉田白雲(17) 夫婦、夫人の父坂井久波(18)  
余ノ五人

吉田白雲氏は煎茶家であり、茶道にハ縁ハ薄いが、夫人は茶に嗜みもある。吉田氏を今日招きしは、吉田氏が高輪に新居を定め、其の新邸建築を長兄に依頼、茶室共に落成した関係からで、其の紹介者である自分も同席した訳。白雲氏を先達に入席

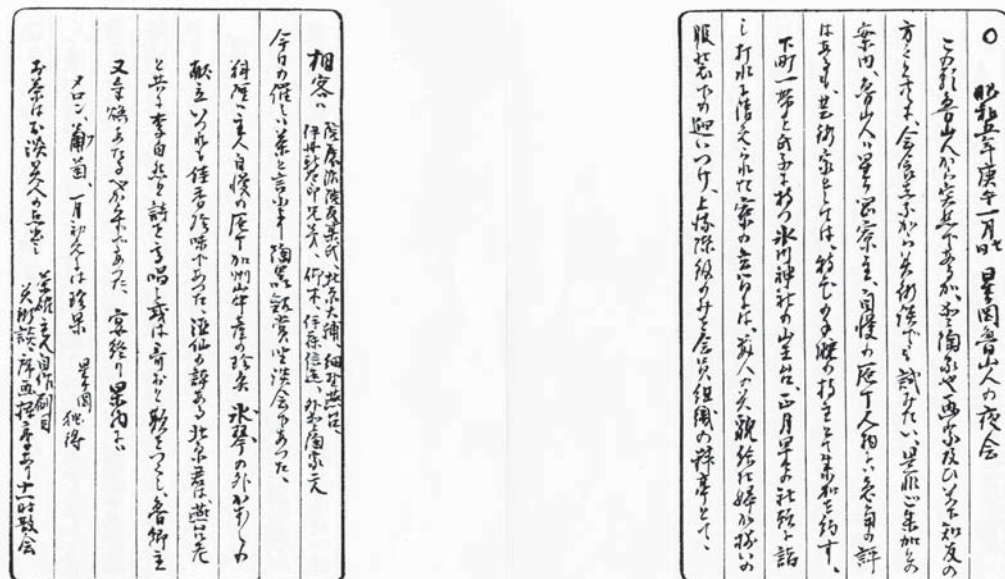
寄附

釣棚に 雪月花 時絵 箱 梟の 笛 と云ふ取り合せ

祥瑞香煎入 鈍阿焼波出 唐物独楽丸盆上 長 炉 に手取釜

本席床 元 富士の 画 釜 天猫 阿弥陀堂 香台 織部六角 菊模よふ





「星ヶ岡魯山人の夜会」昭和5年1月7日  
影印本（味岡敏雄編、平成9年発行）より転載

○昭和五年庚午一月<sup>七</sup> 星ヶ岡魯山人の夜会

（影印本上巻の頁番号）

P 39

この朝魯山人から突然であるが、愛陶家や画家及び貴下知友の方々と共に、会食しながら美術談でも試みたい、是非ご参加との案内。魯山人は星ヶ岡寮主、自慢の庖丁人物には兎角の評はあるも、芸術家としては、特色の手腕の持主として参加を約す。

下町一帯を氏子に持つ氷川神社の山王台、正月早々の社頭に詣り打水に清められた寮の玄関には、数人の美貌給仕婦が揃いの服装での迎いつけ、上流階級のみを会員組織の料亭とて、

相客ハ 院展派院友某氏（北原大輔（2）、細野燕台（3）、伊丹新太郎兄弟、仰木、伊藤信造（4）、外愛陶家二入

今日の催しハ茶と言ふより陶器観賞坐談会であつた。

料理ハ主人自慢の庖丁加州山中産の珍魚 氷琴の外かずかずの献立いづれも佳香珍味であつた。酒仙の評ある北原君は、燕台老と共に李白然と詩を高唱し或は歌をと飲をつくし、魯郷主又気煥あたるべからずであつた。宴終り果物にハ

メロン、葡萄、一月初めには珍果 星ヶ岡独得

お茶はお淡 美人の点出し 茶碗主人自作刷目 美術談、席画揮毫あり十一時散会

○波満澄会 初会 浜町山澄家 一月廿九日夜

P 41

茶器骨董商である、山澄力蔵氏は厳父力蔵翁の業をうけ都下有数の茶器商であるのみか、現代美術工芸にも一見識の所有者で、個人主催フランス現代美術工芸展を府美術館に催し好評を博したのみか、斯界にも大いに貢献され

## 『雲中庵茶会記』翻刻稿②

後藤 恒  
岩永悦子  
宮田太樹

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、第一冊の後半及び第二冊全ての翻刻稿を掲載する。

内容は、昭和五年（一九三〇）一月より同十一年（一九三六）十一月までに政斎が出席した茶事や、自庵「雲中庵」などで主催した茶事を中心とする記録である。北大路魯山人に始まり、兄・魯堂、益田鈍翁、團狸山、原三溪、そして松永耳庵も登場する。柳瀬荘に隠居し、茶の湯三昧の日々に入らんとする頃の耳庵の茶事の様子もうかがえて興味深い。

前回に掲載した本書序文の書き出しから判明する通り、政斎が本書の執筆に着手したのは昭和二十六年（一九三一）のことであった。膨大な量の日記から取り出した二昔も前の冊を片手でめぐりながら、趣味である茶の湯に関する記録を見つけては、時間も忘れて一心に筆を走らせる著者の姿が想い浮かぶ。

今回の掲載分では、惜しいことに昭和七年（一九三二）十月頃から同十一年十月まで約四年間に及ぶ期間の記事が抜け落ちている。その理由については、基とすべき当該期間の日記を亡失したためであると第二冊の末尾で説明されている。

（ごとうひさし 福岡市美術館主任学芸主事）

（いわながえつこ 福岡市美術館学芸課長）

（みやただいき 福岡市美術館学芸員）

### 凡例

- ・ 翻刻にあたっては、左記の影印本を底本とした。
- ・ 仰木政斎著・味岡敏雄編『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）
- ・ 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- ・ 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- ・ 変体仮名は現用字体に改めた。
- ・ 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。
- ・ 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。
- ・ 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに（ママ）を付すか、註記した。
- ・ 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- ・ 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- ・ 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- ・ 判読不能の文字は■で示した。
- ・ 判読困難な文字について推定したものは□で囲んだ。
- ・ 前号で註記した事項については、註記を省略した。

## 凡例

- 各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記になった。
- 各論文中の著作物については『 』、団体名については〈 〉、作品名については《 》でくくった。
- 註の参考文献については概ね下記の順で標記した。  
日本語論文 執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ  
欧米論文 執筆者名“論文名”，編著者名，著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ
- 註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと標記した。

## 福岡市美術館研究紀要 第6号

2018年3月13日印刷  
2018年3月13日発行

編集・発行 福岡市美術館  
〒810-0051  
福岡市中央区大濠公園 1-6  
PHONE：092-714-6051  
印刷 株式会社四ヶ所  
〒838-8512  
朝倉市馬田 336

## ■ 表紙写真 ■

紅型衣裳 黄地横雲枝垂桜流水菖蒲文

Costume, design of mist patterns with drooping cherry sprays,  
streams and irises on yellow ground.





ISSN 2187-6894

# BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

## No. 6

---

|                                                                                                        |                                                |    |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|----|
| Portraits of the Artist's Wives<br>by KISHIDA Ryusei and KIMURA Shohachi                               | YOSHIDA Akiko                                  | 1  |
| Report: Transport for works of Fukuoka Art Museum collection<br>before large-scale renovation          | WATANUKI Yuki<br>MIYATA Daiki                  | 11 |
| Research Material: Kai Mihachiro in Manchuria<br>Drawings and Articles Placed in the Magazine "Kyowa"3 | NAKAYAMA Kiichiro                              | 19 |
| Transcription of "Unchuan Chakaiki" -<br>The Tea Party Records by OGI Seisai 2                         | GOTO Hisashi<br>IWANAGA Etsuko<br>MIYATA Daiki | 71 |

Edited by Fukuoka Art Museum  
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan